

新年祭

一 鶴ヶ嶺神社御祭日

通達留

一 權左衛門親隱居樺山兵六妻昨四日死去ニ付、  
 從四位様實御叔母之御續ニあり得共、  
 御家御相續付半減之御忌服ニ有、御忌五日、御服十五  
 日被遊 御請け得共、表立有慎申渡ニ不及外條、此旨  
 向々ニ承知仕外様可申渡事、

辛未正月五日

傳事

(表紙)

忠義公	久光公	自正月
		明治四年
		至十月
追記雜錄	卷百七十九	

一 刀劍之技術者、全躰 皇國尚武之英風精心之所寓ニシ  
 て、萬國ニ卓越したる儀ニあり得共、乍生れ堪能之者  
 者無之道理故、古來幼より老ニ至り其藝を相嗜、勉々  
 致研究來たる事ニ有、今や銃砲熾成時世と雖、遠達近  
 守之術不可偏廢譯合故、既ニ火術を專要とする暎國、  
 尚兵隊中操劍之規則有之儀者一同聞知之通外間、此度  
 右技術引立方之儀軍務局委任被仰付候、就る者諸流百  
 般ニ有他流之者より者存分差引調兼外情實も可有之外  
 得とも、元來銃刀之兩術者兵士左右之翼にて、此節柄  
 實戰之掛合ニ基キ致勉勵外様師家談合可致指揮旨、軍

通達留

(本々書ハ一〇〇一の一号文書ト同文ユエ略ス)

二月五日  
 一新嘗祭  
 十一月十八日  
 右者當年御神事右之通被仰付外條、向々ニ可申渡外、  
 辛未正月十日 知政所  
 明治四辛未年頭御規式之次第通達留ニ有之、三年ニ有之、略ス

務局并師家に申渡、向くにも可申渡り、

辛未正月

知政所

一洋學局

右被召建、學頭始諸官被廢、

一本學校

右洋學局跡に被召建、管轄等之儀外學校同様被仰付

り、

鳴津隼人元屋敷内に

一小學第一校

生産方引續に

一小學第二校

右貳校此節新に被召建、本學校管轄被仰付り、

三等官

四等官

一學頭

一一等教官

五等官

六等官

一二等教官

一三等教官

七等官

八等官

一一等副教官

一二等副教官

九等官

十等官

一三等副教官

一調役

十一等官

一筆者

右之通本學校教官并諸官被召建り、

六等官

八等官

一小學頭

一一等學教授

九等官

十等官

一二等教授

一三等教授

右之通小學校教官被召建り、

但筆者之儀本學校之内に差分相勤り様被仰付り、

右者是迄洋學風、偏見固陋弊有之、國務に通し世用に

相立り場に到兼、方今

皇政御一新、文運開明之際難被差立譯合付、右之通廢

立被仰付り條、舊習を一洗し、皇漢洋三學を兼脩し、

普通之學問を被開、天下國家之有用相成り人材輩出、

皇國維持之基を被爲立り

御趣意に付、其段深く體認し屹と教官以下之面々に申

渡、御藩内一般可申渡り、

但諸生入學之手續等も追可申渡り、

辛未正月十日

知政所

1002の4

一出水・野田・高尾野・阿久根地頭

有馬新助

一鹿屋・始良・大始良・高隈右同、

加藤權兵衛

右之通線替被仰付、

一長嶋地頭

伊集院直二

右之通被仰付、向、可申渡、

辛未正月十日

知政所

(本文書ハ一〇一の二号又書ト同文ユエ略ス)

一小學校諸生四百人

但八歳より拾八歳迄

内九十人、是迄洋學諸生被召入り、

右執事可爲無祿、左、是迄和漢洋學館又若兵

士學問所等、出席、御扶持米被成下、向若是迄之

通被成下、

右之通此節被召建、小學校、御城下士族子弟之内、

入學被仰付、間、志之者若父兄又若近親之者、廿三日

1002の8

一四等指南役

但九等調役助次

右之通被召建、條軍務局、申渡、可承向、可申渡、

1002の7

限向達、相付願出、様、早、可承向、可申渡、

本文願出、節、若時、月日并順番相記置取束、來廿四

日限傳事、可差出、事、

一生子隱殺之父母者、其所引廻之上流罪、

一右を訴出、者者、誰、こゝも屹と褒美、

一右を隠し居自然脇方、於露顯者、親族・五人組重キ料、

右若氏子繁息するハ神道本意、厚生之道若政教之

第一、二、ハ處、以前、ハ偏卑刻薄之輩、故、<sup>コトヤラ</sup>生子不致養

育向も有之、然る、御一新以來、右等之非人道之大罪

を犯、者若決、無之、事、若、得共、刑賞若邦之常典、

人道を維持する之要務、ハ故、以來右之通律法被定置

、條、糺明局・監察局、申渡、御藩内一同、早、不洩

様、可申渡、

辛未正月十日

知政所

辛未正月十二日

知政所

一今般鹿兒嶋中諸屋敷御檢地被仰渡り付る者、上者練兵場初り、下者軍務局初りなる、雙方一手ツ、被差出、諸局之御用地等者來ル十八日方相勤告り、尤細く者先達る方追々申渡置通り間、其心得る罷居り様向くは被仰渡度、此段申出り、以上、

未正月

民事局

右之通被仰付り條、向くは可申渡り、

辛未正月

知政所

一明十九日四ツ時御供揃、御着服御麻袴被爲召、櫻之間・御中門・矢來御門 御出、

照國神社・鶴ヶ嶺神社・龍尾神社・上之原御墓・常安峰長谷場神社・長谷場西御墓に 御參詣、夫より北御門・櫻之間・御中門方被遊御歸殿告り條、向くは可申渡り、

辛未正月十八日

知政所

一員外諸生

俱拾八歳以上

右此節被召建り小學校に入學被仰付り條、望之者者勤方之有無・年輩相記、本學校に相付願出り様、向くは可申渡り、

辛未正月十八日

知政所

一地頭副役之儀御吟味之譯有之、以來別段不被建置、民事奉行・同副役見習之間を以夫々分任被仰付り條、是迄之副役をも致兼掌、每事地頭申談、一昨年來追々被仰渡置り趣者勿論、此節被 仰達り御趣意貫徹、職掌致勉勵り様被 仰達り條、民事總裁・地頭に申渡、可承向くは可申渡り、

辛未正月廿五日

知政所

御布達留

御藩内村落庄民舊來之弊習致深淺、未神祇道 御一新之御趣意に表不相叶り付、從來祭來り十二夜亦者庚申祭等之儀、基佛家之餘習付致廢止、以來毎月初午之宵に神比神祭いたしり様被仰付り條地頭に申渡、可承向くは可申渡り、

但宮比神之御神徳者、第一上ニ奉公して過なく、壽命を保ち身ニ無恙、親子・夫婦・兄弟・朋友之中和睦し、家業・職業衆人之愛敬を得て、家門之繁昌を授け給ふ神也、

明治四年辛未正月廿日 取次 上村休介

通達留

一諸技藝師家私塾相開ケ者、其地方官之許可ヲ可受ケ事、

庚午十二月 太政官

一諸技藝師家私塾相開ケ向キ、生徒入塾之節身元所糺シ、

地方官添書無之者入塾差許ケ儀不相成ケ事、

但塾生増減明細書記し、月末地方官ニ可届出ケ事、

庚午十二月 太政官

一農工商之輩、許可無之猥ニ帶刀致ケ者有之趣、以之外

之事ニ外條、地方官ニ於テ屹度取締可致ケ事、

庚午十二月 太政官

一在官并有位之輩名稱之儀、自今官位・苗字・實名相用

外様御達ニ相成ケ得共、平日往復文書等ニハ、是迄之通略式相用ケ儀不苦ケ事、

但同苗字・同官位之者有之外得共、實名相加ヘ區別可致事、

庚午十二月 太政官

一在官之輩是迄苗字・官相署シ來ケ處、自今官・苗字・實名相署シ可申事、

但非役有位之輩同様位・苗字・實名相署シ可申事、

庚午十二月 太政官

一諸技藝師家私塾之儀ニ付、別紙兩通之通御達相成ケ條

其旨相心得、今後管轄中之者共各地方師家ニ入塾之節

ハ、其爲人ヲ糺シ添書可差遣ケ事、

庚午十二月 太政官

別紙六通於東京被 仰渡ケ段申來ケ條、向ケ不洩様可申渡ケ、

辛未正月 知政所

一盜賊又老吳變之儀有之、會所詰糺明方ニ届申出ケ事件

1004の2

1004の1

者、以來巡察方へも同様速ニ届可申出旨、可承向に可申渡り、

辛未正月廿七日

知政所

通達留

一 地頭之職掌者古來より治亂重任、殊一昨年來被 仰出  
 けケ條ニ基キ、夫々心得も有之筈り得共、逐日世態不  
 容易形勢ニ立到り、且此節御檢地等も被 仰出上者、  
 一層厚相心得爲可申、更ニ左之通被仰付り、一旦有事  
 之日ニ當め、士民職業之勵ニ匹敵之國ニ劣りぬ者國非  
 其國へし、故に士を支配するものは士之分を盡させ、  
 農を支配するものは農之分を盡さする事能はさるは有  
 司之大恥なり、抑士ハ治に國家之政教を助け、亂ニ貪  
 暴之賊を征し、農ハ治亂共士之保護を仰り國力助るの  
 ミ、故に中古以來地頭之職分者管轄内之士民をして各  
 令得其所にあり、勿論昔者兼ぬ支配之兵士に將として  
 遠征をも相勤り處、方今之兵制者部伍之定數有之、地  
 頭壹人管轄内之常備兵ニある者一大隊ニ到兼り故、先ツ  
 遠征者不調事候得共、自地戰に至る者常備・豫備之惣  
 勢を以、方鎮之郷々致指揮り儀勿論ニけへハ、兼る學

問・武道を勵ミ士風を正すは勿論、變時之手當向萬端  
 自身より可相勵事ニけ、

一 御檢地ニ付る者民事局之成規遵奉者勿論、奉行差入之  
 上者時々出會、檢地之御作法并以來其郷ニある心得可相  
 成件々委悉談合致帳留、爾后交代等之節者土地人民地  
 方明細帳次渡し、聊たり共憲法不相壞様可取計り、

但地頭交代之節者新地頭其郷に差入り上、右明細帳  
 等次渡相濟りハ、雙方より届可申出り、

一 御建山者御定法も有之事り得共、其外ニあるも數木之大  
 木切出り節者民事方見分之上可得免許り、

但百姓屋敷廻其外御定法之租稅地ニ自分仕立之分者  
 先度御定通、

一名山・大川者國家光氣之存する處、匹夫之私有ニ非る  
 は勿論故、山海之椽キ新ニ相開り分者時々民事局に可  
 伺出り、

一 民政者第一信義を以行ハるゝ事り付、不得止事之事に  
 非されは既布之定法相變間敷、尤無據致改革度事件り  
 ハ、小事たり共民事局に可申出り、

一 土地之位ニ從る相當之租稅なけれハ、國力不相立は人  
 々知處ニけ得者、以來者開拓地迎るも、御定法鋤下年

1006

限之外不相應之下免申立り共、決り取揚間敷り、

但凶作之稅者民事局に可得差圖り、

一土着士族御軍役高割を以常備之兵員被相定り上者、以來所軍役用と唱へ、他之訴詔申立り儀可成丈遠慮勿論之事、

但官私之ため其郷に取起度儀者不差置可申出り、

一勸農之儀播種・收穫・培養術に到り、夫々民事局より申渡り儀者勿論、自然於外方致傳習り事件之内、實驗之上取興度儀者ハ、民事局に申出致免許り様可取計り、

右之通被 仰達り條、地頭并民事局・軍務局に申渡、

可承向にも可申渡り、

辛未正月廿七日

知政所

通達留

一此節兩小學校被召建、幼若之子弟多人數致出人事り付、夫々校内之規則も有之、第一禮讓を以致交際儀にり得共、萬一途中往來之者者不圖爭論等相生し、應變之所置取違暴激之時機立到りる者、學校御取起之 御趣意不相叶事り間、屹と取違之儀共無之様、親戚より兼り

厚く可致教諭り、右に付る者見聞をも掛置り條、若不

法之行狀於有之者、其身者勿論父兄等へも屹と可及沙

汰り、此旨申渡、向りにも可申渡り、

辛未正月晦日

知政所

御系圖 忠義公

明治四年辛未二月

詔褒下忠義遵奉

朝旨、藩政改革由至練兵盡り任之事り、

1008

御系圖 忠義公御子

一哲丸公

一房姫

一女子

清姫 黒田長成室

明治四年辛未三月八日生於鹿兒島、母齊彬女寧姫史母

山崎、拾女

1009

御布達留

一今般

勅使御下向、實父久光

宸翰拜戴被 仰付、病躰勉強仕、當春中 闕下ニ拜趨  
可仕旨御請申上置外處、病痾猶順快不仕外ニ付恐縮至  
極奉存外得共、當秋迄御猶豫被成下外様奉敷願外、依  
之臣忠義、久光ニ代り上京仕、奉謝

天恩度奉存外間、宜敷御執奏奉願外、以上、

明治四年辛未三月三日

鹿兒島藩知事

島津忠義

辨官御中

御附札

願之趣兼る厚キ御沙汰被爲在り儀候得共、不得止事情  
ニ付被聞食届外間精々療養相加、其内聊得病間外ハ、  
早速上京可致外、就る者忠義願之通早々上京可致候事、  
從三位様爲

御名代從四位様御上京之儀、御別紙之通御願立被遊外  
處、御附札之通被 仰出外、各奉承知り様面々江早々  
可致通達外、

四月

知政所

御布達留

一戊辰以來

朝廷之御規礎不致確定外處、此節厚キ 思召を以、  
從三位様被爲蒙

勅命外得共、いまた 御平快不被爲在りニ付、  
從四位様被爲代

闕下江御拜趨被遊外、就る者

御兩殿様兼る之 御赤心相貫、

皇國興隆之大端可相立機會表立至、不容易御場合ニ外  
間、御供方者勿論一同右之 御越意奉體之、盡至誠可  
致勉勵旨 御沙汰被爲在り條、各奉得其意無緩怠可相  
勤外、此旨家令江申渡、向々江及可申渡外、

明治四年未三月

知政所

1011

一詔書寫

故參議廣澤真臣ノ變ニ遭ヤ、朕既ニ大臣ヲ保庇スル事  
能ハス、又其賊ヲ逃逸ス、抑維新ヨリ以來、大臣ノ害  
ニ權ル者三人ニ及ヘリ、是朕力不逮ニシテ、 朝憲ノ  
立タス、綱紀ノ肅ナラサルノ所致、朕甚タ焉ヲ憾ム、  
其天下ニ令シ、嚴ニ搜索セシメ、賊ヲ必獲二期セヨ、

明治四年辛未二月



別紙

詔書之通被 仰出候、今日 朝憲ノ不立、綱紀不肅ハ、  
全ク實美等其職ヲ不盡ニ由レリ、苟モ大臣ヲ殘害ニ及ヒ  
候賊徒ヲ逃逸シ、既ニ五旬ニ及ヒ、未タ捕獲ニ不至、實  
ニ恐懼ノ事ニ候條、篤ク 詔書ノ旨ヲ體シ、嚴密搜索ヲ  
遂ケ、速ニ捕獲シ、可奉安 宸襟様、盡力可致候也、

辛未二月

右大臣實美

1012の1

通達留 御履歴中ニアリ

鹿兒島藩知事

朝旨ヲ遵奉シ藩政改革行届、殊ニ練兵其任ヲ盡シ候段、  
大納言岩倉具視ヨリ及 奏聞、  
御満足被爲  
思召候旨  
御沙汰候事、

二月

島津從三位

朝旨ヲ遵奉シ藩政改革行届、殊ニ練兵其任ヲ盡シ候段、

大納言岩倉具視復命被

1012の3

聞食候、且從來知事ヲ輔翼賛成之功亦不少、  
御満足被爲

思食候旨

御沙汰候事、

二月

鹿兒島藩

其藩歩兵四大隊・砲兵四隊、爲

御親兵被召出候間、早々精撰可差出候事、

但兵部省管轄之事、

辛未二月

太政官

右之通被 仰出候條、此旨一統奉承知り様向々可致通  
達、

二月

知政所

1013の1

通達留

一四等教授

但十一等官

右之通被召建、條本學校に申渡、向々にも可申渡、

辛未二月十三日

知政所

一日比各郷自火を隣傍數十家又者數百家も及延焼、其中  
 こそ焼亡之者も有之、素と不測之事といへとも、畢竟  
 ハ不慎輕忽こ起り、其遺害を被り實こ無慚困迫之至り、  
 依の民間こおひて火ハ専ら嚴肅取始抹いたし、聊寛疎  
 之儀共無之様、乍此上失火於有之者、其本人者相當之  
 科こ被處度り、間こそ差火も有之り付、是又平常稽察<sup>ホマ</sup>  
 局猶又嚴重可行屈事り間、夫役吏こおひてハ今一涯心  
 思を盡し、煩亂之者ハ無用捨捕獲糾勸之上、其形行こ  
 從ひ當局へ差廻り様、尤致差火り者者斬罪こ可被處旨、  
 早急向くは被仰渡度り、以上、

辛未二月

糺明局

右之通御決定相成り付、向くは可申渡り、

二月十九日

知政所

鹿兒嶋近在借地村々屋敷成こ付方限分取調帳

草牟田村

一池之平西田村境より加治木甚右衛門屋敷掛より左右諏  
 訪左衛門前通横小路川面迄、同所より引續西田萬次郎  
 前通小路を川面迄、左右同所小路より四元彦兵衛前通  
 川面迄、

草牟田村本通より左手之方小路

一右四本彦兵衛前通小路より永山良助・有川仲兵衛前通  
 小路川面迄、

一御用屋敷前通小路を岩元慶七・野村源五郎前通小路左  
 右川面迄、

一野村善太夫・大原仲左衛門前通小路左右田地涯迄、

一隈元源五左衛門・山田直左衛門前通小路田地涯迄、

一松山直八・竹之内新兵衛前通小路左右田地涯迄、

一本田新左衛門前通小路左右白坂直助角田地涯迄、

一本脇善之助前通小路左右田地涯迄、同所より野元市右

衛門・田中五左衛門角田地涯迄、本通を右手之方小路、

一平田善太夫邊小森良助角より本隆盛院下小路押廻り相

良小矢太邊迄、

一松井十郎屋敷小路を中村助七後本四ツ足堂入口右手小

路左右先無小路、

一本四足堂入口左右小路寺師堅助前通川上嘉左衛門角を

押通左右、

一岸良源之進前通小路左右岩城叶二角を押廻り右手方田地

涯迄、

一同所引續東郷才助前通小路より左右黒田平右衛門前通

方森川孫四郎邊、竹内勘助邊より竹内直助前通圖師太郎八邊左右田地涯迄、

一重信勘助・宇宿十郎前通小路松山三九郎角方田地涯右之方に押廻田中新左衛門前通左右仁禮覺太夫角迄、

一松山三九郎角方左之方田地涯押廻シ三原平吉・堀勘兵衛邊田地涯迄、

一相良治部・川崎十左衛門前通小路莊原長左衛門前通左右河野正八郎角方田地涯宇宿孫六郎・松元喜三左衛門邊より稻留笑左衛門邊迄、

一右同所河野正八郎角より左之方押廻シ白濱八郎左衛門前通左右禰寢覺太郎角迄、

一松崎藏右衛門・相良治兵衛前小路左右宮里炸熊角方左之方田地涯押廻シ池上彦太郎邊迄、

一五代正太郎前通小路長谷場七郎前左右田地涯迄、

一梅北新右衛門前通先無小路奥金左衛門邊鎌田直助迄、

武村

一肥田川原より上之町馬場高麗町橋口迄右手之方、

一同所より奥勇助居所下通左右三原善兵衛居所角方武通田地涯迄、

一貧富小路通り田地涯迄、

一奥勇助下通り徳永助右衛門居所前通り左右武通り押廻シ、

一肥田川原筋直通下之園通左右十九文店通同斷、中洲通荒田之方善神王小路迄左右下手方田地涯迄、

一十九文店通り嶋津良馬所入口より小路内左右、

一同所より中洲迄出限方高麗町橋之方左右下手之方田地涯迄、

一下之馬場田地涯源兵衛ヶ洲邊迄、

一上之園武通方海江田武二居所前通左右右手田地涯迄、

一三隅角通出口方荒田村境小路迄押廻シ、

一上之園通方市來四郎居所前通左右三隅角通迄、

一十九文店通方唐湊通左右三隅角通り田畝出口迄左右、

一武之橋口方荒田之方右手田地涯本肥坪藥師堂通迄一通り、

荒田村

一本能學寺小路本向船手新田涯迄左右、

一西田村境本笑學寺邊武筋本壽國寺下邊迄、

一高麗町武通り池田源左衛門居所先無小路内左右、

一右同所より千田七郎兵衛居所角方先無小路左右、

荒田村

一上荒田本通村長役屋敷出限田畝涯迄、左右下手之方田

地涯迄、

一本通方善神王小路左右、中原休左衛門居所出限唐湊田畝出口口之横小路迄、

一本通方村長役屋敷前通伊東善兵衛居所小路通田地涯左右、

一下荒田武橋口邊方右手之方武村借地并本肥坪藥師堂前通左手之方嶋津助之丞居所迄、

一喜入主計屋敷方御船江堀直通橋口彦二居所下通押廻シ八幡社前通北側迄、

西田村

一肥田川原邊蟻尻通伊地知壯之丞居所通田畝出限迄左右、

一蟻尻通方田屋敷通山岡敷馬居所邊迄、左手之方田地涯迄、

一武通ハ本笑岳寺邊迄一通り、

一村長役所下邊方水上筋宮之原小吉居所邊迄左右本通屋敷掛迄、

一武通方新溝筋違橋口迄左右、

一筋違橋口方新溝筋限方平田桑衛居所前押廻小幡甚大夫居所前通田地涯迄、

一倉山作太夫居所邊方東之方後馬場通り左手之方田地涯

迄、

一新上橋口鎌田仙千代居所邊川田將監前通田地涯迄、

一同所方赤松主水居所前通後馬場出限迄、左右通り右手之方田地涯迄、

一新上橋口邊方川水流日置半兵衛居所邊迄、

一新上橋口方草牟田筋川原通草牟田境邊迄、上手之方御城山涯迄、

鹽屋村

一種之口方方鹽屋本通新屋しき境押廻シ船玉神社邊方川上助八郎居所邊揚之濱上通り限、七曲り小路左右ぐわんぐハラ橋口方禪門川限、

坂元村

一後迫筋瀧之上邊迄、

一韃韃冬々筋蛇穴邊迄、

一智恵光院之上方坂元村役所通路筋伊勢仲之丞邊迄、  
一内之丸筋精松八郎右衛門邊迄、  
一花岡野屋しき通横通雙方右野屋敷境迄、

一冷水筋白ケ迫迄、

一城ヶ谷筋草牟田境迄、

一岩崎筋新照院境迄、

今般屋敷御檢地ニ付、近在五ヶ在并鹽屋村現屋敷申請  
被仰付り段被仰渡り付る者、在中士族又者兵器方附士・

足輕等、當分借地之場所都の屋敷成被仰付りる者、過  
分之御高引入者勿論、百姓屋敷迄も相抱譯合御座り間、

別紙之通方限被相定度、左様御座りハ、第一人氣も致  
安堵旁可然評議いたしり間、御布告相成度存申り、此

段申出り、

未二月

民事局

右之通被仰付り條、向々江可申渡り、

未二月晦日

知政所

通達留

一大隊長

榊山覺之進

右之通被仰付り條、向々江可申渡り、

辛未三月七日

知政所

一奏授以上之官并判授之官このも世祿五拾石以上、

右家族養俸不被下り、

一判授之官この世祿五拾石以下、

右家族養俸三拾俵

右者是迄

朝廷之諸官被仰付り面々、世祿百石以下江者家族御養  
料米被下來り得共、右者

朝廷方夫々御宛行米有之、殊ニ奏授以上之職者多分之  
官祿下賜、家内扶助も可相調りニ付、爾后養俸之制右  
之通被相定り條、向々江可申渡り、

辛未三月

知政所

通達留

一今九日曉何者共不知、廣澤參議邸に忍入、同人に深手  
を爲負逃去り趣達

天聽、深く

御震怒被 在り、就る者府下者勿論、近傍地方官ニ於

テ嚴密遂探索、捕縛可致旨

御沙汰り事、

但諸官員・宮・花族家人陪從之者并府藩縣士族卒及

私塾生徒、其他末々ニ至迄一々遂吟味、昨夜より

外出之者刻限・行先キ等委詳取糺シ、早々可申出

り、萬一隱置、後日露顯ニ及りハ、主宰之越度

たるへく事、

辛未正月 太政官

別紙之通從

朝廷被仰渡り條、不審之者入來りハ、留置、早々當局  
に届申出り様可被申渡り、

辛未三月十日 糺明局

1016

御布達留

一當三月中ニ老諸吏變遷期限之處、第一御上京且兵隊  
御親兵之 御沙汰ニ相成其儘被差出候ニ付、今一期限  
酉三月迄諸局共當分之通被差置り條、向々は可申渡り、

但冗員相重居り分老迫り

御沙汰可有之り、

明治四年未三月 知政所

1017の1

通達留

一先般 勅使御下向、 從三位様

宸翰御拜戴、 御召ニ付御病躰御勉強、當春中 闕下ニ  
御拜趨可被遊旨 御請被 仰上置候處、未御愉快ニ不  
被爲至り付當秋迄御猶豫御願、 從四位様御事

從三位様に被爲代、

天恩御拜謝之爲來廿五日 御發途 御上京被遊告り、  
此旨一統に可申渡り、

辛未三月 知政所

1017の2

右老今般就

御上京御供被仰付り條、向々は可申渡り、

辛未三月九日 知政所

1017の3

一房姫様御事御病氣之處、段々被成御療養候得共、 御  
勞倦御増極々御大切り、依之島津珍彦殿一列・二等官  
以上只今登 城、家令ニ相付

從四位様 從三位様可被奉伺御機嫌候、

但女中方之儀も伺御機嫌可被申上り、且御裏に兼り  
伺御機嫌被申上來り面々老、毎之通可被申上り、

一三等官以下八等官以上任職之面々老、傳事に相付可被

奉伺御機嫌り、

右之通向々は可致通達り、

辛未三月十日 知政所

一房姫様御病氣御養生不被爲叶、今日午下刻被遊 御天

亡り、依之嶋津珍彦殿一列・二等官以上登 城、家令

に相付 從四位様 從三位様可被奉伺 御機嫌り、

右外略ス

辛未三月十日

知政所

一房姫様御天亡付る者、諸事御手當向之儀 豐暉姫命御

例より大抵三部通り輕キ方取しらへ、早々申出り様向

くは可申渡り、

三月十日

知政所

右外略ス

一房姫様御諡號

花蔓ハナカヅラトヨフササレノミコト豊房トヨフサ姫命ヒメノミコト

右之通奉稱り條向くは致通達、諸郷にも可申渡り、

辛未三月十一日

知政所

(本文書ハ一〇一六号文書ト同文ユエ略ス)

通達留

一諸局之内被定置り季祿被成下り上者、最初より之御規

定通御心附銀者不被成下り、且嶋方爲引替御金被下り

儀も以來一切不相成り、左りる抜群致精勤御用立り者

に者、別ニ褒賞之典可有之り、

右之通被 仰付り條、向くは可致布告り、

辛未三月十二日

知政所

一此節爲 御親兵兵隊被召出り付る者、追々諸郷之兵隊

も同様被召出場合ニ可立至、夫のみならず事ニ依る者

出兵被仰付儀も可有之り付、愈士氣振起いたし、隊律

嚴肅相調り様一涯勉勵可有之り、就中地頭之儀者何篇

御委任之職掌ニ付得者、兵隊引立之儀も尚更相勵、實

地之効驗相立り處一向可相勤り、依時機兵隊御繰出相

成り節者大隊長之場を以可差出り付、兼其心得を以

練兵之儀も可相貫り、右ニ付る者時々軍務局へも致出

席、兵子引逃之儀者勿論、御手當向等之儀も得と遂吟

味、一定いたしり様可取計り、

右之通被仰付り條軍務局并地頭に申渡、可承向くは

可申渡り、

辛未三月十四日

知政所

一諸郷地頭之儀、管轄内居住所被定置り得共、何方逆も差別無之事り付、以來者居住所不被定置り條地頭に申渡、向くにも可申渡り、

辛未三月十八日

知政所

一日州漉諸紙之儀、基彼表免本、粟代銀差引上納被仰付來り處、漉賃錢及過當百姓者致難漉り處より、漉賃錢御物御計相成來り處、御吟味之譯有之、紙免本に被定置、右免本文に諸局御用辨いたしり仕來に御座り、然に舊職制中日州漉下紙類相用り向者依御役格規則被定置り處、昨春職制御變改以降者諸局定規無之、却る惣入用高以前に超越いたし、殊更今般御藩内大御支配に付る者多分之束數入目之賦、此格代より漉揚迄者、諸失費別段臨時不被相補りる者不叶譯に、依之及吟味にり處政府六官并内官傳事方・外城方之儀者、本局等にも重事取扱之儀と存り付、日州漉被相渡迎も、御用輕事之依御用向者藏方用紙類相用り様、其外本局屬官之向者都る藏方用紙等を以相辨、其内依御用向日州漉不相用りる不叶節者、時々入用之束數會計局に申出、免印を以被相渡り様御治定可被成置哉、且又筆墨之儀

も舊職制中者上中下を以被相渡來り處、近年於向者御本手銀等之内より直買人相成りも有之不相當に付、爾后右躰之儀無之様被仰付度、且又筆紙墨、年中何程入用之譯品位取分ケ、當分之御用向に應し於向く概略取調、此涯會計局に差出り様被仰付度、旁右之通致吟味

り間諸局に被仰渡度候事、

未三月十五日

會計局

右之通被仰付り條、諸向に可申渡り、

辛未三月十八日

知政所

通達留

芝伊皿子大圓寺御墓之事

一月見御墓所

白金瑞聖寺御墓之事

一白金臺御墓所

麻布古川曹溪寺御墓之事

一古川御墓所

右之通此節御稱號被召替り條、向くにも可申渡り、

辛未三月十八日

知政所



1019の2

一從四位様明後廿一日四ツ時御供揃、本學校并小學第一校・同第二校に被爲入、試業 御覽濟之上被遊 御歸殿答外、此旨向くは可申渡外、

辛未三月十九日

知政所

1019の3

一第一郷校

右者高見馬場方限郷校、右之名目ニ官校被召建、本學校管轄被仰付外條、可承向はも可申渡外、

辛未三月十九日

知政所

1020

通達留

一今般 御城下常備隊 御親兵被 仰付、外城兵隊之内 右別册操順之通、 御城下番兵被仰付外條、軍務局并 諸郷地頭に申渡、可承向くはも可申渡外、

辛未三月廿日

知政所

一外城常備大隊

一

南方

一小隊

阿久根

一小隊

宮之城

一小隊

串木野

一小隊

野田

加治木

一小隊

出水

一小隊

平佐

一小隊

岩川

一小隊

二

東郷

一小隊

伊集院

一小隊

垂水

一小隊

栗野

蘭牟田

一小隊

知覽

大崎

一小隊

高尾野

一小隊

水引

一小隊

三

串木野

一小隊

重留

一小隊

五

上莊内

眞幸

加久藤

高岡

出水

蒲生

須木

松山

上三俣

今和泉

四

下莊内

高隈

敷根

加治木

吉利

隈之城

郡山

山崎

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

加世田

南方

七

大根占

申良

蒲生

飯野

出水

田布施

六

下莊内

新城

華岡

宮之城

平佐

志布志

溝邊

横川

高江

伊作

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊

一小隊



山田	國府	百引	恒吉	加世田	下莊内	末吉	菱刈	吉松	宮之城	十二	綾	倉岡	襲山	上莊内	知覽	阿多	勝岡	重留	高岡
一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊

加治木	貳番隊	出水	阿久根	壹番砲隊	清水	佐多	出水	加治木	指宿	吉利	永吉	高山	山之口	喜入	十四	十三	本ノマ、	櫻島
半座		半座	半座		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊				一小隊

下莊内 半座

三番隊

出水 半座

高岡 半座

種子嶋 半座

右者此節四大隊・砲隊四座

御親兵被仰付外付、一大隊・一砲座右之操順を以 御

城下番兵被仰付外事、

一小隊一大隊

但人員四百貳拾四人

一大砲一座

但人員六拾人

一大砲夫卒四拾人

但一小隊五人

一大砲夫卒八人

惣人數五百三拾貳人

通達留

一今般其藩兵隊

御親兵被仰付、當處に罷出外付の者、舊名古屋藩邸に

屯營可致、此段相達外事、

辛未二月

兵部省

鹿兒嶋藩

一今般其藩兵隊 御親兵被仰付、御徴相成外付の者、當

處迄の旅費手當として金子相渡可申外間、請取方之儀

者會計司に承合せ可申、此段相達外也、

但當所に着到之上者諸費銘細帳届可申事、

辛未二月晦日

兵部省

鹿兒嶋藩

別紙之通兵部省に被仰渡外間、軍務局に申渡、可承向

に可申渡外、

辛未三月

知政所

一在職之面々、去夏俸祿差上度追々願出趣有之、其通

者難被仰付、乍然會計道難澁旁不被爲得止、去七月よ

り當三月迄諸官之俸米減少被仰付置外處、

御上京且 御親兵等被差出御費用も不少、未會計道充

備之場合にも到兼外付、來ル西三月迄是迄之通減祿

被仰付置外條、向々に可申渡外、

但大隊長并教頭・教佐俸祿之儀者、去年九月依願減  
祿被仰付置り通こり、

辛未三月廿二日

知政所

1021の3

大山格之助

右者急速之御用有之、日向縣に往來急こる被差越り條、  
向く江可申渡り、

辛未三月廿三日

知政所

1022

通達留

一 明廿三日巳刻

御首途に付、御對面所より御樓門 御出、 八坂神社

諏訪社 御參詣、引續 稻荷・若宮・春日に 御參詣、

夫より 鶴嶺神社

照國神社に 御參詣、 御出口之通被遊

御歸殿筈り條、向く江可申渡り、

辛未三月廿二日

知政所

一 明廿五日被遊

御發駕筈り處、 御召船不致廻着り付

御延引こる、 御召船廻着之上御日限被 仰達り條、

1023の3

一 當三月諸吏變遷期限之儀、今一期當分之通被召置り付  
る者、廢官之面く御養料等之儀も、期限通酉三月迄世

此旨一統に可申渡り、

辛未三月廿四日

知政所

1023の1

通達留

(本文書八一〇一一号文書ト同文ユエ略ス)

1023の2

一 北海道に罷越り者箱館港上陸之節、管轄地方官印相改  
り上開拓使員數相渡り間、地方官印持參可致り事、

一 諸官員ヲ始メ府藩縣士卒ニ到迄、横濱其他外國人居留

地關門、自今其管轄所之印鑑こる通行可致旨先達る御

達相成り付、箱館港も同様可相心得り事、

右兩條に付照准印鑑、兼る東京出張開拓使に可差出

置り事、

辛未二月

太政官

別紙三通之通於東京被仰渡り段申來り條、向く江可申  
渡り、

辛未三月

知政所

1024の1

祿五拾石以下是迄之通被下置り、尤是迄四石以上被下置り面々者四石宛被下置り條、向々江可申渡り、

辛未三月廿七日

知政所

通達留

一御藩内産科療術未相開、難産なる斃り者不少り處、醫學校御雇入之教師ウキリス右之手術器械傳來、此節局中醫師鮫嶋嘯齋・渡邊昌齋兩人に産科掛被仰付り間、以來難産罹り者未勿論産婦療治望之者者、病院に申出可受療治り、此旨向々江不洩様可申渡り事、

辛未三月

知政所

(本文書八一〇一〇号文書ト同文ユエ略ス)

(本文書八一〇一四の二号文書ト同文ユエ略ス)

一軍治諸官俸祿拂方ニ付、當四月より改る俸祿帳被相渡り付、米穀掛出納方互相受取り上者、各月割之俵數等寫取扣置り儀者人々勝手次第ニ有、右俸祿帳之儀者居所相記、始る米藏に差出りハ、其儘出切ニ有、月々御拂米相濟次第ニ者都る御藏格護相成居り條、自然届米

1026

遅延且俵數等相違之儀もりハ、米藏出張出納奉行に

形行申出り様被仰付り、左り有轉職・名替又者死失等ニ有、暫時俸祿帳不相請取り有不叶節者、其譯筋書付を以右出納奉行に申出、相請取り儀者其通ニ有、其内轉職等ニ有又々右俸祿帳相渡りハ、本之通米藏に可差出置り、且又右帳面を以金錢取替之向有之、餘人に御拂米引渡り約定之人者、是又形行届先等雙方も同様申出り様被仰付り條、御城下在職之面々江告諭可致置事、

辛未三月十五日

會計局

通達留

一先般

勅使御下向、實父久光

宸翰拜戴被 仰付、病躰勉強仕、當春中

闕下ニ 拜趨可仕旨御請申上置り處、病痾猶順快不仕

り付、恐縮至極奉存り得共、當秋迄御猶豫被成下り様奉歎願り、依之臣忠義久光ニ代り上京仕、奉謝

天恩度奉存り間、宜御執奏奉願り、以上、

鹿兒嶋藩知事

辛未三月三日

鳴津忠義

1027

島津氏家譜

辨官御中

御附札

願之趣兼る厚キ 御沙汰之次第も被爲 在<sub>レ</sub>儀ニ候得共、不得止事情ニ付被

聞食届<sub>レ</sub>間精々療養相加、其内聊得病門候<sub>ハ</sub>、早速上京可致<sub>レ</sub>、就<sub>ル</sub>者忠義儀願之通早ク上京可致<sub>レ</sub>事、

從三位様爲 御名代、

從四位様御上京之儀、御別紙之通御願立被遊<sub>レ</sub>處、御附札之通被 仰出<sub>レ</sub>條、各奉承知<sub>レ</sub>様向<sub>ク</sub>ハ早ク可致通達<sub>レ</sub>、

辛未四月三日

知政所

一從四位様此節 御發駕ニ付、八等官以上任職之面々、

御城下<sub>レ</sub>罷出、 御發駕後登 城、傳事<sub>レ</sub>相付御祝儀可申上<sub>レ</sub>、但改服、

右外略

辛未四月

知政所

1028の1

通達留

明治四年辛未四月忠義海ニ航シテ東京ニ赴キ、曩ニ勅使下向久光ニ宸翰ヲ賜ヒ、且照國社へ御劔ヲ納メラル、ノ恩ヲ謝ス、五月十八日麝香間祇候ノ命ヲ奉ス、十九日召ニ應テ入朝ス、小御所ニ於テ 天顏ヲ拜ス、

一當三月迄御養料被下置<sub>レ</sub>向<sub>ル</sub>者、世祿五拾石以下都<sub>ル</sub>四石宛、來<sub>ク</sub>酉三月迄是迄之振合を以被成下<sub>レ</sub>段<sub>ル</sub>者、別段申渡置通<sub>レ</sub>外、然處出軍人數之内廢官等ニ<sub>レ</sub>是迄等級を以養俸被下置<sub>レ</sub>面<sub>ク</sub>者、右期限中從前之通被下置<sub>レ</sub>條、向<sub>ク</sub>ハ可申渡<sub>レ</sub>、

辛未四月二日

知政所

1028の2

一諸局筆者御一新前<sub>ル</sub>者、定役何人、助役何人被究置<sub>レ</sub>譯、且當分之人數銘々俸祿・季祿片書ニ相記御用見合相成<sub>レ</sub>外間、來<sub>ル</sub>十日限當局<sub>レ</sub>可申出事、

未四月三日

會計局



通達留

一御一新以來諸局之冗官御省略之上者、在官之面々深辨時勢致勉勵、御用筋即々可相辨と之趣者、去々巳十一月委細致布令置通々處、諸局も申出之書付類關係之局に吟味相下り節、動ハ相滯、間ニ者紛失之患も有之哉ニ相聞得不可然事付付、各局奉行頭人者勿論筆者ニ到迄申渡置り趣意相守、首尾之御用筋者速々相運り様可致取扱り、尤銘々兼り扣帳仕立置、請取之書付者夫々記置紛失等無之様致取扱、旅行等之節不相運御用筋者同席之内も慥次渡、請取り人より無滯可致首尾り、左り至急期限等有之り書付類ハ、差出り局々より其譯張紙を以可申出り、此旨不洩様諸局に可申渡り、

辛未四月

知政所

一此節 御上京中且 御親兵在京之中者毎月廿九日、式日飛脚被差立り條、向々は可申渡り、

諸局御用物等者船便より可差出、左り差掛御用有之者者、朔日・二日方迄之間被召延儀も可有之り事、

辛未四月七日

知政所

一從四位様御儀今日 御發駕被遊筈り處、

御子様御出生ニ付、 御發駕御延引被 仰達り條、早々向々は可申渡り、

御日限之儀者追る被 仰達り、

辛未四月

知政所

一今曉寅下刻 御女子様被遊

御誕生、別る御丈夫被爲 入り條、此旨向々は早々可申渡り、

辛未四月八日

知政所

一從四位様御儀來ル十六日四ツ時被遊 御發駕旨被 仰達り條、御通筋并御手當等之儀者先達る申渡り通可相心得旨、向々は不洩様可申渡り、

辛未四月

知政所

一此節御出生之 御女子様御名

清姫様と奉稱り、此旨奉承知、左り右文字假名相用り儀同唱迄も遠慮可致り、此旨向々は致通達、地頭に

表可申渡り、

辛未四月

知政所

1029の2

一諸局附屬長之面々、御軍役高所持いたしり儀職掌之名實不相叶外付、従前も所持いたし來り者者、御當地居住附士以上御免之者に、此涯相對賣渡り様可申渡り、此旨向々可申渡り、

辛未四月

知政所

1029の3

一御藩内士族御軍役高出米之儀、古來軍備ニ付一同合力之良制外處、元和以后往々致變態外得共、既ニ四海今日之形勢ニ立到り上者、專古制ニ基キ集成館火藥局之歳費ニ被振向、來申年も先キ年中平均之米價を以掛役々立會致差引、出軍用ニ御振向、尚餘分も外者御軍用之内ニ被備置筈外條向々申渡、諸郷に不洩様可申渡り、

辛未四月十九日

知政所

1029の4

一假小學校之儀、第三校と名目被相替り條本學校に申渡、可承向々にも可申渡り、

辛未四月

知政所

1030の1

通達留

一東西兵學寮之儀、軍務局管轄兵士教導方被仰付置り得共、今般本學校并小學校御設建、皇漢洋之三學者勿論兵學ニ到迄兼脩、普通之學問被相開、生徒實効有之者者往々軍治各局に御撰擧之御規定相成居り付、此節右學寮者被廢り、左り西兵學寮之内、是迄拾八歳以下之兵士出席所跡者小學第四校ニ被相定、本學校管轄被仰付、右兵士之儀者夫々年輩を以小學校規則通諸生ニ被仰付、東兵學寮跡并西兵學寮之内、常備兵士又者諸郷報知役等入塾場所之分者従前之振合を以軍務局寮ニ被渡置り條、大隊長本學校之儀諸官申談、諸事無混雜可致取扱旨申渡、向々にも可申渡り、

辛未四月

知政所

1030の2

一漆御用木之儀是迄御法及有之外得共、海邊遠く運送不便利成ル諸郷ニ於者、民産之餘勢可相成良木も利用相少キ事外條、以來御用定漆之數さへ相備りへ者、田畑并

御用地等不差支場所ニ其地ニ有十分仕立置、製漆之

上勝手ニ賣出有る不苦有間、願之者其民事役見分之上

可令免許有、

一 漆實上納願出有者者、櫛實同様四升代米可被仰付有、

右之通被相定有條、尚又諸郷掛役々方勸立、農家之

餘産出來、育民之御趣意不相戻様可申談有、此旨民

事局江申渡、可承向有も可申渡有、

辛未四月

知政所

内當分人數之内貳人減少之賦

傳事方

一 傳事

一同副役

右七人

内本學校掛壹人

東京詰貳人

一 徇達

右六拾壹人

内比志嶋轉任士方掛貳人

一 筆者

右七人

民事局

一 民事奉行

一同副役

一同見習

右六拾壹人

但當分人數之内五人減少之賦

内御檢地方拾人

大坂詰壹人

知政所

一 書記

一同見習

右拾六人

内小學校掛三人

東京詰四人

一 神事調役

一同助

右五人

一 筆者

右拾貳人

掌皮館掛貳人

一副役

豐民館掛四人

右八人

外城方貳拾七人

內大坂詰壹人

近在掛貳人

長崎詰壹人

御檢地ニ付人配方壹人

一調役

諸郷御普請方貳人

一同助

大和百姓移者方壹人

右九人

一支配役

內長崎詰貳人

一同助

一勘定役

右貳拾壹人

一同助

一檢者

一同見習

一同寄

右四拾人

右百四拾貳人

內大坂詰貳人

但外ニ拾七人此涯被入置

一筆者

一筆者

右拾壹人

右七拾七人

內長崎詰壹人

內大坂詰壹人

出納方

御檢地方貳拾五人

一出納奉行

會計局

一同副役

一會計奉行

一同見習

右六拾四人

但米穀方三拾貳人

諸財方三拾貳人

内東京詰貳人

大坂詰六人

西京詰貳人

一筆者

右九拾壹人

但米穀方六拾三人

諸財方貳拾八人

内西京詰壹人

東京詰貳人

外大坂詰除

生産方

一生産奉行

一同副役

一同見習

右七拾四人

内藍玉方掛五人

蠶織方掛九人

金性分析方掛貳人

金粉箔方掛壹人

國鈔方掛七人

木之實油方掛三人

白糖方掛六人

一監作

右六人

一筆者

右六拾壹人

營繕方

一營繕奉行

一同副役

一同見習

右拾九人

内細工掛六人

道路掛壹人

東京詰貳人

一監作

一同寄

右七拾人

内細工掛拾人

道路掛五人

但當分人數之内五人減少之賦

東京詰四人

一筆者

右拾壹人

内細工掛三人

製造方

一製造奉行

一同副役

一同見習

右拾貳人

内陶器方掛六人

紡績方掛五人

堺紡機方掛壹人

一監作

右壹人

但堺紡機方掛

一筆者

右六人

内陶器方掛四人

紡績方掛貳人

糧餉方

一糧餉役

一同助

右八人

一筆者

右六人

監察局

一監察

右九人

内東京詰壹人

大坂詰壹人

一巡察

右拾四人

一檢事

右百五拾人

一筆者

右四人

糺明局

一 糺明奉行

一同副役

一同見習

右三拾貳人

内會所詰拾九人

一 管牢

右三人

一 筆者

右六人

外城方

一 筆者

右六人

内務局

一 侍直長

右九人

内二丸三人

御子様御方三人

一 侍直

右貳拾人

内二丸八人

御子様御方六人

一 侍直助

右九人

内二丸三人

御子様御方三人

一 筆者

右八人

内二丸四人

膳所

一 膳所頭

一同助

右拾人

内二丸四人

一 内監

右拾貳人

内二丸六人

道具万

一道具頭

一同助

右三拾貳人

内二丸三人

一道具預

右拾四人

内二丸五人

内厩方

一内厩役

一同助

右四人

一馬醫

右貳人

庭方

一庭方頭

一同助

右六人

内磯掛壹人

尾畔掛壹人

醫員

一侍醫

一同助

右貳拾八人

内二丸九人

玉里掛七人

貞君様御方貳人

裏役

一裏役頭

一同助

右貳拾九人

内二丸七人

玉里六人

貞君様御方三人

一内監

右拾貳人

内二丸四人

玉里四人

一筆者

右六人

内二丸貳人

玉里貳人

右者御一新以來、諸局追々改革人員之増減有之外處、既ニ二ヶ年ニ及び御用筋取馴來、當時官員右之通有之外得



1030の5

福ヶ迫  
ナガタノ

一長田神社

舊號諏訪

右社に戸柱諏訪同殿之

1030の4

共、大凡百事之舉者其人ニ有る人數之多少ニ不依者勿論  
ニ付へ者、事實致辨別、成丈冗員令減少ハ様可申談ハ、  
乍去先右人員を以定數ニ被相定付條、已來別ニ一局開立  
之外右定員相重ハ儀ハ不被仰付ハ、左ハ是迄多人數ニ  
亦勤來ハ場所ニ有るも、以來御用致減少ハ上者、官員相省  
可然向者早速可申出候、此旨向ハ可申渡ハ、  
但即今定員相重居ハ局者暫役等之節跡代不被仰付ハ、

辛未四月

知政所

一小學校并郷校被召建、生徒追々相嵩ハ處、習字用反古  
紙存分調達不相叶段本學校方申出趣有之ハ間、知政所  
を初諸局、御一新以前之帳留類御用見合不相成分ハ、  
此涯取しらへ本校ハ差廻、本校方無親疎致配分ハ様被  
仰付ハ條、本學校ハ申渡、向ハ可申渡事、

辛未四月廿四日

知政所

1030の6

戸柱

積羽八重言代主神會祭いたし、社號被相改ハ、

一南方神社  
ミナカサ

舊號諏訪

右社に福ヶ迫諏訪社同殿之

健南方富神會いたし、社號被相改ハ、  
(祭脱カ)

一八坂刀賣命

右者信濃國御本社之例ニ準シ、

言代主神御殿之跡ハ新ニ御鎮座被仰付ハ條、社司并

可承向ハ可申渡ハ、

辛未四月廿五日

知政所

一南方神社

一四月祭濁活祭と名ク、

但祭日ハ御占伺之上可被相定ハ、

一七月祭  
フミノキ

但先規之通朔日方相初リ、廿八日ニ者獻幣使發遣被

仰付ハ、

右者當社之祀法右之禮典を以御改正被爲在、頭殿者

名分ニ不相叶之間其式都る被廢、在町踊而已者向後

丞前蹤ニ基キ於御神前興行被仰付、左外ハ幣帛等者此節被召付置外御高之内ハ奉備外様被仰付外條、社司江申渡、可承向、にも可申渡外、

但七月七日御祀之禮者追ハ可申渡外、

辛未四月

知政所

1030の7

一人民道路等ニ死果、即ハ親族於不相知者檢事見分之上假埋置、人相等相記外標札御藩内中江立置致糺方、其後尋來者於無之者是迄埋捨之仕來ニ外處、死て葬主なきハ則鰥寡孤獨ニハ實ニ可愍、依ル以來者右様非常之死を遂、三十日程も親族等不相知者、葬埋之上形行相糺石標被召置、無苦之窮民御慇懃之典被爲行度儀と致評議外、以上、

四月

監察局

右之通被仰付外條向、にも可申渡外、

但石標之儀年號・月日并男女之間、且溺死・餓死・

縊死等之譯可記置外、左外ハ失費者其所村長計を

以建置、追ハ筋、に相付申出外ハ、即返銀可被

仰付外、

辛未四月

知政所

1030の8

一兵器方吟味役之儀被廢外條、此旨軍務局江申渡、向、にも可申渡外、

辛未四月

知政所

1031

外包紙  
七番ノ内

忠義様江兵士一大隊

御用召之御書付一通

御書附四通ノ内壹通

島津少將

先般當地ニ備置候其藩兵上三小隊、東京

皇居御守衛被 仰付候處、猶又別段一大隊、右同様御守

衛トシテ早々東京江可差出旨更ニ

御沙汰候事、

四月

行政官

御布達留

一諸向より諸人軍役高等引當を以被差出置外拜借銀利足

銀、當時世上之利足にも不辨、且御吟味之趣も有之外

ニ付、當正月より都ハ壹割利足上納被仰付外、左外ハ

是迄定通之利足も右之相渡富利足丈ケ者別段差分置、

1032の1

小學校行用ニ被振向、第一諸士御引立之御趣意ニ付、右之通被仰、不洩様御達、布告可有之事、

明治四年未四月 會計局

1032の2 一御軍役高員數

一家々俸祿右同

但嫡子、末子迄

一御養料米并御切米右同

右御用見合相成可申出旨會計局、致承知、付、來ル

十四日限無間違、様拙者方へ可被差出、此旨早々申

遣、以上、

未四月十二日

精松善之丞

1033 御履歴中

四月晦日 廢左之職員一科、

兵器方吟味

1034 通達留

一從四位様御儀先月廿一日品川沖に御着船、鮫洲に御

上陸、同日八ツ時過

御機嫌能被遊、御着邸、段申來、依之嶋津珍彦殿一列并二等官以上、明四日登、城、家令に相付

從四位様、從三位様に恐悦可被申上、

但御裏に兼、恐悦被申上、來、仕來通可被申

上、

一八等官以上任職之面、同斷登、城、傳事に相付恐悦可

申上、

但改服

右之通向、に可致通達、

辛未五月三日

知政所

1035の1

通達留

一紡績方之儀是迄製造方より被掛置、得共、以來生産方

管轄被仰、付、條會計總裁に申渡、可承向に可申渡、

辛未五月十日

知政所

1035の2

一長田神社

右御祭日

六月・十二月 十一日

十一月中卯日

右之通御祭日被定置外條、神主代へ申渡、可承向はも可申渡り、

辛未五月十日

知政所

一各砲臺より試験射之節、以來國旗を揚り節者船通行不相成段屹と差留有之度、向々不洩様被仰渡度、此段申出外、以上、

五月十七日

軍務局

右之通被仰付外條、向々不洩様可申渡り、

辛未五月

知政所

1035の4

一朝集之知藩事三ヶ月在京之期限相隔りハ、翌月二日第十字一同參

朝、天機相伺外上勝手ニ歸藩可致り事、

辛未三月

太政官

一工部省官員御用ニ付諸所に出張之節、御雇外國人政府之印章所持同行可致り間、府藩縣管内通行之節ハ相當之護送差出可申、尤道筋其外差掛り、同省官員より其場所ニ於テ申談り儀可有之り條、不都合無之様可取計

り事、

辛未四月

太政官

一去冬十一月廿三日夜、東京神田鍋町ニ於テ英人ニ傷けり者有之、嚴密御搜索召捕、今般別紙之通御處刑ニ相成り、元來外國御交際者重大之儀ニ付屢御布令相成り處、右様之次第有之り者、御政體ニ關係シ御國辱も相成り條、尚又府藩縣管内末々迄心得違無之様取締可致事、

辛未三月

太政官

別紙本ッ四通於東京被仰渡り段申來り條、向々不洩様可申渡り、

辛未五月

知政所

1035の5

一兩京・大坂其外他邦ハ士族以下被差遣り節、被相渡り道中御賄料之儀、一昨已年官等ニ應シ定則被究置、前之濱出帆蒸氣船より被差越り節者、右定則半減之御治定ニり得共、以來定則通可被相渡り、尤至急之御用筋者別段之事り得共可成靜ニる被差立、蒸氣船ハ被差立り節者至急之御用向ニるも、都の靜料可被相渡筋被究

御履歴中

置外條會計局に申渡、向々にも可申渡外、  
辛未五月  
知政所

1035の6

鹿兒嶋  
原良村

右永吉村に合併、

華野村

右岡之原村に合併、

下田村

右坂元村に合併、

皆房村

右比志嶋村に合併、

草牟田村

右下伊敷村に合併、

花棚村

右川上村に合併、

右者此節大御支配ニ付、鹿兒嶋近在之内右之通合村被仰

付外條、民事局に申渡、向々にも可申渡外、

辛未五月廿二日

知政所

五月十九日 忠義參 朝、於  
小御所拜

天顔、畢召ニ麿香間一蒙ニ

御懇之 勅旨ニ賜御菓子、又奉ニ左之

勅命一、

麿香間云々左ニアリ

1037の1

通達留

鹿兒島藩

知事島津忠義

一

麿香間祇候被

仰付候事、

辛未五月

大政官

從四位様御儀、先月十九日

天氣御伺且御禮旁として御參

内、麿香之間に御扣宮内省に御禮御届相成外處、於

小御所

天顔 御拜、早の麿香之間に御通、御内輪 御拜顔被

爲 在外上、

御懇之被爲蒙

勅命御菓子被遊 御拜戴、早る麝香之間に 御引取、

右御禮宮内省に被仰上、無御滞 御退

朝被遊り段御到來り、依之嶋津珍彦殿一列并二等官以

上、明後七日四ツ時登 城、家令に相付

從四位様 從三位様に御祝儀可被申上り、

一三等官以下御當地士族之面々同斷傳事に相付、御祝儀

可申上り、

右之通向々江可致通達り、

但改服

辛未六月五日

知政所

1037の2

一二月十一日 九月廿八日

右差

照國神社御祭改る右之通被定置り條、向々江可申渡り、

辛未六月十日

知政所

通達留

上町之内

地藏町之事

1038の1

一榮町 サカエ

向築地之事

一向江町

右之通唱被相替り條民事局に申渡、向々江も可申渡り、

辛未六月三日

知政所

1038の2

一

橋口與一郎

右差東京に御用有之、急こる被差越り條、向々江可申

渡り、

辛未六月十日

知政所

1038の3

一大門口より南御臺場角迄之間

右南水泳場

一病院下舌出地を北新築地通角迄之間

右北水泳場

右差小學校・郷校諸生、毎年六月十五日を七月晦日迄

水泳修行場被定置度吟味仕、此段申上り、以上、

但諸生等級之標木等召建儀も可有之、此段申上置り、

六月十日

本學校

右之通被仰付り條本學校に申渡、向々江も可申渡り、

1038の6

1038の5

1038の4

辛未六月十日

知政所

會計奉行  
森岡清左衛門

右之通被仰付、是迄之通長崎に相詰り様被仰付り條、向々江可申渡り、

辛未六月

知政所

橋口與一郎

右者上京被仰付置り付、來ル十八日出艦三邦丸も長崎迄被差越、夫より急なる東京に被差立り條、向々江可申渡り、

辛未六月

知政所

一 鹿兒嶋・諸郷共、他郷に自作地致所持り儀不相成り付、當未七月限其所士族に相當之直成を以賣渡り様、左りの賣拂り高員數丈者、御藏入高より代銀上納申受るる返高被成下り旨、去午八月被仰渡置、且又鹿兒嶋并諸郷士族共四町限に被相定、他郷掛持者勿論鹿兒嶋近在此節御竿入餘地之儀、御制度通追々賣拂、右に付近在四町餘地之儀者鹿兒嶋士族互に賣買、諸郷士族他郷に

1038の7

掛持ハ郷士族互に賣買、殊に諸郷者外浮免地等も有之

り付返高不被成下、鹿兒嶋より掛持其所に賣渡りへハ、於郷々者夫丈士族高相重、鹿兒嶋持高前過分相減り付、其分返高被成下り旨、右之趣猶又向々江被仰渡度り、

四月十四日

民事局

右之通被仰付り條向々江申渡、諸郷地頭にも可申渡り、

辛未六月十六日

知政所

一 一等給人 貳人

俸祿四拾俵

一 二等給人 貳人

俸祿三拾俵

一 三等給人 三人

俸祿貳拾俵

一 四等給人 三人

俸祿拾五俵

一 五等給人 貳人

俸祿九俵

右此節新に被召建、右之通定員俸祿被定置り條、向々江可申渡り、

辛未六月十七日

知政所

一 第七郷校

右者内之丸郷校、右之名目ニ有官校ニ被召建、本學校  
管轄被仰付外條申渡、可承向へも可申渡り、

辛未六月十八日

知政所

肥前

大隈參議

土州

佐々木參議

土州

齊藤參議

中山神祇伯

有栖川兵部卿

萬里小路宮内卿

九條彈正尹

近衛神祇大副

長州

大木民部太輔

烏丸宮内太輔

津和の

福羽神祇少副

長州

山縣兵部少輔

右全

穴戸刑部少輔

兵部省

右之通今日免職外條、爲心得申達外也、

辛未六月廿五日

麿香間祇候

1039

1038の9

1038の8

一是迄爲諸生被差出置外面々、病氣ニ有一往罷下未寸切  
と不致全快内ニ致出府、又外病氣再發、存分勉強出來  
兼外もの不少哉ニ相聞得外付、以來者療醫得と致診察、  
全平癒再發之懸念無之段申出外節可被差出外條、此旨  
可承向へ可申渡事、

辛未六月

知政所

御布達留

一

西郷鹿兒島藩大參事

右被任參議外間、此段相達外事、

辛未六月二十五日

薩州

大久保參議



右之通被蒙 仰外、

辛未六月廿七日

中山從一位

任神祇少副兼宣教次官

肥前

從四位大隈重信

右麿香間祇候更ニ被 仰付外事、

辛未六月廿九日

九條從一位

任大藏大輔

從三位大久保利通

近衛正二位

任宮内大輔

正三位萬里小路博房

麿香間祇候被 仰付外事、

辛未七月二日

齊藤從四位

追々老年苦勞被

從一位中山忠能

思召、本官ヲ免シ特旨ヲ以終身現米五百石下賜候事、

同人

大嘗會御用懸被 仰付候事、

辛未六月

右大臣三條實美

兼任神祇伯宣教長官

長州

從五位井上馨

薩州

從三位大久保利通

任民部少輔

右任大藏卿

辛未六月廿八日

岩倉大納言

津和の

從四位福羽美醇

長州

從五位山縣有朋

任兵部少輔

嵯峨從二位

一鹿兒島藩知事麿香間詰被  
仰付外間、此段申達外也、

麿香間祇候  
右之通被 仰付外事、

辛未五月十八日

城中取締  
官掌

辛未七月十四日

長州

大木民部太輔

被免、禁愼、

筑前福岡藩知事

任民部卿

肥前

大隈大藏太輔

代り知事  
有栖川宮

任參議

土州

板垣高知藩大參事

筑前大參事  
因州人  
川田左久馬

任參議

同人

1040  
雜書中

任從四位

長州

兵部少輔山縣有朋

一 御親兵ニ成外舊鹿兒島縣之兵員

一 權小隊

百 幸衛

一 右同

遠竹橋二

任兵部大輔

右

一 右同

今村幸之助

宣下候事、

德大寺正二位

一 右同

川上仲助

一 海軍所出仕營繕掛

一 右同

小田金之助

一右同

小笹林左衛門

一海軍所出仕

町田八郎左衛門

大將 中將 小將 大佐 中佐 少佐 大尉 中尉

少尉 曹長 右權曹長 軍曹

一 大佐兼權大丞

野津七左衛門

一 權大丞會計監督

種子田健一郎

一 大佐

篠原冬一郎

一 少將箱館鎮臺出張

桐野信作

一 侍從

高島鞆之助

一 一また不相知後砲隊大佐ニ成

村田新八

一 海軍所出仕海軍取建掛

草道甚左衛門

一 右同

郷原内本マ、

一 右同

末川清彦

一 小隊

吉原彦左衛門

一 會計局海軍所出張

有馬萬左衛門

一 右同砲取建掛

税所四郎左衛門

一 會計局出張海軍所出勤

荒川仲藏

右拾三等

右本ノマ、年月ナシ

104101

雜書中

西郷正三位東京ヨリ桂四郎殿ニ被遣り書

朝暮秋氣相催し、弥以御壯榮可被成御座、恐悅之御儀奉存り、陳ハ天下之形勢餘程進歩いたし、是迄因循之藩々却る奮勵いたし、尾張を始阿州・因州等之五六藩及建言大同小異ハ有之ハ得共、曰々御催促申上り位、殊ニ中國邊大縣郡縣之趣意方以東ハ大縣郡縣之体裁ニ倣り模様ニ成立、既ニ長州侯者知事職を被辭、庶人と可被爲思食ニ有、御草稿までも出來居り由御座り、封土返獻天下ニ魁たる四藩其實蹟不相舉りゐハ、大ニ天下の嘲笑を蒙りり而已成らず、全奉欺朝廷り場合ニ成立、天下一般歸着する所を不知、有志之者ハ紛紜議論相起り上、外國人方も天子之威權ハ不相立國柄ニ有、政府と言ふもの國々四方ニ有之杯と申觸し、頓と國体不相立旨申述り由、當時者萬國ニ對立し、氣運開立りゐハ迎も勢難防次第ニ御座り間、斷然公儀を以郡縣之制度ニ被復り事ニ相成、

命令を被下り時機にて御互ニ數百年來之 御鴻恩私情ニおひて難忍事御座り得共、天下一般如此世運と相成、如何にして十年ハ防かれ申問敷、此運轉ハ人力之不及處と奉存り、此際ニ乘し封土返獻之魁よりして、天下一般

之着眼と相成り上ハ色々議論相立り而ハ、是迄勤王之爲ニ幕府を掃蕩被遊り、御趣意も不相貫、殊ニ頼朝以來私有之權を御一洗被爲在り御功績及難相立事り得者、決り吳議ハ有之間敷り得共、舊習一時ニ散しり事り得者、依事者吳變無之共申難國々も不相知り付、

朝廷におひてハ戰を以被決り付、確乎として御動搖不被爲在り間、夫丈ケハ御安心可被下り、此運ニ當り私有すへき譯無之事り間、右体變動之模様も相見得不申り得共、此末所置を間違りて如何之變態ニ推移り哉も難計事と奉存り、此旨乍大略形行如此御座り、尚追々可申上り得共甚急敷、一筆奉得御意り、恐惶謹言、

七月廿日

西郷吉之助

桂四郎様

(本文書ハ桂家所藏原本ニテ校訂ス)

西郷正三位隆盛東京府ヨリ桂四郎殿に書狀

芳翰難有拜誦仕り、殘暑酷敷御座り得共、弥以御壯榮御勤務之段恐悦奉存り、隨り小弟無吳儀罷在り間、乍憚御放慮可被下り、陳者先月下濼、三藩出揃ニ相成り處、初此方よりは三藩戮力同心と申儀、只取會までニある者志氣

直様離安き次第ニ間、此度者十分戮力、同心之根本を堅ふいたしり儀急務と存り、其根本におひては、三藩之内より壹人主宰を立、皆此人之手足と相成十分使ハれり、其人を助けり處不相定りる者、只面々の議論を主張いたしり様の機会ニ成行りニ付、壹人見込通施させり、面々を一ニ定め不申りる者必事業不舉、紛擾之場と相成可申、若又見込致相違、大躰不相叶り得者速ニ引籠方可然、少々之見込違必有之事り間、右等者推りやり貫きり得者、其弊を矯めり位者如何様共相成りニ付、是を以定約いたし、木戸壹人を參議ニ居へ、外ハ省々ニ降り、其任を負ひ勉勵可致と相決し、土州に相談仕り處、至極同意ニ御座り間、兩藩より得と長藩に申述り得共、木戸決る不肯、然とも兩卿に申立、懇ニ御説論相成り得共、少表承引不致りニ付不得止り、此上者都の省々相降り、互ニ手を引合りる参り外無之と策を替へ談判いたしり處、又々議論沸騰ニ成立、既に崩立勢ひと相成、頓と御改革及不出來次第ニ立至り處、一昨夕大久保が得と相談有之、此上私氣張り得者随分御變革の所も請合り可相調との事り間、相はまり可申、此節不相調り得者、御國許ニの隊中と相約り折、切斷相究居申り間、逆表逃出しは出來不

1042の1

申、山ニ入リ儀者相塞リ、何れ土ニ入之外無之と存、承  
 伏仕外處、木戸納得ニ相成、兩人參議ニ奉承命仕外次第  
 ニ御座外、外者皆省々ニ相降り、一時ニ參議并卿・大少輔  
 を被廢、其上又々御調之上省々ニ被相居、何分十全之撰  
 擇不被相行殘念之至御座外、乍然此上屹と定則相立外得  
 者、是を以責免、或者罪外場合ニも可相成と奉存外、大  
 少丞以下之處未撰無之、是表續の相發外賦ニ御座外處、  
 官省之調并任員之定額章程等相極め外可相發とて、只  
 今取調中ニ御座外、不日ニ相發シ可申、此度者俗吏餘  
 程落膽いたし、濡鼠之如く相成居、御遠察可被下外、定  
 る鬼様(衆也)ハ私壹人ニ相留リ可申と、最早相明め居申外、猶  
 追々事情可申上外得共、大略まで如斯御座外、以上、

未七月十日

西郷吉之助

桂四郎様

通達留

谿山郡

一字宿村

但廣木一方限相除

右御城下近在ニ隸屬、一村ニ被召立外、

同村之内

一廣木方限

右近在田上村ニ被召付外、

右者此節御檢地ニ付御吟味之譯有之、右之通隸屬替被  
 仰付外、左外郡之儀者是迄之通被召置外、

一西之別府村之内大牧地面之儀、田上村疲勞ニ付、村違

ニ者外得共、別段之譯を以作職御免被仰付置外得とも、

右通廣木方限被召付外間、本通西之別府村ニ被召返外、

一字宿村山野見掛所務、谷山郷軍役方ニ被振向置外得共、

右通支配替相成外付引取被仰付外、

右之通被仰付外、各民事局并地頭に申渡、可承向へも

可申渡外、

辛未七月五日

知政所

1042の2

一六部躰之者又者僧尼類、間ニ者御藩内ニ入込外表有之  
 哉ニ相聞得、抑御當藩廢佛之儀者

朝廷ニ御届ニも爲相成事外得者、爾后右躰之輩入來外

儀屹と不相成外條、猶又取締向嚴重可取計外、此旨民

事局并地頭に申渡、可承向ニも可申渡外、

但右式旅人之内萬一用向有之者も難計外付、入來外

節者境目郷におゐて巨細承届、無據情實有之りハ、形行關係之向に送狀相添届可申出り、

辛未七月十三日

知政所

一御城下士族大浮免高之儀者全躰世祿之事ニ在、是迄通差付地ニ可被下被仰渡り付、今般御檢地ニ付る者自作地同様之取扱ニ在、高之増減・畦方之延歩ニ不拘持主に被成下度、自然高頭ニ差支り分者高下り被仰付度致吟味り聞、向々江表御布告相成度、此段申出り、以上、

七月

民事局

右之通被仰付り條、向々江可申渡り、

辛未七月十五日

知政所

一兵器方日記役

一右同助

右者是迄官等外ニ被召建置り得とも被廢り、

十一等附士長頭

一兵器方筆者

但定員六人

右之通等内被召建り條軍務局に申渡、向々江も可申渡

り、

辛未七月廿二日

知政所

一學生貳拾人

但壹人稽古扶持米年中四石之割、

一諸生五拾人

但右同斷、年中三石之割、

右漢學局

一學生拾人

但右同斷、年中四石之割を以窮士御救米之内より被

成下り、

一諸生貳拾人

但右同斷、年中三石之割、

右國學局

右者先年來學館出席之者に、右之通稽古扶持米被下來り得共、追々小學校并諸方之郷校被召建り處、御城下之士族多くハ致入學、然處右諸生ハ別段規則有之、

右躰之不被及御所置旁不辨之事り付、以來稽古扶持米之儀者引取被仰付り、元來右扶持米被成下り譯者、御

當地士族之内學館に出席進級之者も、依困窮素志不相

遂、無據外勤に相轉り者も有之、右等爲御救右通爲被下置事付、右米筋老總の窮士御救助方に被加置、兩局并小學校・郷校出席窮士之内、學問出精之面々、六ヶ月ツ、繰廻こゝ、是迄之振合を以扶持米被成下り條、學頭并本學校に申渡、會計局其外可承向くはも可申渡外、

但當稽古扶持米被下置外面々者、期限中ハ是迄之通被下置外、

辛未七月

知政所

一鹿兒嶋近在諸人自作地之儀、此節御檢地ニ付定限外餘地七月中賣買ニ付る者、村々高居いまた治定不致り付、御竿入畦反御檢地方方持主方に相達可申り間、右畦反過上文餘人に附屬いたし、御檢地方に届申出置、追ひ高相究次第、當高を以高直願出り様向くは致吟味、此段申出り、以上、

七月

民事局

右之通被仰付り條、向くは可申渡り、

辛未七月

知政所

島津氏家譜

七月四日月ニ三次入朝、國事忌憚ナク建言、宏謨ヲ裨補ス可キノ命ヲ蒙ル、十四日召ニ應テ入朝ス、此日廢藩置縣ノ宸翰ヲ賜ハリ、即日鹿兒島藩知事ヲ免セラル、二十三日召ニ隨ヒ入朝ス、山里御茶屋ニ召サレ、親ク德音ヲ蒙リ且ツ天杯ヲ賜フ、九月十日忠召ニ應テ入朝ス、詔シテ久光積年ノ功勞ヲ賞シ、家ヲ分タシメ賞典祿拾萬石ノ半額ヲ賜フテ家祿トス、十三日忠義召ニ應テ入朝ス、再ヒ從三位ニ敍セラル、二十三日入朝、天長節ヲ賀シ天顏ヲ拜ス、麝香間ニ於テ酒肴ヲ賜フ、廿四日

主上濱離宮ニ臨幸セラル、忠義徴シニ隨ヒ離宮ニ赴ク、主上坐ヲ命シ、御前ニ於テ酒肴ヲ賜フ、十月二十三日忠義召ニ應テ入朝ス、其ノ他華族ノ入朝スル者一同大廣間ニ召サレ、

主上親ク臨御、三條右大臣ヲシテ宸翰ヲ讀マシム、既ニシテ

主上起テ内ニ入ル、在朝ノ華族悉ク左右ニ班列ス、暫クアツテ

主上再ヒ出御、樂ヲ張り酒肴ヲ賜フ、明治六年癸酉八月暇ヲ告ケテ鹿兒島ニ歸ル、

御系図 忠義公

四年七月四日忠義在<sub>レ</sub>京、

詔曰、奉<sub>レ</sub>

勅速上京慰<sub>二</sub>其勞<sub>一</sub>焉、維新以來綱紀更張始施<sub>二</sub>設之<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>

然方今内外形勢前途事業知<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>容易<sub>一</sub>、深煩<sub>二</sub>

聖慮<sub>一</sub>、今也一層欲<sub>二</sub>釐革<sub>一</sub>、忠義於<sub>二</sub>復古之際<sub>一</sub>贊<sub>二</sub>成大

政<sub>一</sub>則冀奏<sub>二</sub>始終之成功<sub>一</sub>、故欲<sub>レ</sub>諮<sub>二</sub>詢國事<sub>一</sub>宜<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>忌憚<sub>一</sub>

建言裨<sub>中</sub>補宏謨<sub>上</sub>、

○十四日

勅廢<sub>レ</sub>藩置<sub>レ</sub>縣、故免<sub>二</sub>忠義鹿兒島藩知事<sub>一</sub>、

○二十三日應<sub>レ</sub>徵參<sub>二</sub>内、忝賜<sub>二</sub>

天盃於御園山里御茶亭<sub>一</sub>、

通達留

鹿兒島藩

其管内鹿兒島神社、別紙之通被

仰出候條、爲心得相達候事、

但祭式之儀ハ從神祇官可相達事、

辛未六月

太政官

鹿兒島神社大隅國桑原郡内村鎮座、國幣中社列、自今官祭被 仰出候事、

辛未六月

枚聞神社薩摩國穎娃郡開聞嶽鎮座、國幣小社列、自今官祭被 仰出候事、

辛未六月

太政官

枚聞神社

國幣小社列、別紙之通相達候事、

但御改正向追<sub>レ</sub>

御沙汰有之候迄ハ、先從前之通相心得可申候、(爵位有之分ハ早、脱カ)尤返

上可致候事、

辛未六月

神祇官

鹿兒島神社

國幣中社列、別紙之通相達候事、

但御改正向追<sub>レ</sub>

御沙汰有之候迄ハ、先從前之通相心得可申候、尤爵

位有之分ハ早<sub>レ</sub>返上可致候事、

辛未六月

神祇官



別紙之通於東京被仰渡外段申來外條、向々江可申渡外、

辛未七月

知政所

1046

御履歷中

七月四日 賜左之 詔書二通、忠義拜 命、

鹿兒島藩

知事島津忠義

奉

勅速ニ上京云々左ニアリ略ス

口達覺

月中三ヶ度參内之事、

但

二ノ日ヲ以テ定日トシ十字參仕、政府宮内省に舍

人ヲ以テ可届出、尤御用有之候節ハ此餘時ニ可被

爲 召候事、

七月十四日 忠義參 朝、坊城殿被授左之

御宸翰二通及 詔書二通、忠義拜 命、

汝等曩ニ大義ノ云々末ニアリ略ス

朕惟ルニ更始ノ時ニ際シ云々末ニアリ略ス

通達留

口達覺

1047の1

月中三ヶ度參内之事、

但二ノ日ヲ以テ定日トシ十字參仕、政府宮内省に舍人

ヲ以テ可届出、尤御用有之節ハ此餘時ニ可被爲

召候事、

右之通去ル四日於東京被 仰出候段御到來外、此旨一

統奉承知外様、向々江可申渡外、

辛未七月廿八日

知政所

一役名 一通稱 一姓實名 一俸祿

但等級之譯并出軍人數等級を以被下外面々、其件も

可書加、

右之通局々總裁奉行初官等ニ被載置候分者、席順通壹

帳ニ仕立、來月七日限可申出事、

右之通未七月晦日傳事も達し、

御布達留中

御藩に御達之書付寫

汝等曩ニ大義ノ不明ヲ慨キ、名分ノ不正ヲ憂へ、首ニ版

1048の1

籍奉還之議ヲ建ツ、朕深ク之ヲ嘉シ、新ニ知事ノ職ヲ命シ、各其事ニ從ハシム、今也更始之時ニ際シ、益々以テ大義ヲ明ニシ名分ヲ正シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ萬國ト對峙セントス、因テ今藩ヲ廢シ縣ト爲ス、務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無實之弊ヲ除キ、更ニ綱紀ヲ張り政令ニ歸シ、天下ヲシテ其向フ所ヲ知ラシム、汝等其レ能ク朕カ意ヲ體シ、翼贊スル所アレ、

明治四年辛未七月十四日

鹿兒島藩

知事島津忠義

奉

勅速ニ上京、苦勞ニ被 思召候、抑御維新以來綱紀更張、御施設ニ相成候處、方今内外之形勢前途之事業不容易、深く御配慮被爲 在、今般一層御釐革被遊候 御趣意ニ候、特ニ復古ノ際大政ヲ贊成致候儀ニ候得者、始終ノ成功ヲ奏シ候様被

仰出候ニ付而者、國事御諮詢被爲 在候間、無忌憚建言、宏謨ヲ可奉禱補候事、

辛未七月三日

1049 通達留

藩ヲ廢シ縣ヲ置せられ候ニ付而者、縣名如何相心得可申哉奉伺、

辛未七月十四日

月番之  
三藩

右之通相伺、上野官掌を以、舊藩名ヲ縣ニ換稱、様演達有之、外段申來、事、

1050 御布達留

御布告書寫

朕惟フニ、更始ノ時ニ際シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ萬國ト對峙セント欲セハ、宜シク名實相副ヒ、政令一ニ歸セシムヘシ、朕襲ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聽納シ、新ニ藩知事ヲ命シ、各其職ヲ奉セシム、然ルニ數百年因襲ノ久キ、或ハ其名アリテ其實舉ラサル者アリ、何ヲ以テ億兆ヲ保安シ、萬國ト對峙スルヲ得ンヤ、朕深ク之ヲ慨ス、仍テ今更ニ藩ヲ廢シ縣ト爲ス、是務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無實ノ弊ヲ除キ、政令多岐ノ憂無ラシメントス、汝群臣其レ朕カ意ヲ體セヨ、

明治四年辛未七月十四日

藩ヲ廢シ縣ヲ被置候事、

辛未七月

太政官

辛未七月

太政官

雜書中

一民部省被廢外事、

大藏省中監督司・用度司・租税司ヲ被廢、更ニ左之通

被置外事、

租税寮

勸業司

統計司

紙幣司

戸籍司

驛遞司

工部省中

土木司

被置外事、

辛未七月

太政官

一太政官中左之通被廢外事、

左右大臣

大納言

大史

權大史

小史

權小史

主記

官掌

一太政官職制左之通被定外事、

太政官

元老院

太政大臣

正二位

納言

從二位

參議

正三位

樞密大史

正四位

同權大史

從四位

同少史

正五位

同權少史

從五位

大史

正四位

權大史

從四位

少史

從五位

權少史

正六位

式部局

長

正四位

助

從四位

舍人局

長 從六位  
助 正七位

雅樂局

長 從六位

助 正七位

一今般宮内・文部兩省に左之通被置外條、爲心得相達外

事、

辛未七月 太政官

宮内省

侍從長 正四位

大監長 從六位

少監長 從八位

内匠司

調度司

文部省

大博士 從三位

中同 正四位

少同 從四位

大教授 從三位

中同 正四位  
少同 從四位

教授 從六位

權中助教 正八位

少助教 正九位

大審院

議長 正三位

一等議員 從三位

二等同 正四位

三等同 從四位

右院

諸省 長官 次官

別紙之通被仰渡外間、此段相達外也、

辛未七月廿九日 太政官

1052 雜書中

一東京に此御方様より 二丸老公御建白、至極御都合宜

敷、

朝廷ニ老都其通御取用相成、只今ニ老

天朝ニ表、一向ニ此御方様を御頼ニ被

思食事ニ相成、萬か萬迄も我 老公思召通ニ、

朝廷都の破行<sup>レ</sup>由、無左<sup>レ</sup>得者、既ニ日本同志軍ニ相成勢<sup>レ</sup>處、邪説悉皆消散シ、此御方様御威光誠ニ朝口之昇るか如き御忠誠御真義天白を貫キ<sup>レ</sup>由、貴嶋宇太郎より家内<sup>レ</sup>申來<sup>レ</sup>段、汾陽眞一兵衛云々、

石年月日ナシ、四年中ニアリ

以下七年月ナ

一明治四年辛未四月中旬、膳所藩士族一統歸農ヲ願出、

朝廷ヨリ免許ノ命下リシ、

一苗木・三出ノ二藩モ右同ラン、

一丸龜藩知事ヲ始メ諸官員并兵額ニ至ルマテ、其法則悉諸縣ニ比例シ、自餘ノ士卒族ハ大抵歸農セリト云、

一全國戶籍調規則三十三ヶ條被仰出、尤來ル申ノ二月ヨリ五月マテノ間ニ取調、以後ハ六年目毎ニ相改マルヨシ、

一來四月中、東山道・西海道ニ鎮臺ヲ分營トシ、西海道<sup>(ママ)</sup>

ハ石巻ヲ以テ本營トシ、盛岡・福島ヲ分營トシ、西海

ハ小倉ヲ以テ本營トシ、日田・博多ヲ分營トス、

一清國一ノ御節、明治四年辛未五月十八日ヨリ發スル由、

人名未タ詳ナラス、

一山口藩士卒ヲ合併スルノ告諭略ニ云、國富強ノ術他ナ

シ、天下ニ曠土浮民ナク、各天分ノ才力ヲ伸長シ、其力ニ食スルニアリ、抑日本全國ノ歳、實數凡千三百萬石ニシテ府縣ノ管タリ、而テ各藩百萬有餘ノ士、其七百萬石ヲ世襲シ坐食スル者半ニ過ク、癸丑外國ノ事起シヨリ殆二十年、天下未タ兵制ノ實備ヲ見ス、因テ

朝廷別ニ四民ニ募リ節制ノ兵ヲ編セントス、然ルニ之ヲ養フノ資何レニ求ンヤ、

朝廷天下ノ富ヲ興シ天下ノ用ヲ養ント欲ス、而テ諸藩皆世祿ナリ、

朝廷天下ノ兵ヲ強セント欲ス、而テ諸藩ノ士名ハ全州保護ノ常備兵ニシテ其實ナシ、故ニ士ノ外ニ兵ヲ募レバ其用費ハ又民税ニ關リ、民ハ益勞シ士ハ益逸ス、何レノ時カ四民勞逸均シクシ、各其所ヲ安スルニ至ラシヤ、内國力ヲ扶定メ、外萬國ニ對峙スルハ、彼ノ無用ヲ廢シテ此有用ニ充ルノ外ナカルベシ、今般士卒合併、兵制一般ノ法ヲ設クルハ其力役ヲ盡サシムルニアリ、人々天下ノ大勢ヲ推テ、今日ノ食祿ハ則世襲不易ノモノニ非サル所以ヲ領知シ、豫メ前途ノ目的ヲ定メ、各自己ノ才力ヲ磨勵ムヘシト云、

一 龜井津和野藩知事辭職ヲ請フ建言ノ書有之、  
一 諸藩知事辭職ノ事、

水野山形藩知事

北條狹山藩知事

吉井吉井藩知事

南部盛岡藩知事

牧野長岡藩知事

京極多度津藩知事

京極丸龜藩知事

大給龍岡藩知事

同宗藩に合併ノ部

一 鞠山藩 福本藩 高須藩

藩農ニ歸セシ部

一 苗木藩・三田藩・膳所藩

一 明治四年辛未六月徳山藩山口藩ニ合併セリ、

一 津和野藩願之通、藩ヲ廢シ濱田縣管轄ナリ、

一 今部大溝藩知事其職ヲ辭ス、

一 名古屋城樓上金造ノ鯢魚兩頭、世ニ名高カリシ品ナル

カ、今般同藩ヨリ之ヲ東京ニ送り、

朝廷へ獻納セリ、高サ九尺餘、鮮甲鱗尾皆ノベ金ヲ以

テ包ナリ、持運ノ人兩雙ニ八十人ヲ用ユト云、

一 福岡藩贗札事件ニ付、黒田長知知事職ヲ免セラレ、有

栖川宮代テ其職ニ任セラレ、七月二日東京發途ノヨシ、

一 從來ノ漢學ハ其教方甚迂遠ニシテ、生徒皆成立ニ苦メ

リ、因テ今般大學ノ本校開興ニ付テハ、最初ニ教ユヘ

キ書ハ皆和譯シテ授ケントノ御趣意ニテ、原書已ニ和

譯最中ナリト云、

一 當今大學ニテ語彙ト稱スル日本字引編集アルヨシ、迫

々出來スベシト云、

丹波國山家・綾部・柏原・福知山・園部・龜岡・篠

山七縣在京參事一同ヨリ合縣歎願書ノ寫、

一 廢藩爲縣ノ御趣意ヲ奉戴仕候處、區々ノ小縣非無鎖碎

之憂、大政ノ御妨ニ相成候ニ付、丹波七縣申合せ合縣

ノ儀奉願候、從來藩債等ノ取調臣等關係罷在候儀ニ付、

迫テ明細書ヲ以言上可仕外、區々ノ微衷御採用奉願候

云、

御布達留

御參

内之上坊城殿の御直ニ  
御受取

鹿兒島藩

知事島津忠義

免本官、

辛未七月

太政官

一今般藩ヲ廢シ縣ヲ被置候ニ付而ハ、追テ

御沙汰迄ハ、大參事以下是迄之通事務取扱可致事、

辛未七月

太政官

一今般廢藩被

仰出候ニ付而ハ、追テ

縣治一定之御規則可被

仰出候得共、差向キ是迄取扱來ハ庶務ハ大參事處決可

致、尤重大之事件者伺出、可請 朝裁事、

辛未七月

太政官

別紙七通從

朝廷被 仰渡趣、

從四位様於東京被遊 御承知ハ段御到來ハ、依之

從四位様

從三位様弥

朝意御遵奉之御事ハ條、一同心得違無之、尚再度何分

被 仰渡迄之間、土農工商百般之役職是迄之通勉勵可

罷在候、此段別ハ相違ハ條、不洩様向々江可申渡ハ、

明治四年辛未八月五日

知政所

1053の2

一

知政所之事

鹿兒嶋縣廳

右之通被相改ハ條、向々江可申渡ハ、

辛未八月

鹿兒嶋縣廳

1053の3

一鹿兒嶋并諸郷江被掛置ハ御制札之御副札、右可取除ハ、

一舊藩境被建置ハ標木、右藩之字、縣字ニ可書改ハ、

右之通被仰付ハ條、可承向々江早々可申渡ハ、

辛未八月五日

鹿兒嶋縣廳

1054の1

通達留

從三位様御夫人

神秀光慈靈姫命

御同公御實母

豐寶眞霧姫命

右之通 御謚御改號被爲在ハ條、奉承知ハ様向々江可申

渡事、

辛未八月八日

一三等給人四人

右者定員三人被定置り得共吟味之譯有之、此節壹人被相重、右之通定員被定置り條申渡、可承向にも可申渡事、

辛未八月

雜書留

1055

一從四位様御儀去月廿二日御用之儀有之、御參 朝被成り様萬里小路宮内大輔殿方御達ニ付、翌廿三日夕四字御參 内被遊り處、山里御茶屋に緩く被爲召、御手自御酌ニおゝ  
天盃 御拜戴、七字過被遊 御歸邸り段御到來、恐悅之御儀り條、一同奉承知り様御布告有之度、此段申出り、以上、

明治四年辛未

八月十八日

家令

紙紙

本文奉承知、一同にも可被申渡り、以上、

辛未八月

傳事

1055

通達留

一牛肉之儀、患者藥用者勿論人民健康之爲必用之要品ニあり、死肉相用りる者意外之害毒を受り譯ニ付、兼り於病院生牛肉相撰申請等差出來り處、邊鄙之諸郷等右之辨無之、問ニ者死牛之儀鹽漬こいたし、諸嶋品と名付商人共商賣いたしり聞得も有之、旁不可然事ニり、且又豚肉之儀も殺り節水中に濁り仕來專有之、右者別り不盡、是又意外之受害毒り趣、御雇入之英醫より申出り間、右之仕來一切令停止り、就る者以來心得違無之様支配頭等より屹と可申論置、左りる不正之肉等致商賣り儀於有之者夫々可及沙汰り條、此旨不洩様一同に可致布告り、

但諸島方持渡り牛肉之儀も、於諸島別り念入り様可申越旨生産奉行へ可申渡り、

辛未八月

鹿兒嶋縣廳

通達留

1057の1

鹿兒嶋近在五ヶ村之内に土族御免借地之儀惣御檢地ニ付る者、屋敷成御免可被仰付旨被仰渡置り得共、兎角惣御檢地相濟迄之間、當分形御年貢上納無吳儀上納いたしり



様被仰渡度、於其儀者借地人之内ニ奉御日限内上納難遂向も有之の間、御日限不差掛内夫々村長方ハ屹と皆納いたしハ様被仰渡度、此段申出外、以上、

辛未八月十八日 民事局

右之通被仰付外條向ハ可申渡外、

八月 鹿兒嶋縣廳

1057の2

一醫學校之儀今般御吟味之譯有之、本學校ニ管轄被仰付就る者、醫學局并小學第五校ニ於る生徒修行猶又可致精勤外、元來醫術之儀ハ司命之要道、人身之死活ニ致關係ハ緊要之學ニ外處、從前之舊習醫生を蔑視し、甚敷者是を度外ニ置る士大夫不齒ニ至り、醫家も亦咸<sup>(マシ)</sup>其諍を受卑屈之醜態を極外類、早竟生徒之教導不行屈、普通之學問疎外故、今日ニ至り陋習不相革譯ニ外、右等弊風を一掃し、自今以後本學校之規則を遵守し、學術成業之者者醫官ニ不止、治事諸官にも御拔擢可被仰付外條、此旨體認し、聊無怠慢學術研究一層奮起業之偉功を奏し、皇國之御用相立外様可心掛外、此旨本學校ハ申渡、可承向ハにも可申渡外、

辛未八月 鹿兒嶋縣廳

1057の3

一當年壹分出銀上納方之儀ニ付、御改元を以例年之振合通取揃、諸財掛出納奉行ハ引合、當十月中金藏ハ致上納外様、向ハ被仰渡度外事、

辛未八月廿五日 會計局

1057の4

一禮葬式壹部

代錢六貫四百文

右此節上町書店白男川齋之丞上木いたし、右直段を以賣弘方申付外間、入用之者者相對買入外様、向ハ可申渡事、

一醫學校之儀本學校管轄被仰付外付、學頭初諸官其外書生迄も都而被廢外、此旨申渡、可承向ハにも可申渡外、

辛未八月廿八日 鹿兒嶋縣廳

1057の5

一醫學校役員之儀被廢、改る本學校諸官被仰付、病院ハ被掛置外處、俸祿・俸金之儀者都而是迄之通被下置外條、可承向ハにも可申渡外、

辛未八月廿八日 鹿兒嶋縣廳

1058の1

通達留

一 任鹿兒嶋縣權大參事

大山格之助

右

宣下候事、

八月

太政官

右之通

宣下有之、今日奉命外條向くは申渡、

御裏其外様は申上、佐土原并中山王は相達外様、裏役

頭・佐土原假屋守・琉球館聞役にも可申渡外、

辛未九月二日

鹿兒嶋縣廳

1058の2

一 今般 御親兵編製ニ付、浮人數并手負・病身又者學業之願意有之、御斷願出歸縣被仰付外面く、戊辰來屢軍功も有之、且遠路致出兵居外付、格別之御取譯を以此涯從前之通俸祿被下置外條申渡、向くにも可申渡外、

辛未九月三日

鹿兒嶋縣廳

1058の3

一 今般

皇國一途大御變革被仰渡外儀、第一有名無實之大弊を除キ今層武備充實いたし、且士民各職業を勉勵せしめ、

隨萬國對峙之 御趣意ニ付處、元來御縣内之儀者往古々實武之設萬古不拔之良法相重居、方今莫大之出兵御沙汰にも相成事外間、此節現兵員取調之爲、御縣内

中常備・豫備共近く於吉野原大訓練被仰付外間、手續等之次第且日限等之儀、萬事軍務局ニお調早く申出外様申渡、地頭其外可承向くにも可申渡外、

辛九月

鹿兒嶋縣廳

1058の4

一 東京

警固卒千人

但貳拾歳より四拾歳迄

右至急上京被仰付、士族并諸局附屬迄之内より人撰を以可被仰付外間、懇望之者者來ル十二日限願出外様、向くにも可申渡事、

但無筆之者者不被仰付外、

辛未九月

傳事

1058の5

一 高貳拾五石以下少高・無高之鹿兒嶋士族壹家部は、御救助米三拾俵宛被下外事、

一家督之者軍治之諸官相勤、六石以下之俸祿被下外者者、

其祿合本行之通被下、尤部屋栖之者俸祿之儀者別段に  
而不及差引、

一畫飯米被下外者并旅行勤之者、年中之麻扶持米其數合

る六石以上ニ及外者者別段不被成下外、尤臨時之旅行

等者非此定、

一近來致別立父兄同居ニる本家高貳拾五石以上之者者、

貳拾五石以下たり共同居中者御扶持米不被下外、

一臺場見締人大袍掛之御救勤者此節引取、

一三口番・御文書藏番人并諸所鹽硝藏・大門口遠見番人

者、此節方都(野力)究士部屋栖之者に被仰付、限月并扶持

米等者是迄之通、

一學校出席之上繰廻を以御救米被下外儀者、家督者勿論

部屋栖迄も此節都引取、

一比志嶋轉住士仕付飯料被下置外面ニ者此節引取、

一家部ニ付六石ツ、被成下外上者、是迄四ヶ月目御救米

被下外家部も一同十分之御宛行相成外付、以來者臨時

之御救米等者一切不被成下外、

一廢官之面ニ六石以下之御養料被下置外者者、右者不被

成下外、以來御救助米六石被成下外、

一六石以下之御切米等被下置外者者、右石數合る六石被

成下外、

一當時貳拾五石以上之者、以後高相下外共、右同様取數

ニ者不被仰付外、

一諸郷中宿之者者上着同様之譯故、中宿之内者御救助米

不被成下外、

一此節諸郷掛持之自作地其郷に賣拂、且差上り者者追ふ

返高被成下外付、當分貳拾五石以下ニるも右扱取ニハ

不被及外、

右者此兒嶋士族之儀、多者俸祿を以經營辨來り處、

少高・無高之者及數年、先年及御救助別段高被差分

置、夫々御救之道相立り得とも至當分難澁之士多、

依之別段之御吟味を以右之通被仰付り條、貳拾五石

以下之面ニ者別紙雛形之通明細書相認、來ル十日限

御達に相付可差出外、此旨向ニ可申渡外、

但當分御救勤被仰付置外面ニ者、御救米被相渡迄

之間當分通可相心得外、

辛未九月四日

鹿兒嶋縣廳

一高員數

一勤方有無

一俸祿之有無并員數

一御養料有無并員數

一旅行御扶持米并晝飯米之員數

一御切米有無并員數居所

但中宿者其郷に可申出外、

右之通候也、

何番方限  
何番士族

何某

1058の6

一御當地人家床下土取得方近日より上方限取付相成、鹽

硝局人足差廻度旨火藥局より申出外付、向々被仰渡度、

此段申出外、以上、

辛未九月八日

軍務局

右之通被仰付外條向々に可申渡外、

辛未九月八日

鹿兒嶋縣廳

1058の7

一來ル十五日於吉野原大調練被仰付外付、當朝早鐘之令

を以諸隊軍務局并練兵場に相揃繰出之筈外間左之通、

一當日縣廳初治事之諸局占切被仰付外、

一任職・無職共兼る御定之場所罷出に不及外、

一吉野江治事屯集場被定置外付、出張勝手被仰付外、

一火用心別る可入念外、

右之通向々に可申渡外、

辛未九月

鹿兒嶋縣廳

1059

御系圖 玉里久光公

明治四年辛未九月十日

特詔、賞三久光積年功勞別樹之家、而分三賜忠義賞典十萬

石之半額五萬石、以充三久光家祿、尚住于四配第、至丁丑、兵燹後移居于下甲郡

○十三日敍從二位、

1060

御系圖 忠義公

九月十日

詔、賞三久光功勞別樹之家、分三賜忠義賞典十萬石半額五

萬石、以爲三之家祿、

○十三日敍從三位、

○二十四日應<sub>レ</sub>徵參濱

離宮、忝<sub>レ</sub>賜

天盃、

1061

雜書抄

明治四年辛未

一九月十日朝四ツ時より大圓寺に被遊 御參詣、晝八ツ

前 御歸邸相成り處、朝より御用召ニ相成、直ニ

御參 内被遊り處、左之通被爲蒙 仰り、

從三位島津久光

積年功勞不少、格別之 思召ヲ以分家被仰付、同姓

從四位御賞典拾萬石之内、五萬石爲家祿分賜り事、

辛未九月十日 太政官御印

御朱印

從三位源朝臣久光敍從二位

太政大臣從一位藤朝臣

實美宣

大内史從五位源朝臣

不麿奉

明治四年辛未九月十三日

白木十二番箱ノ内九番

從四位島津忠義

同姓從三位儀、積年功勞不少候ニ付、格別之

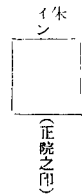
思食ヲ以テ分家被

仰付、御賞典十萬石之内五萬石爲家祿分賜り條、此旨相

達候事、

辛未九月十日

太政官



從四位島津忠義

先般從三位

宣下再三固辭、無餘儀被

聞食候處、今般更

思食ヲ以テ、從三位

宣下被

仰出候事、

辛未九月十三日

太政官



(天皇御璽)

從四位源朝臣忠義

敍從三位、

太政大臣從一位藤原朝臣實美宣

大内史從五位源朝臣不二磨奉

明治四年辛未九月十三日

右ノ包紙ニ

九番

一御分家御賞典高御分賜御書附一通

一從三位

宣下之御書附一通

一宣旨 一通

右致御格護置候様御家令喜入密ニ致承知、桐白木箱江入附東

郷弥十郎・和田助作立合、明治九年丙子一月廿四日致御格護

置候事

雜書抄

1063

從三位島津久光

先般從二位 宣下再三固辭、無餘儀被

聞食ハ處、今般更ニ

思召ヲ以、從二位 宣下被仰出候事、

辛未九月十三日

太政官

從四位島津忠義

先般從三位 宣下再三固辭、無餘儀被

聞食ハ處、今般更ニ

思召ヲ以從三位 宣下被仰出候事、

辛未九月十三日

太政官

右未九月十三日九ツ過式部省より禮服只今御用御承知

相成、直様御直垂被爲 召御參内被遊ハ處、右之通御

書附御頂戴相成、御歸掛三條様ニ爲御禮被爲入、八ツ

過被遊 御歸邸、直ニ御書附拜見被仰付候事、

明治四年辛未九月十三日

太政官十三日付之次ニ

從四位様 御事、別紙之通於東京被爲蒙 仰候段御到來

ハ、依之嶋津珍彦殿一列且御當地士族之面々并附士、明

後晦日家令江相付御祝儀可申上ハ、

右外略ス

右之通向々江可致通達事、

辛未九月廿八日

鹿兒嶋縣廳

1064

通達留

一新規拜命并轉任等之輩、自今御請書可差出事、

但御請書差出し日を以任官當日ト致シ事、

辛未九月廿五日 太政官

神殿ヲ造リ、  
神器ト  
列聖皇靈トヲコ、ニ奉安シ、仰テ以テ萬機ノ政ヲ視ン  
ト欲ス、爾群卿百僚其レ斯旨體セヨ、  
明治四年辛未九月十四日

一租税取立方當未年者、悉皆舊貫ニ仍リ可申旨先般及布  
告外處、夫米永錢之儀者當未年より廢止被

仰出外條、此旨更ニ相達シ事、

辛未九月廿五日 太政官

今般別紙

右未九月廿五日金谷少主記を以御渡相成外

詔筆之通被

一新任又者御用ニ付各處在勤被命り官員、是迄判任以下

仰出外付る者、追ふ

ノミ家族引纏旅費被下外處、當月廿五日ヲ總る不被下

外事、

皇靈、當分  
賢所に被爲遷候事、

辛未九月廿五日 太政官

辛未九月 太政官

通達留

一朕恭惟ミルニ、

神器ハ

自今九月十七日於 宮中  
皇大神宮御拜式被爲在、  
主上 中宮御遙拜并百官拜禮被

天祖威靈憑ル所、歷世

仰出外事、

聖皇ノ奉シテ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナリ、今ヤ朕

一同日 賢所 御親祭、

不逮ヲ以テ復古ノ運ニ際シ、忝ク鴻緒ヲ承リ、新ニ

中宮御拜并百官拜禮被

仰出外事、

但當年之儀者諸省奏任官以上參可致事、

辛未九月 太政官

來ル十七日

皇太神宮御拜并 賢所御祭典ニ付休暇之事、

辛未九月 太政官

御布達留

詔書

1066の1

朕惟フニ、風俗ナル名移換、以テ時ノ宜ニ隨ヒ、國禮ナル者不拔以テ其勢制ス、今衣冠ノ制中古唐制ニ模倣セシヨリ、流テ軟弱ノ風ヲナス、

朕太々慨之、夫神州ノ武ヲ以テ治ルヤ、固ヨリ久シ、

天子親ラ之カ元帥ト爲リ、衆庶以テ其成ヲ仰ク、神武創業・神功征韓ノ如キ、決テ今日ノ風姿ニアラス、豈ニ一

日モ軟弱以テ天下ニ示ス可ケンヤ、

朕今斷然其服制ヲ更メ、其風俗ヲ一新シ、祖宗已來尚武

ノ國體ヲ立ント欲ス、汝等ソレ

朕力意ヲ體セヨ、

右ノ通明治四年未九月十四日東都

主上太政大臣へ勅語アラセラレタル由

汝等積年苦勞シ以テ今日ニ到ル、謂ク實力ナル者、全ク汝等カ服役スル在リ、

朕太々之ヲ喜トス、殊ニ方今外交内務日新ノ時ニ當リ、

邦家盛衰ハ實ニ兵制ノ強弱ニ在ス、汝等深ク

朕力意ヲ體シ、弥以テ紀嚴律明、衆心一致シ勵精力セヨ、

兵部省

右明治四年辛未九月三日東都浜離宮ニ於テ供奉ノ兵部

1066の2

1067

一先般清國へ差遣サレシ伊達大藏卿・柳原外務大丞其他隨從官員一同引纏メ歸國可致トノ命アリ、

一至急御用有之、外務大記化房義實清國へ被差遣ノ命アリ、

通達留

一華族より平民ニ到迄互ニ婚姻被差免外條、雙方願ニ不

及時ニ戸長ハ可届出事、

州送籍方之儀者戸籍法第八則・十一則迄ニ照準可致

1068の1



事、

辛未八月

太政官

一散髪・制服・略服・腕刀共、自今可爲勝手事、

但禮服之節者帶刀可致事、

辛未八月

太政官

右之通於東京被 仰出外段申來外條、向々江可申渡外、

辛未九月

鹿兒嶋縣廳

一着服之儀別紙之通被

仰出外處、當縣之儀是之略服勝手ニ被仰付置外事ニ由、

別改相替儀熟之外得とも、已來者治事局出仕之面々を

始、筒袖袴ハツチ着用可爲勝手外、此旨向々江可申渡

外、

辛未九月十八日

鹿兒嶋縣廳

通達留

一地方城郭之儀兵部省管轄被仰付外段、今般從

朝廷被 仰出外付、縣廳并傳事方之儀明後四日方客屋

江被引移外、此旨向々江可申渡外、

辛未十月二日

鹿兒嶋縣廳

縣廳轉局ニ付る者諸局者先當分通ニ由、局々方日々壹

人ツ、縣廳之内方相詰御用相辨外條、向々江可申渡事、

右之通明治四辛未十月二日被仰渡外、

通達留

一穢多・非人等之稱被廢外條、一般民籍ニ編入シ、身分

職業共都同一同ニ相成外條可取扱、尤地租其外除蠲之

仕來ニ有之外ハ、引直シ方見込取調、大藏省江可窺

出事、

辛未八月

太政官

穢多・非人等之稱被廢外條、自今身分職業共平民同様

たるへき事、

辛未八月

太政官

別册之通從東京被

仰渡外段申來外條、取調申出外儀共民事局江申渡、向

々江可申渡外、

未十月三日

鹿兒嶋縣廳

1070の1

1068の2

1069

一 國學局  
一 漢學局

右者本學校之儀、三學兼修之學課ニ追々進歩いたし、殊更和漢専門修學之規則も相立、殊ニ此節廢藩付る者多端之學館被相立置<sub>レ</sub>譯無之付、右兩局諸官共被廢<sub>レ</sub>條申渡、可承向<sub>レ</sub>も可申渡<sub>レ</sub>、

但 兩局之儀者本學校諸官<sub>も</sub>可相受取<sub>レ</sub>、  
辛未十月三日 鹿兒嶋縣廳

一元旦

天長良兩賀表、自今式部寮<sub>ニ</sub>可差出事、

但 知事<sub>(拜カ)</sub>關員之節、奏任ハ直ニ同寮<sub>ニ</sub>可差出、判任并士族之拜賀ハ參事<sub>ニ</sub>テ相受、諸事從前之通可相心得事、

辛未八月 太政官

別紙之通於東京被 仰渡<sub>レ</sub>段申來<sub>レ</sub>條、向<sub>レ</sub>可申渡<sub>レ</sub>、

辛未十月五日

鹿兒嶋縣廳

一 監察局之儀、今日より巡察出張所<sub>ニ</sub>轉局被仰付<sub>レ</sub>條、

向<sub>レ</sub>可申渡<sub>レ</sub>、

辛未十月七日

鹿兒嶋縣廳

一 諸人氏神并祖先之祀等者致自祭<sub>ハ</sub>様申渡置<sub>レ</sub>處、問<sub>レ</sub>者不案内之者も有之、恰人或舊修驗等之者相頼致祭祀來<sub>レ</sub>者も有之由、爾來自祭不相調<sub>レ</sub>者者、其方限産土神社司相頼致祭祀相當之事<sub>ハ</sub>付、心得違無之様御縣内中<sub>ニ</sub>不洩様可申渡<sub>レ</sub>、

辛未十月七日

鹿兒嶋縣廳

一來ル十八日

鹿兒嶋神社濱殿

御幸御神事御道筋左之通

御本社より、草牟田本道學校前より、川筋高城六右衛門角より、竹下喜左衛門前通、千石馬場二階堂部角より、伊勢健彦角中福良石燈爐通、吳服町松原神社前方<sub>ニ</sub>織方角より、大門口臺場後鹽濱筋濱殿、

但 還行之節も同斷、

右之通例年御道筋被定置<sub>レ</sub>條、向<sub>レ</sub>可申渡<sub>レ</sub>、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

1071の1

通達留

一人々生命を保護し人間交際之道を勉るは、教化を以業(蒙)味之愚を開外他なく、當春以來學校一新、遍く子弟之教道万被仰付り段者、何れも目視之通こり、就る者追々女子學校をも及興設賦こり得共、急速こ者其運到兼り間、一統其心得を以、爾來男女共教育行届、愚昧を開き往々推行正敷、各一身之職業勉勵こ趣り様可有之儀肝要之事り條、誰人こるも男子之學校者勿論女學校取建度志願之者者、本學校に相付願出りハ、可令免許り、此旨御縣内中へ可致布告り、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

1071の2

一藏版方之儀本學校管轄被仰付り條申渡、可承向に可申渡り、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

1071の3

一民事局之儀今日方築地御茶屋に轉局被仰付り條、向に可申渡り、

辛未十月十七日

鹿兒嶋縣廳

1071の4

奈良原幸五郎  
伊地知壯之丞

右者傳事出仕被仰付、奉祿之儀者本職同様被成下り條、向に可申渡り、

辛未十月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1071の5

一時計に依り時刻之吳同有之、各所學校時限一定無之に付、來月朔日方時鐘之外、晝十二字に當り正午鐘三ツ撞り様被仰付り條、向に可申渡り、

辛未十月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1071の6

一軍備充實之爲、去ル巳年土族高壹石に付三升宛重出米上納被仰付り得共、當秋方御免被仰付り條一同可奉承知り、此旨向に可申渡り、

辛未十月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1072の1

通達留

一外城方之儀、軍務局内出軍取納方跡に轉局被仰付り條、向に可申渡り、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

一 御樓門

一 北御門

一 東高役番所

一 中辻番所

一 西辻番所

一 一平之口番所

一 榭形番所

一 吉野橋番所

一 新橋番所

一 韃韃冬々番所

一 西田橋番所

一 軍馬方

一 米藏

一 金藏

一 縣廳

一 軍務局

一 民事局

一 監察局

一 糧餉方

一 營繕方  
但番所

一 本學校

一 生産方

一 集成館

一 火藥局

右各所門内外に相掛り大丸挑灯丈ヶ者、此節菊御紋相  
改張替方いたしり様可申渡り、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

一 此節貳拾五石以下之士族に御救助米被成下り段者、先  
達る致布告置り通る、右者全躰今日經營難澁之者は  
別段之御取譯を以被下置譯合付、其旨一同厚相心得、  
御救助之詮屹と相立り様心掛、時勢に應し夫々御奉公

相勤り儀肝要之事り條、聊心得違偷安懶惰に相流り儀  
とも有之問敷、左り取扱向左之通、

一 戰死跡等なる、其家二三拾俵以上之御扶持米又者御切  
米等被下置り面々、年限中ハ別段御救助米不被成下り、  
一 右同斷御扶持米等被下置り家督廢官之俸祿者、是迄通  
被成下り、任職之節者官俸等級之通被成下り、

一 舊定府之内養俸并堪忍料米六石以上被下置り者者當分  
通る、爾后養俸不被下節堪忍料米込六石被成下り、  
一 分地別立之者、父兄同居者勿論他家相續等なる實家に  
致同居、實家之高貳拾五石以上者、當人高貳拾五石以  
下なるも、同居中者御救助米不被下り、

但是迄御救助被仰付置り者者別段、

一 家督之者縣外旅行等なる、跡に家族無之者者同斷不被  
下り、

一 罪科有之者、刑律を以御救助米被召揚り儀者勿論御咎  
目中又者嶋方居住之者者同斷不被下り、

一 御救助米引當を以金錢致他借り者者、即可被召揚り、  
一 家督繼目又者任職・免職・病死等之節、御救助米被下  
り面々者、明細書を以傳事に可届出り、

一 俸祿米等手形帳面之いろは順を以米藏より可差廻り、

1072の4

左の此節新ニ御救助米被成下の人數者、十一月十日方右手形帳面可相渡の間、米穀掛出納方右可相請取り、一御救助米被下り次第別表之通、

右之通被定置、當分家督無役又者六石以上之俸祿被下り人數に、別表定ニ基キ十一月朔日右御救助米被下り條、向々に可申渡り、

辛未十月廿五日

鹿兒嶋縣廳

一本局下町會所に轉局之事、

一右ニ付會所廣間其外惣間席、當局に引渡り様民事局に御達之事、

一夜廻檢事、宵之間右廣間に相話り由ニ付、外場所ニ致御用り様監察局に御達之事、

一鞆問所を廢シ水問場大門口出張所に引直し、罪囚事柄ニ仍る者同所ニ可致鞆問事、

右之通被仰付度致吟味り、以上、

辛未十月十日

糺明局

右之通被仰付り條、向々に可申渡り、

辛未十月廿五日

鹿兒嶋縣廳

1072の5

一尾畔山内に猥ニ跡入、竹木に相障り者共有之段相聞得、不可然事り條、方限中より致取締、見當り者者無用捨名前申出り様可申渡事、

辛未十月

鹿兒嶋縣廳

1072の5

一來月十日

皇軍神社御神事ニ付、前日夕七ツ後より相濟迄之間、軍馬方下通融差留り條、向々に可申渡り、

辛未十月廿五日

鹿兒嶋縣廳

(表紙)

忠 義 公 自明治四年十一月  
久 光 公 至同 五年十二月

追 舊 記 雜 錄 卷百八十

1073の1

雜書中

任都城縣參事

右

宣下候事、

辛未十一月十四日

太政官

大山綱良

任鹿兒島縣參事

右

宣下候事、

辛未十一月十四日

太政官

右之通 宣下有之、今日奉 命、條向、江申渡、琉球  
館聞役、江表可申渡、

明治四年辛未十二月二日

鹿兒島縣廳

1073の2

鹿兒島縣  
大參事

西郷隆盛

任參議

右

宣下候事、

辛未六月廿五日

太政官

鹿兒島縣  
權大參事

伊集院直右衛門

任出納權正

右

宣下候事、

辛未七月廿九日

太政官

鹿兒島縣  
權大參事

伊地知正治

任中議官

右

宣下候事、

辛未十月五日

太政官

右之通 宣下有之、向々可申渡事、

辛未十一月

鹿兒島縣廳

通達留

1074の1

未十月朔日、

一他府縣廳へ關涉訴訟ハ、訴人本管廳ノ添簡ヲ以テ當省

へ可申出事、

但人民互ノ訴訟ハ准判規程ノ通可心得事、

辛未九月晦日

司法省

別紙之通諸縣管内不洩様布告可有之候也、

辛未九月晦日

司法省

1074の2

未十月六日

一去ル六月家畜傳染病豫防法中、諸開港場ニ於テ嚴ニ入

船ヲ改メ、當分之内生禽獸ハ勿論、新皮革等輸入ヲ禁

シ候云々、御布告ニ相成候得共、最早不及其儀候條、

此旨更ニ相達候事、

辛未十月

太政官

未十月六日

一今般廢藩付、各地方ニ於テ奸民共徒黨ヲ結ヒ、陽ニ舊

知事惜別ヲ名トシ、恣ニ人家ヲ毀焚シ、或ハ財物ヲ掠

奪候等之暴舉ニ及候者往々有之趣相聞へ、

朝旨ヲ蔑視シ、國憲ヲ違犯シ候次第、其罪不輕候條、

管内嚴肅ニ取締、即決處置懲誡ヲ可加候、萬一手ニ餘

リ候節ハ所在鎮臺へ申出、臨機之措置ニ可及候事、

辛未十月五日

太政官

未九月八日

一諸縣廳上邸被

仰付候事、

但出張官員旅宿之儀者築地新宿町江被設置候條、巨

細之儀者東京府へ可承合候事、

辛未九月

太政官

一未九月廿七日横川少主記ヲ以 御渡相成候

府下諸渡場、是迄帶刀之者無質ニ而乘船候處、自今相

當之質錢可相渡事、

辛未九月 太政官

一元門跡・比丘尼御所之諸寺院從者雇入之儀ニ付、過ル  
五月御布令之趣有之候處、今後右門跡・比丘尼御所及  
ヒ院家・院室平ノ本寺本山等、寺格并ニ在任・留主居  
之差別ナク、從者雇入度向ハ、地方貫屬士族・卒・平  
民之内相雇不苦候條、兼テ御布令之通願濟之上可召仕  
事、

辛未九月廿七日 太政官

未九月晦日  
一從來諸官員旅行之節、其身分ニ應シ長棒引戸駕籠等之

制限有之ハ處、以來之人足遣制限之内差繰ハ敷、相當  
之賃錢を以相對雇ニハ、何等之駕籠相用ハ共勝手  
次第たるへき事、

辛未九月 太政官

別紙六通之通被 仰渡ハ段申來ハ條、向々可申渡事、

辛未十一月二日 鹿兒嶋縣廳

通達留

1075の1

未九月晦日  
一元各藩ニ於テ管下之百姓・町人共帶刀差許、或ハ扶持

米遣シ、諸役免除等申付置ハ分一切禁止ハ事、

但御一新後軍功有之敷、又若從前之分タリトモ、一時  
廢止難相成見込之分ハ巨細取調大藏省ニ可伺出事、

辛未九月 太政官

別紙之通被 仰渡ハ段申來ハ條、向々可申渡事、  
但書之通廢止難相成分ハ民事局ニおるテ取調、早々可  
申出事、

辛未十一月三日 鹿兒嶋縣廳

1075の2

一第十二郷校

右吉野・帶迫・中別府合併

一第十三郷校

右下町

一第十四郷校

右上町

一第十五郷校

右西田町

右之通追々郷校取建方ニ付、右之名目ニ本學校管轄  
申付ハ事、

辛未十一月七日 鹿兒嶋縣廳



1075の3

一絞・斬・梟示等之刑ヲ加へ候遺屍、親族之内請受度望之者有之ハ、下付被差許外ニ付ル者、願出外輩ハ行刑當日東京府囚獄掛ニ可申出、若當日願無之分ハ東校解剖場ニ引渡置外間、同所ニ可申出者也、

但府縣ニ於テモ、刑屍取計之儀右ニ準シ不苦外事、右各府縣ニ於テ郡内末々迄一般ニ告諭可有之ハ也、

辛未十月

司法省

別紙之通被仰渡外間、向々可申渡外、

辛未十一月五日

鹿兒嶋縣廳

1075の4

一御城内之儀追々諸局轉局ニ付ル者、取締向一漚不行届外ル者不相濟事外付、詰前之檢事・徇達より時々致見締、不締之場所老形行可申出外、左外御門番之儀も嚴重相勤、是以聊不締之儀共無之様可取計外、此旨監察局并可承向々可申渡外、

辛未十一月五日

鹿兒嶋縣廳

1075の5

辛未十月十二日横川少主記を以御渡

一自今位記・官記ノ始メ、一切公用ノ文書ニ姓尸ヲ除キ、苗字・實名ノミ相用外事、自今奏任官位記・官記一切

於式部寮御渡相成外事、

辛未十月

太政官

十月十四日横川少主記を以御渡

一平民廻國修行ノ名義ヲ以テ六十六部ト稱シ、仲間ヲ立寄宿所ヲ設ケ置、米錢等ノ施物ヲ乞外儀、自今一切禁止候事、

但從前寄宿六部共ノ内、脱籍ノ者ハ復籍規則ニ照準シ、其本貫へ歸籍可爲致事、

辛未十月

太政官

別紙之通被 仰渡外條、向々可申渡外、

辛未十一月五日

鹿兒嶋縣廳

1075の6

一會計局之儀今日より縣廳郭内ニ轉局相成外條、向々可申渡外、

辛未十一月七日

鹿兒嶋縣廳

1075の7

一舊寺社方

一舊宗門方

一舊御製藥方

一舊御厩

一舊屋久嶋方

一藍玉方

一木之實油方

一蠶織方

右考諸所御在合錢之内、持高名寄引當を以利付拜借申付置ハ株々、本金十分之二上納スる、殘金考都ル被下切申付候、左ハ上納方ニ付ル考、向ク引付を以來月十五日限都ル金藏上納スる納濟之上考、蠶織方會社入付申付ハ條、可申渡ハ、

但當年中利銀之儀考不及上納ハ、

辛未十一月八日

鹿兒嶋縣廳

1075の8

一米穀其他拔賣之儀考、從前方追ク取締被仰付置ハ事ニ、當世態殊更不行届ハる不叶譯ハ處、比日ニ到稍等閑之向相聞得、追ク大坂表へ無手形之拔物いたし、取揚相成ハも不少、不可然事ハ一條一涯嚴重取締いたし、諸郷津口之儀地頭并詰檢事所役ク最嚴密行届ハ様可致ハ、左ハ上ハ拔物見當申出ハ者ニ考御定之御褒賞弥被下ハ條、一統右趣意致貫徹ハ様、向ク可申渡ハ、

辛未十一月

鹿兒嶋縣廳

1075の9

一今般廢藩被仰渡ハ付ル考、七百年來臣子之情義實ニ難忍次第ニ、末世ニ至り御舊恩不可奉忘儀考勿論之事

ハ付、舊御藩内之人民上下一統より、惣代兩名を以東京表 從三位様ハ、一歳一次年始之御祝儀申上サ筈、

右ニ付ル考進上物等爲手當用、應人戸來申年頭より錢貳百文ツ、出錢いたし、正月中於向ク取揃諸財方ハ可相納ハ、此旨御縣内中道之嶋迄も不洩様可申渡ハ、

但諸嶋之儀出錢之代ニ砂糖其外産物を以相納、且上納比合等之儀生産奉行致吟味可申出ハ、

辛未十一月

鹿兒嶋縣廳

本文ニ付家来・下人迄ハ心人戸出錢貳百文宛被付ハ事

1075の10

一吉野方限兩郷校、此節合併スる本學校管轄第十二郷校ニ被相定ハ付、吉野御假屋井村長役所ハ被召建、左ハ右役所之儀帶迫郷校跡ハ被召移、中ハ之別府郷校家作郷力を以引直方申付ハ條、民事局・本學校ハ申渡、可承向ハも可申渡ハ、

但村長役所引直之上郷校被召建ハ、

辛未十一月

鹿兒嶋縣廳

1075の11

一來十七日大嘗會、班幣鹿兒嶋神社・枚聞神社ハ別紙御目錄之通被相渡、知事・參事之内社頭ハ參向致奉納、

1075の12

地方官拜禮、奏任以上老玉串を可捧旨被仰出付、同日右兩社江權大參事參向、御神事有之筈外條、兩郷地頭及相勤外様可申渡外、此旨向江可申渡外、

辛未十一月

鹿兒嶋縣廳

一大嘗祭班幣 五色帛各五尺

布 一端

錦 二屯

祭奠料金千疋

右鹿兒嶋神社

五色帛各五尺

布 一端

祭奠料金五百疋

右枚聞神社

一諸郷自作地四町以上之餘地、未相片付分老望手有之迄之間、持主是迄之通支配申付外條、向江可申渡事、

辛未十一月

本マ、

一御縣内津々浦々、瀬戸内商賣舟且漁方ニ付出舟之節

1075の14

老、往來滯船中飯料米乘セ付出帆改方相成外得共、當年老米穀出來前及宜敷、右之通往來飯料米外ニ用心米積入度向老、每船拾石限積出差免外條、津々浦々尚又無手拔嚴重相改可差通外、尤右員數以上積入外向老、先規之通取揚ニ可及外、此旨可承向江可申渡外、

辛未十一月十三日

鹿兒嶋縣廳

一來月十七日大嘗祭、十八日豐明節會被爲行外付、全國

一般諸神社ニ於テ相應之神事執行、衆庶一同可相祝事、

但兩日刑罰之儀可令禁止事、

辛未十月

太政官

一奏任以上苗字・通稱・實名・年齢等早々取調可指出事、

辛未十月

太政官

右之通被仰渡外、

1075の16

依願免本官

辛未十月廿四日

太政官

鹿兒嶋縣  
權大參事  
橋口兼種

橋口彦次病氣ニ付辭職之願申出外處、右之通於東京被仰渡外付、今日名代に相達候、此旨向くは可申渡り、

辛未十一月十四日

鹿兒嶋縣廳

くは可申渡事、  
右之通辛未十一月廿二日傳事方承知外事、

1075の17

一始良郡アヒラ

右者隅州始羅郡之儀古之始良郡ニ有、後年ニ到り始ノ字始ノ字ニ誤テル證據有之外付、右之通舊名ニ被復外條地頭に申渡、向くは可申渡り、

十一月十四日

鹿兒嶋縣廳

1075の20

一紡績機械御取建之儀、專諸人之辨利且御國産相増り様と之御趣意ニ有、是迄官商之向を以、生産奉行以下掛被仰付置、諸事致取扱外得共、以來諸役々引取、商社之振合を以取扱之者、掛改る支配人申付、宛行錢之儀者是迄員數通別段被差分置候條、從前之趣法に不戻、尚失費相省産品致増殖り様可取計り、左外爾來利益相滿り上者諸學校之費用等ニ可被差向り、此旨會計局に申渡、向くは可申渡り、

一大砲・小銃取始抹方入用ニ付、諸局不用之帳面類、出張兵器方に相渡り様被仰渡度、此段申出外、以上、

十一月十四日

軍務局

但取扱向等相替り儀者致吟味可申出外、

辛未十一月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1075の18

右之通向くは可申渡り、

辛未十一月十四日

鹿兒嶋縣廳

1076

通達留

一御太刀・馬代金壹萬疋

内之浦  
一鹽くつな拾敷

七嶋  
一鯉節五百本入一箱

一猪肉一丸分

1075の19

一本文兩人儀者旧  
從三位様御側役相動居外

町田正藏  
(悉但旧名内膳)

山内作次郎

右者東京表

從三位様は、來申年頭御祝儀爲惣代上京申付外條、向

但味噌漬・糟漬之間

一 泡盛三壺

白糖方

一 砂糖漬五樽

一 國府煙草拾斤

但五ヶ所貳斤ツ、

一 赤貝鹽辛一壺

一 出水海老三百連

櫻島

一 みかん數三百一箱

右老

從三位様に年頭御祝儀惣代を申上候儀ハ申渡置外通ニ  
有、右品々進上之筈外條、向々こおるて致手當外様會  
計局に申渡、一同にも可申渡事、

通達留

1077

一

積年功勞不少云々九月十日付

從三位島津久光

從四位島津忠義

同姓從三位儀積年功勞不少云々、

右ノ二通ハ前ニアリ略ス

從三位様御事御別紙之通被爲蒙

仰候、依之島津珍彦殿一列初御當地士族之面々并附士、

來月二日於二丸家令に相付、

御當人様東京表

從三位様に御祝儀可申上外、

右之通向々には可致通達事、

但改服

辛未十一月廿八日

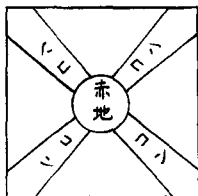
通達留

1078の1

一 各開港場税關并監船及附屬船ノ旗章、左之通被相定候  
間、爲心得相達候事、

辛未

太政官



1078の2

一 此節蘭人シケール事本學校教師に頼入相成外處、全

躰外國人交際ニ付る者、  
朝廷より被

仰渡置り趣有之、厚待遇之事り付、聊無作法之儀共無  
之様一統可用心り、此旨縣内には不洩様可申渡り、

辛未十一月廿五日

鹿兒嶋縣廳

通達留

(本文書ハ一〇七三の二号文書ト同文ニテ略ス)

1079の1

九等官

一本學校調役助

但三等副教官頭

右之通被相定り條本學校に申渡、向々に可申渡り、

辛未十一月廿九日

鹿兒嶋縣廳

1079の3

一各地方官におゐて、外國商民より私に器械・船艦等買  
入、或ハ金銀借用之儀決る不相成旨、己巳二月以來再  
三御布告有之り處、舊藩之内に於て右御趣旨に悖戻し、  
終に御國內之大負債を醸出り次第に到り、若實に恐惶  
に不堪事と存り、就る者若今後猶右様之負債を生しり

る者不相濟事ニ付、前々御布令之趣確守り儀ハ勿論、  
各開港場・府縣於ても嚴重取締方有之度り事、

辛未 本ノマ、

1079の4

一御縣内出產茶之儀、是迄官計を以御買入被仰付來りへ  
とも、來春より諸人勝手賣買被仰付、就る者縣内用分  
外ハ、是迄横濱・長崎等に被差出吳人商法相成來り付、  
右通勝手賣買被仰付りも、いつれ吳人引合商法品に  
付、望手を幸ひ、不拘高下賣捌り様相成りる者、御產  
物之詮無之事り付、商人又者郷計を以他國に致積出度  
向者、國產會社に相付賣捌先キ巨細相記願出り様、左り  
る荷爲替趣法取扱り儀藤安喜左衛門に被仰付置り間、  
都る積出り茶荷爲替取組を以積出御免被仰付度、左り  
者直成御取締相成可申、自然無手形之茶、前之濱者勿  
論津々浦々より積出り者則御取揚被仰付、萬一脇々右  
拔茶兒當形行申出り者に於て、糺方之上御取揚之儀者是  
迄之通に於て、尤東京・横濱・大坂・神戸・長崎表敏に  
國產會社出張所被召建賦に付、於場所荷爲替方無手形  
之茶持越商法取組之向者、是以現品無用捨取揚り様被  
仰付置度、茶之儀是迄精々御手被召付、於郷々も御

趣意汲受植殖近年斤高相嵩、前文官商被爲解りゝも、

末々迄厚く心を用ひ手入拵等行届り様、第一出産相増

りへハ、各郷ハ勿論御縣内一統潤ひ相成事り間、此末

植殖方地頭江分る被仰渡、依郷是迄茶方在錢之内り、

前拜借を以手入拵等取計り郷々不少、右所之郷々形行

國産會社江申出り様、左りハ、御繰合を以五朱利足こ

る御貸渡被仰付、返上方こ付る者、現錢又者出産之茶

こるも辨利こ引結被仰付置りハ、現茶者三嶋御下等

こ被振向度、左りる拜借願出り郷々者、願書こ返上向區

別を以願出り様被仰渡置度致吟味、此段申出り、以上、

未十一月

會計局

右之通申付り條、向り江可申渡り、

辛未十一月廿九日

鹿兒嶋縣廳

御布達留

一戸數幾ッ

一家部幾ッ

右士族

男拾四歳以下何人

内

午御改後生子何人

男拾五歳者貳拾歳迄何人

男貳拾壹歳者三拾九歳迄何人

男四拾歳者五拾九歳迄何人

男六拾歳者七拾九歳迄何人

男八拾歳以上何人

女拾四歳以下何人

内

午御改後生子何人

女拾五歳者三拾九歳迄何人

女四拾歳者七拾九歳迄何人

女八拾歳以上何人

合男何人

合女何人

右之内廢疾人何人

内

男何人

女何人

外ニ  
午御改後死亡人何人

内

男何人

女何人

一戸數幾ツ

家部幾ツ

右家來下人

右之通相違無御座り、以上、

月 日

何番方限

何番士族

何の何かし

通達留

1081の1

鹿兒嶋士族諸郷抱地自作地之儀其郷士族に賣渡、右返高  
壹石ニ付、代錢百五拾貫文直成る返高申受被仰付り付、左  
米穀掛出納奉行引付を以當十一月限金藏に可致上納、左  
りぬ當秋迄者、應石數所務米・御藏米之内に追り可相渡  
旨被仰渡置、既今日限り處、上納不致人數過分ニ相殘  
居、右者此節<sup>ホマ</sup>、銀十分貳上納、且者當時米價相場  
等致下落、難澁之向も有之哉ニ相聞得り付、上納方來月  
廿日限被召延、右日限<sup>ホマ</sup>、上納被仰付り條、向<sup>ニ</sup>可申  
渡り、

未十一月廿九日

會計局

1081の2

(本文書ハ一〇七八の二号文書ト同文ユエ略ス)

1082

通達留

鹿兒嶋士族每春人別差杉差入代錢、一家部ニ付三拾貳文  
ツ、近在之内に差入方被仰付、右出錢壹分出銀同様御達  
り取揃方被仰付置、高百石を百九拾九石迄三拾貳文、貳  
百石より貳百九拾九石迄六拾四文ツ、<sup>(次)</sup>限無親疎右之  
通致取揃方、來ル廿日限當局に相納り様可取計り、以上、  
未十二月七日 民事局

1083の1

通達留

自作地之儀鹿兒嶋・外城共掛持不相成、當七月限其郷<sup>ニ</sup>  
に賣渡り様被仰渡置り處、期限中不相片付地面も數多有  
之、銘々差上切願出り、右高株當秋を免立申渡相當事り  
得共、現事ハ山地等ニ上納方難澁之者も可有之り間、  
當秋迄者本高主に取納米相請取、出来總屹と相遂り様、  
左りぬ來年を免立申渡り様被仰付度り事、

右之通被仰付り條、於向<sup>ニ</sup>致取扱り儀者其通る、御



當地者御達、外城者地頭より早々布告可有之、

未十一月 會計局

1083の2 (本文書八一〇七六号文書、同文ユエ略ス)

(本文書八一〇七三の一号文書ト同文ユエ略ス)

1083の3

一長谷神社

一小城神社

1083の4

右龍之尾神社江 御合社

一大平神社

右松原神社江 御合社

右之通被仰付外條社司江申渡、向々江も可申渡外、  
本ノマ、

1083の5

諸藏納紙札之儀、拾五兩札以上於國鈔方眞偽致鑑定、包方之上相納外様被仰渡置外處、至此比自分包等こる相納外者も有之哉こ相聞得、取締こも相抱事外付、以來者國鈔方包之外一切不相納様、屹と布告可有之事、

未十二月 會計局

1084の1

通達留

下莊内之事

一都城

上莊内之事

一莊内

右者此節新縣被召建外付、以來右之通唱被相替外條地頭江申渡、向々江も可申渡外、

辛未十二月

鹿兒嶋縣廳

1084の2

一今般西海道從來ノ諸縣ヲ廢シ、更こ左之縣々被置候事、

廢縣從前管轄ノ地所、當末年外物成・鄉村等新置縣

々江可引渡事、

今般廢縣ノ官員、追外御沙汰迄新置縣令并參カ事ノ差

圖ヲ請ケ、從前之廳こ於テ事務可取扱事、

美々津縣

日向國

那珂郡ノ内

宮崎郡ノ内

諸縣郡ノ内

兒湯郡

白杵郡

都城縣

日向國

那珂郡ノ内

宮崎郡ノ内

諸縣郡ノ内

張紙<sup>二</sup>

本文ニ付都城縣・美々津縣堺者去川筋中央ニ外事

大隅國

始羅郡

肝屬郡

噲啖郡

大隅

菱刈

桑原郡

張紙<sup>二</sup>

本文ニ付櫻嶋之儀、鹿兒嶋縣管轄相成外様伺出之賦外

大隅國

鹿兒嶋縣

熊毛郡

馭謨郡

薩摩國一圓外琉球國共

外諸縣郡略ス、

右之通諸縣被置候ニ付、從前管轄之縣々より地所

物成・鄉村等、當末年方可請取事、

108403

但高反別一村限村高等取調、大藏省江可差出事、

辛未十一月

太政官

薩摩國一圓

鹿兒嶋縣

大隅國ノ内熊毛郡・馭謨郡

一高三拾二萬石餘

内薩摩國一圓拾三郡

高三拾一萬五千石餘

元鹿兒嶋縣

大隅國熊毛郡

元鹿兒嶋縣

高五千石餘

大隅國馭謨郡

元鹿兒嶋縣

高千石餘

外琉球國

日向國之内

大隅國

都城縣

高合四拾三萬石餘

日向國那珂郡之内

高七萬石餘

飢肥縣

同國宮崎郡之内

高八千石餘

飢肥縣

高壹萬四千石餘

延岡縣

日向國諸縣郡之内

高拾萬石餘

鹿兒嶋縣

大隅國ノ内六郡

高二拾四萬石餘

鹿兒嶋縣

別紙之通縣治之儀先月十四日被仰出外段申來外條、一

統可奉承知り、左外委細之儀者追々御沙汰可有之

外間、其内分縣之諸郡ニ至迄、地頭初役々其外諸事是

迄之通相心得、各職業猶又致盡力外様向々申渡、琉

球館聞役へも可申渡外、

辛未十二月

鹿兒嶋縣廳

1084の1

一當縣内土庶共追々人員相殖、殊ニ此節官商相解外處、  
行々市中ニ老産業を取失ひ、徒手之者も可有之外付、

爾來近在を初近遠郷之無差別、山澤曠原差支無之場所

老貴賤共田疇開墾可差許外付、望之者者可願出外、左

外へハ開拓取付後貳拾ヶ年無税ニ有、當所之課役等差

免外、自然地面相受十二ヶ月不取付者者可取揚外、此

旨向々申渡、當縣中にも可申渡外、

一旧都城縣管轄郷内にも望之者有之外ハ、被差免外

儀も可有之外、

辛未十二月十二日

鹿兒嶋縣廳

1084の5

一御用見合相成外間、諸官三等官初筆者・局掌等ニ到迄、  
助并寄役迄も、向々こおるて役名・姓名相調一册ニ書

載、來廿七日限差出外様可申渡事、

一但在京・在坂其外旅行等之者其譯書載可申外、軍

務局并學校・二丸之儀ハ其譯ニ不及外、

右之通未十二月廿二日被仰渡外、

## 蠶織方

右被廢外、左の右之局在職之面々者、以來養蠶會社方に可致出勤旨、會計局に申渡、向くにも可申渡外、

辛未十二月廿二日

鹿兒嶋縣廳

一御縣内出産白糸之儀、來春も諸人勝手賣買被仰付外に付るハ、依郷に蠶業迎も勝手心得、飼方取捨候様成立外儀も難計、養蠶之儀者御手被召付、此節も

朝廷が生産之儀分る被仰渡置外付、衆庶一同御趣意致貴徹、尚一涯蠶業致勉強外様被仰付外付、地頭より分る郷々には可申渡、右に付是迄養蠶方々時々廻勤之上教示旁差引被仰付外付、此以後共是迄會社掛之内、右差人同様取扱被仰付、於郷々蠶業不心得之向者、夫々質問之上得差圖可取計外、左の春夏郷々出來之斤高、養蠶會社に郷々小隊長等より取しらへ届申出外様被仰渡外事、

但唐湊并小林・福山蠶室所之儀者是迄之通被仰付外、

十二月

會計局

右之通申付外條可承向に可申渡外、

辛未十二月

鹿兒嶋縣廳

一養蠶之儀先年來分る御手被召付、近年生糸出産も相嵩、

就る者於養蠶會社別段御金被差分、右之利潤被相渡、

盛大御手相付、是迄官計を以御買上被仰付來外得共、

來春も諸人勝手賣買可被仰付哉、左の會社方利錢之

儀者是迄郷々應出產高被相渡來外得共、右通勝手賣買

に付る者、以來出產高に應し三朱利付を以御貸渡被仰

付、返上方に付る者白糸又者現錢上納勝手被仰付度、

種子紙之儀者養蠶會社計を以是迄之通手當之上、輕キ

代銀上納申請可被仰付哉、右通趣法被相替りるも、於

郷々尚一涯手入行届外様、尚又地頭に被仰渡、第一出

産相増外へハ郷々潤助可相成り付、百姓末々迄も心得

違無之様分る可被仰渡哉、右通勝手賣買被仰付外も、

右品之儀者第一某人取組商法利潤之品に付、他國積出

に付る者國産會社に相付願出、横濱・神戸・長崎等之

儀者荷爲替取組を以積出可被仰付外付、自然無免之品

積出外敷、又者抜荷見當り外節ハ都る取揚之上、見當

外者にも都る被成下、勿論積出先におる同様被仰付

外旨、分る被仰渡置度致吟味外、以上、

十二月

會計局

右之通申付外條、可承向に可申渡外、

辛未十二月廿八日

鹿兒嶋縣廳

1084の9

一此節當縣に鎮臺分營被召立、兵隊編制付左之通、

一御城下兵士都る被免り、俸祿之儀是迄之通被下置、

已來小學校・郷校之間に出席可致り、尤各校に分配等之儀者、何篇本學校に委任申付り、

一臺場兵隊并諸郷に兵隊者當分通にあり、以來縣廳管轄申付り條、砲場勤之面より兼る請持之場所に致出勤、諸事は迄之通可相動り、

一諸郷番兵并報知役之儀、御暇被下り條勝手可引取り、右之通被相定り條、向くに早可申渡り、

辛未十二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

1084の10

一菊地次郎事先達に當縣貴屬被仰付り處、舊領米良邑士民共恩義追謝之爲、以來邑内村所より使節差立度り付、

須木山路通行被差免度旨願出趣有之、邊路之事者より得共、願意無餘儀り付願之通差免り條、米良より使節

往來之節者彼方印鑑見届可差通、其他通行之者者諸事は迄之通相心得嚴重可致取締り、此旨地頭に申渡、可

承向にも可申渡り、

辛未十二月晦日

鹿兒嶋縣廳

1085の1

通達留

申年頭御規式之次第

一新從三位様に御祝之儀

御在京之事故一統を兩人惣代を以御祝儀申上り、

正月朔日

一五社并長田神社・鶴嶺神社・照國神社に

新從三位様獻幣使家令、

但二丸を兼務

一御庭内諸神社に獻幣使家令、

但同斷

郡山

一華尾神社

一一之宮神社

但麻袴

三日

新從三位様

從三位様に

一練蕉布 五端

一 焼酎 一 壺

在番 親方

一 練煮布 三端

但相中より

琉球館 藏役

書役

在番 親方

與力

右二丸家令に相付御祝儀申上之、

但進上物不及備

從三位様

申年頭御規式之次第

正月朔日

一 五社并長田神社・鶴嶺神社に

從三位様獻幣使家令、

一 二丸諸神社に獻幣使家令、

郡山 一 華尾神社

一 一之宮神社に

右獻幣使嶋津珍彦殿一列之内に勤方家令を相達、

但麻袴

參事

諸局總裁

右御祝儀<sup>(中脱カ)</sup>申上之、

鹿兒嶋士族

右家令に相付御祝儀申上之、

二日

嶋津珍彦殿一列

同部屋栖方

右御祝儀申上之、

三日

琉球人

右家令に相付御祝儀申上之、

諸郷士族惣代

分隊長以上二郷

壹人ツ、

附士

附屬長

右同斷御帳に相付申上之、

但隊長無之郷々、舊陵・與頭内も同斷、  
以上

申年頭拜賀之次第

正月朔日

朝廷に拜賀之次第

鳴津珍彦殿一列并任職

之面々

鹿兒嶋士族迄

右縣廳に相付拜賀申上之、

三日

琉球人

右同斷申上之、

諸郷士族惣代

分隊長以上一郷

壹人ツ、

附士

附屬長

右同斷申上之、

但隊長無之郷々考、舊陵・組頭も同斷、

一任職之面々朔日より三日迄改服、

但四日より平服、

以上

一

任美々津縣參事

右之通

宣下有之、今日奉 命外條、可承向に可申渡外、

壬申正月八日

鹿兒嶋縣廳

一鳴津圖書殿死去に付、兼ぬ

御機嫌伺被申上外面々考勿論任職之面々、今日 御更

方家令に相付伺

御機嫌申上外様、向々早々可申渡外、

壬申正月五日

鹿兒嶋縣廳

一鳴津圖書殿昨四日死去に付、昨四日方來ル八日迄日數

五日、人々心得を以鳴物謹慎可能在外、尤普請考不苦

外條、此旨向々早々可申渡外、

正月五日

鹿兒嶋縣廳

福山清藏

通達留

一年齡三十五歳

一中丈中肉

一鼻眼常躰

一色赤キ方

一其節着用衣類紺茶豎縞布子

右者元山口藩脱走人野村昭三郎同類之者ニ而、於香川

縣入牢致シ置候處、去月廿二日夜破牢脱走致シ候ニ付、

府縣共嚴密遂搜索致捕縛候、早々最寄隨ヒ司法省・香

川縣之内江差出可申事、

辛未十二月

太政官

別紙之通於東京被仰渡り段申來り條、向々可申渡り、

壬申正月十四日

鹿兒嶋縣廳

一昨年來、上下庄内より引續縣下近在迄も檢地治定央、廢

藩置縣之制ニ被召替り付る者、追々

皇國一般之御制度可被爲建善ニ付、檢地之儀者令廢止

り、左より當分取付居り岩川・今和泉・重富之儀者、

香川縣管下  
讚岐國豊田郡  
原村百姓  
片山管藏

一面長キ方

一言舌靜ナル方

兼り申渡置り通聊無緩疎檢地いたし、士民其所より得安

着之道立り様可取計り、此旨民事局に申渡、向々

も可申渡り、

壬申正月十四日

鹿兒嶋縣廳

一此節縣治條例ニ依、追々判任以下任職申付候得共、追  
り何分申渡迄之間、諸局御用取扱向等何篇是迄之通可  
心得事、

壬申正月十七日

田畑 平

一軍務局令廢止、兵學寮之儀者以來縣廳預申付り事、

但入寮等之人員者都る當分之通、

申正月

鹿兒嶋縣廳

豐民館之事

一豐民會社

右之通相唱り様申付り事、

壬申正月

鹿兒嶋縣廳

一來月六日



皇軍神社御神事ニ付、前日七ツ時より御神事相濟迄之間、軍馬方下通通融差留外條向々ハ可申渡外、

壬申正月

鹿兒嶋縣廳

營内出入概則

一被定置外人員之外、表門出入會ぬ不許外事、

一諸人鑑札を以て通融之ものハ矢來門外出入たるへし、

誰人たり共無鑑札ハ通融不相成り、若出入爲致外ハ、

令官之可爲越事、

一矢來門通融朝六字夕六字迄之事、

一營内之人ハ用事有之差越ものハ、番兵方周番所に届出、

其上免許を受護送之事、

其他略ス

兵隊入營後ハ規則別紙通大略相究外間、爲御心得及御

掛合置外也、

申正月廿八日

鎮臺分營

縣廳

別紙之通鎮臺分營より相達外間、向々ハ不洩様可申渡

外、

(壬カ)

辛申正月

鹿兒嶋縣廳

通達留

郡官員

郡長 一員

副長 二員

里正

但宜ク人材ヲ撰擢シテ任スヘシ、必シモ其土人ニ不

可拘、繁劇之所ハ便宜ニ從テ副員ヲ増ス、

副正

戸長

戸長助

職制

郡長

一朝典官級ノ外ニ置キ其祿ヲ五拾石トス、

一其職掌軍政ヲ治メ教化ヲ布キ、庶務・聽訟・人畜戸籍・

租稅・出納一切是ヲ裁判惣督ス、

一常備蕃殖ノ山林若クハ開墾山海ノ物産ヲ増シ、士族・

卒・平民職業生計ノ方法ヲ熟考看督ス、

一里正・戸長等管内ノ各員其勤惰能否ヲ檢査シ、其精微

ヲ盡シテ黜陟ノ典ヲ可乞、

一官林ノ伐木或ハ一郭ヲ爲スノ開墾ハ縣廳ノ裁判ヲ經ヘ

シ、

一常平社倉或ハ商社ヲ建テ、他縣ト貿易ヲ通スル等ノ如キ、悉具狀縣廳ノ裁判ニ依リ宜ク施行、管内ヲ富シ雜費ヲ輔フヘシ、

一管下ノ形勢一月一度縣廳ヘ可具狀、

但毎月廿九日

最大ノ事件ハ迅速可狀、(員廳カ)

一從前地頭管轄ノ軍役高及ヒ山野・溝下高、或ハ藏入ノ永作高惣テ管内ノ倉庫ニ收メ、各員ノ秩祿或ハ管内ノ堤防營繕、士民非常ノ救助等ニ供備スヘシ、

一郡内ノ輕罪者ハ、郡長其情法ヲ審カニシテ是レヲ判決ス、重キ者ハ狀ヲ具ヘテ縣廳ニ申ス、

副長

此職掌郡長ニ亞ク、本員事務繁劇ニ涉ルカ或ハ欠員ノ時ハ、本員ニ代リ諸務ヲ統理シ、平生本員ヲ輔翼シ執事遺漏無キヲ要ス、祿三十石トス、

里正

此職掌ハ郡長ノ命令ヲ奉シ、民俗ヲ正整シ、農耕ヲ勸メ、民産ヲ殖シ、官庫貢納ノ庶務一般ヲ監督スヘシ、

祿十五石トス、

一人畜之生存・戸籍ノ増減、或海口漁獵・船舶ノ税法一切検査スルヲ掌ル、

一驛遞・旅人・寄留等之検査ニ任ス、

一神社・道路・堤防・橋梁等ヲ巡省シ、或ハ營繕等ノ事務郡長ヘ申(ママ)ヘ裁判ヲ得ヘシ、

一聽訟平允ヲ以テ審決シ、宜ク下情ヲ達シ宥枉ナキヲ要スヘシ、

一管内忠孝ノ者アレハ其實ヲ具狀シ、郡長ニ申シ褒賞ヲ乞フ、

一管内本街之驛遞ニ係ル所、或ハ海邊漁獵場附屬スル地ハ、副正ヲ分ツテ代理セシム、

副正 一員、然レ共亦常員トセス、其便宜ニ從テ是ヲ置

ク、祿九石トス、其勤恪功勞アル者拔擢シテ本員ニ升ホス、

一副正ハ職掌里正ニ亞キ、民政欠遺無ク、毎ニ管内ヲ巡行シ、農耕其節ヲ失ハス、貢納其時ニ後レス、一切里正ヲ輔翼シテ郡長ノ命令ヲ奉ス、

一管下驛遞或漁獵場附屬スレハ、必ス分割シテ本員ニ代リ、其場ノ事務ヲ統理スヘシ、

戸長 秩五石ヲ與フ、

1087の2

一戸長者里正ニ屬役シ、一村一里中ヲ區別シテ戸籍之長ト成、其區内ノ人員生死去留ヲ検査シ、戸籍方法紛亂無キヲ要トス、

但戸長者士族平民ノ別アルヘシ、士族ノ長タル者ハ縣廳之布告或ハ士族中一切ノ事務ニ關係シ、田村或ハ漁獵場等、又各其土地・人民事務ニ關係スルヲ要ス、

戸長助

此職掌ハ戸長ニ亞ク、秩四石ヲ與フ、

但戸籍ニ照準シテ、戸數便宜ニ從テ其多寡ヲ分テ管轄スヘシ、

右郡官職掌ノ大要ニ學ク、瑣細ノ事件ニ至テハ其郡内ノ便利得失ニ因リ、其宜キニ從テ處置スヘシ、

一表御門 御榎門之事

右被定置官員之外通融ヲ不許、

一西御門 矢來御門之事

右一往諸人之通融門と定ム、無鑑札之輩ハ出入ヲ不許、

但朝六字より夕六字限、

右之通被定置外事、

1087の3

壬申二月

本營

一當營門下通、吉野橋入口并元中ノ辻番所角ハ柵門相建、訓練之時々閉門いたしり間、御縣内之もの其折ハ通融不致様屹と御達置給度、此旨及御問合置り也、

壬申二月八日

分營

縣廳

1037の4

一鎮西鎮臺本分營官下之大小藩兵隊、常備・豫備來ル二月十五日限盡ク解隊、平籍ニ可復、尤他方出張之分考追り歸縣之上同様取計可申事、

壬申正月十八日

山縣兵部大輔

右之通相達り付、外城常備并豫備兵共解隊申付り、左外ハ三官并砲兵小頭等俸祿是迄之通ニ有、三官初兵士共郷學校出席申付り條郡長江申渡、向々にも可申渡り、

但都城縣内并高岡・倉岡之儀も同斷申付り、左外ハ郷役之儀追り治定之賦ニ付、其内老三官并小頭調

役等は迄之通諸務取扱いたしり様申付り、

壬申二月

鹿兒嶋縣廳

一從

朝廷、士族・卒、賊盜及犯法・賭博、部民之婦女ヲ姦スル等、廉恥を破ル事甚シキ者廢シテ庶人ト爲シ、徒以上ハ仍等本刑ヲ可被加被

仰達外付、各其意を奉得、聊以廉恥を不失様可心掛旨、御縣内一統に御布告有之度と致吟味、此段申出外、以上、

申二月

聽訟課

右之通申付外條、向々可申渡外、

申二月廿四日

鹿兒嶋縣廳

一庶務課

社寺・貫屬・戸籍并ニ人畜ノ數ヲ稽査シ、郡長・里正勤惰ヲ察シ、官省ノ進達・府縣往復ノ文書ヲ案シ、學校ノ事務及郡長・里正・戸長等外使部等ノ進退ヲ掌ル、

一聽訟課

縣内ノ訴訟ヲ審聽シ、其情ヲ盡シテ長官ニ具陳シ、及ヒ縣内ヲ監視シ、罪人ヲ處置シ捕亡ノ事ヲ掌ル、

一租稅課

正租・雜稅ヲ収メ、豐凶ヲ檢シ、及開墾・通航・培植・漁獵・山林・堤防・營繕・社會等ノ事ヲ掌ル、

一出納課

歲入・歲出ヲ計リ、金穀ヲ大藏省ニ納メ、公廩用度ノ計算ヲ明シ、及ヒ官員・官祿・旅費・堤防・營繕等一切ノ費用ヲ掌ル、

縣廳之儀、明廿八日より舊軍務局跡に引移、別表之通四課相建御用取扱外様、向々可申渡外、

申二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

一御諱患・統、御名睦ノ三字、自今欠畫ニ不及候事、

壬申正月

太政官

一自今元旦・上巳・端午・七夕・重陽・天長節之外、參

賀被廢外事、

壬申正月

太政官

別紙之通被仰渡外條、向々可申渡外、

壬申二月

鹿兒嶋縣廳

通達留

1088の1

通達留

一高頭

何方何村  
何門

内 永損地何石

休地 何石

部下り右同

右者此節鹿兒嶋縣惣高調方ニ付、急成御用見合相成り  
間、諸人持高之内右之通管秧高有之面々者早々被相糺、  
來ル廿二日限可被差出外事、

二月十七日

民事局

1088の2

操練且取締之爲め、外郭山中兼る巡邏兵差出り間、萬  
一下輩之者心得達山中竹木等伐取、猥ケ間敷様子見受り  
節者名前聞届、形行御掛合ニ可及り間、其節者至當之御  
所置有之度、此旨爲御心得前廣申遣置り也、

二月十七日

分營

縣廳

右之通相達り條向々可申渡り、

鹿兒嶋縣廳

1091

雜書中

一郡長五拾名

一副長三拾名

1090の2

營内出入概則

(本文書ハ一〇八六の七号文書ト同文ユエ略ス)

1090の1

通達留

靈社境内ニ可引直り、

本、

鹿兒嶋縣廳

各砲臺守備兵解隊申付、左りる隊長以下兵士之儀是迄之  
通俸祿被下置り條申渡、向々可申渡り、

縣廳

一里正十五名

一副正九名

一戸長五名

一戸長助四名

郡長五拾名

椎原與右衛門

貴島平八

阿多慶二

椎原權兵衛

木藤角太夫

肝付郷右衛門

近藤七郎左衛門

副長三拾名

山口源助

木脇啓四郎

里正拾五名

山下七郎

新納新左衛門

和田五左衛門

東郷九左衛門

田尻 務

土持左平太

鳥丸六左衛門

猿渡彦左衛門

飯牟禮八郎

築瀬善左衛門

伊東萬四郎

伊集院直二

小笠原彦七郎

高田平次郎

田中金兵衛

山本覺右衛門

成尾清八

上村敬吉

副正九名

伊東喜之助

橋口權九郎

右年月記ノナ

通達留

一華・士族・卒在官之外、自今農工商之職業相替外儀被

差許外事、

但職業相替外者者、其業體・人名等管轄府縣ニおる

て取調、大藏省に可届出事、

辛未十二月 太政官

別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、

壬申三月

鹿兒嶋縣廳

1092の2

一開拓使爲御用人夫千人可被差出外付、家來・下人并町夫・至迄懇望之者者、別紙定則之通ニ有、來十日限開拓使出張所に相付可願出外、此旨及布告外也、

但出張所之儀者、下石燈爐通角山 downhill 左衛門所ニ有

1092の1

外、

申三月

縣廳

年齡拾八歳より四拾歳迄身軀全健之者

一 跡家内差支無之者、可成丈者無妻之者、又者夫婦相揃

差越度願之者者、男同様ニ召支付不苦也、

一年限貳ヶ年

一金五兩

一人仕舞料被下、

一回壹兩貳歩

道具拵料一人被下、

一回貳歩

主取一日之賃錢、

一回壹歩三朱

次主取同斷、

一回壹歩貳朱

上夫同斷、

但病氣之節者此例ニあらず、

一野先鍬壹挺 一山鍬壹挺 一鶴嵩壹丁

右三具宛持參、

但兼有木工・石切・木挽等内職之者者、銘々得道具持參すへし、

1033

通達留

出殿 退午 入殿

右三次號袍相定、明廿三日を第十二字を致施行の間、爲

御心得及御問合置外也、

三月廿二日

第二分營

縣廳

別紙之通相達外付、此旨及布告外也、

三月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1094の1

通達留

一先般檢地取付之砌、自作地之儀他郷掛持不相成旨規則相建られ、既に期限ニ差掛、望之者に賣拂亦者差上たる向も有之外得共、已來縣内他郷と雖トモ四町限ハ差免し、夫より以上之場所ハ打分願出、相對熟談之上勝手ニ賣差免外事、

但請返シ亦者賣買ニ付、互ニ得と遂熟談可願出外、

萬一不法之儀も外ハ、取揚可申付外、

壬申四月五日

鹿兒嶋縣廳

1094の2

一大御支配御檢地ニ付高結之儀合限ニ被仰渡置外、就而  
考給地御軍役高之儀も夕才考引捨合限ニ引結可申外、  
左外ヘハ夕才之高持考無高ニ相成賦外間、近在并比内  
表其外御檢地有之々郷々ニ持高有之面々ニ考、其段御  
布告相成度致吟味、此段申上外也、

申三月廿七日

近在  
御檢地掛

右之通申付外條、此旨及布告外也、

壬申四月四日

鹿兒嶋縣廳

1094の3

一兵器方借地屋敷之儀、當分之借地主ニ銘々屋敷成申付  
外、左外ニ來士族屋敷同様相對讓受外儀差許外、  
一諸座附借地屋敷之儀、足輕以下ニあるも當分之居住之者  
共ニ屋敷成申付、是亦已來賣買之節考足輕以上ニ相對  
讓渡外様申付外、

一町屋敷ニ隣之職人屋敷其他借地之儀も夫々申受ニある、  
相當之場所考町屋敷成申付、其他相離外借地等之儀考  
是迄之通召置外、

右之通以來究置外條、於向々無間違可致取扱事、

壬申四月五日

イ十一日トアリ

鹿兒嶋縣廳

1094の4

是迄不依大小事件願意之儀ニ付、各課官員私宅ニある内  
意申立外儀、從前之患弊も是より生し外儀不少外付、  
以來左之通相設外條、可心得事、

毎月三・八ノ日

但四ツ時方九ツ時迄之間

一神仕戸籍家人人又考養子吳變、家相續入組たる儀考庶  
務課、

一口事・訴訟等之事考聽詔課、

一年貢并居屋敷・持高・借地願其他開拓等之儀考租稅課、  
一金穀出入・扶持米・旅費等之儀考出納課、

右之通以來毎月三・八ノ日相定外條、其課々ニ願書持  
參可訴出、萬一心得違、私宅ニおゐて内意等申立外も  
の考、譬へ條埋有之外事たり共吃と採用不可致外間、  
聊心得違無之様可致布告事、

但急事件考此限ニあらず、

壬申四月八日

イ十日トアリ

鹿兒嶋縣廳



一家來・下人名稱廢止外事、

但以來召仕度者者從者と可願出事、

右之通及布告外事、

壬申四月九日

イ十日トアリ

鹿兒嶋縣廳

一答ニ依り圍入申付外事、以來其所戸長見分親類立會、  
合切封可致外事、此旨及布告外事、

壬申四月

鹿兒嶋縣廳

一是迄諸郷士族、已來鹿兒嶋縣士族と改稱、片書ニ何方  
居住と可書記事、

右之通申付外事、此旨及布告外事、

壬申四月

鹿兒嶋縣廳

一縣下各區内變死者等有之節者、早速其戸長ニ申出致見  
分、形行委細戸長方致繼書、聽訟課ニ可申出旨可致布  
告外事、

告外事、

壬申四月

鹿兒嶋縣廳

一今般各地方巡回之爲メ大藏省官員出張シ付付る者、  
各府縣官庫ハ勿論、社寺・四民共從來貯藏之寶物銘書  
取調答付付、各府縣ニ於テ此旨相心得、管内社寺ヲ始  
メ普ク可相達外事、

壬申四月

太政官

一今般城郭兵器取調之爲メ陸軍省官員各地方ニ出張、官  
庫者勿論、社寺・四民共從來貯藏之寶物之内、武器ニ  
屬スル分巨細取調之答ニ付、各縣ニ於テ此旨相心得、  
管内社寺ヲ始メ普ク可相達置外事、

壬申三月

太政官

右爲心得及布告外事、

壬申三月十九日

陸軍大輔

右之通相達外事條銘々相糺、有無之譯可被届出外事、

壬申四月廿三日

鹿兒嶋縣廳

御布達留

一今般船改方并連上所相立、大小船共嚴重ニ出入相改行  
届外ニ付る者、以來山川津口改を不相請、直乘可爲勝

手旨更ニ被定置外事、

但前之濱廻着不相成諸郷船之儀者、是迄振合通たる

へく、

申四月

鹿兒嶋縣廳

1095の2

御布告刻付を以可被次渡、人員・戸數取調帳者、來廿五日可被差出、

第一區

岩崎方縣廳邊、平馬場・高見馬場上手・西田・草牟田・

伊敷方限小區略ス、

第二區

高見馬場下手方下方限小區略ス、

第三區

吉野橋・新橋方上方限

一番小區・二番小區・三番小區・四番小區

豎馬場通上手方嶋津次郎殿屋敷掛、裏通方舊大龍門前、

若宮神社清水馬場角、舊坊中横馬場・田之浦鶴江崎町

口小坂之上邊、餘者略ス、

四番小區  
戸長

近藤勘助

1095の3

今般從

右之通被仰付、

副

郷田喜兵衛

日高良助

西之原甚左衛門

朝廷全國人員取調之儀御簡條を以細く被 仰出、右者是迄於當縣も改方之次第段々錯雜粗略之儀不少、其籍を逃れ其數ニ漏れ外者表有之、第一人民御保護之

御感意不相適事付ニ付、此節 御定則之通縣下諸郷ニ

至り夫々區域相定、銘々戸長被居置外條一同其旨厚汲受、

以來轉住亦者生死等出人之次第、當日直ニ其戸長に書付

を以届出、戸長一ヶ月分時々一帳ニ取仕立、縣下者縣廳

に、外城者郡長所に無間違差出外様可心得外、尤編制ニ

付る者、改當日家内不殘在宿、毎戸戸長踏入現人數検査

いたし、聊無間違可相改外、尤學問・武藝又者一時稼奉

公其他用向等ニ縣内旅行之者、改日限治定之間ニ逢外

様家内共より申越歸宅爲致、若シ病氣故障亦者無據事故

有之難歸者者、在留地之戸長・同副方其譯證印を取是證

とすへし、左より以來六ヶ年目毎ニ編制有之事付間、改

方之次第同様取扱ひ、此旨一同に不洩様及布告也、

四月

縣廳

一 附屬長并足輕且船方附之儀卒と可稱事、

一 附屬之儀平民籍ニ編入外事、

右之通申付り條及布告外事、

縣廳

別紙之通區域相定六組之稱廢止、縣廳初官舎・私宅無差別一同番号居置り條、雛形之通標札可相揚り、尤諸郷小區之儀悉郡長可相極り、

但番号之儀悉、每區戸長前を巷街之順次ニ從ひ無遺

漏取しらへ可致り、

神社・官舎・會社類標札雛形

第何區

何番小區何番

横三寸  
竪七寸五部

士族・卒標札雛形 枚

第何區

何番小區  
士族附士又卒  
何野何某

借宅 自作地 仮屋等之詔

平民標札

第何區

何番小區  
從者農工商雜業之詔  
何野 某

借宅又寄宿

又何某

右之通一同可相心得事、

今般東京より御縣内中人員・戸數取調被仰渡り條、午人別御改元ニ不拘、當時家内現在之人數并年輩無間違、別册案文ケ條ニ基キ精密取調差出り様被仰渡置り間、來廿五日無間違取調可被差出外事、

掛印

明治五年壬申四月

人員戸數取調帳

第三区四番小區  
士族  
何野 某

一 當申年何才

家督何野何某

但遠嶋又者御咎目等被仰付り人者其譯、

一 勤方有無

但公私之無差別、他縣に出張之者者其譯、

何野何某嫡子

一 當申年何才

何野何某

但書同斷

一 勤方

但書同斷

一 當申年何才

何野何某一男  
何野何某

但書同斷

一 勤方

但書同斷

右之外三男・末子又老隱居・伯叔父等家族、不殘銘、

前條同斷、

但伯叔・從弟等、また別立御免不被仰付置者も、最

早致別宅居り者者、銘、其區内ニ相改筈付、

家督前より書出シニ不及、各別宅いたし居り者よ

り直ニ其區内戸長ニ可被申出外、

一 當申年何才

何野何某  
母

但書同斷

一 勤方

但書同斷

一 當申年何才

何野何某  
妻

但書同斷

一 勤方

但書同斷

一 當申年何才

何野何某  
娘

但書同斷

一 勤方

但書同斷

右之外嫡女外下女其外伯叔母等、不殘銘、前條同斷、

合男何人

合女何人

右之内廢疾人何人有無、

一 戸數幾ツ

一 家部幾ツ

一 屋敷内ニ召置り從者又老名了類召置り人者、右ケ條ニ

基キ書載可被差出外、尤職業等之譯も無洩目可書出外、

但徒刑被仰付り者者其譯可申出外、尤徒刑者百姓召

仕り事、

右之通相違無御座り、以上、

第三区四番小区  
士族

明治五年申四月

何野何某

1096

通達留

(本文書ハ一〇九四の九号文書ト同文ユエ略シ)

通達留

1097の1

一 戊辰之役戦死人數招魂塚之儀取除、右塚下は銘々埋置  
外物品者夫々自家墓下に可相埋旨、先達申達置外得  
共、右招魂塚取除相成り處物品朽損文字不相分り付、  
更ニ大門口平田治部墓南脇に埋置石塔建立相成り條、  
此旨及布告外事、

申四月

縣廳

1097の2

(本文書ハ一〇九四の八号文書ト同文ユエ略シ)

1097の3

一 參事方四課之官人・等外官・筆者迄五盃ツ、  
一 郡長方副正迄同斷、其外之士族附士等は迄之通、  
一 嶋津珍彦一列并嶋津太郎左衛門方鎌田源左衛門迄三拾  
六家部者是迄之通、  
右之通月々申請油盃數被相究外事、

申四月

出納課

1097の4

別紙之通被相究り付る者、家部者勿論嫡子ニ別紙之役  
員被仰付置り者者、紙申請免帳并油申請免札其譯致張紙、  
來ル晦日迄紙免者新繕藏、油免者令藏に差出り様御達給  
度、若右之日限ニ不差出者者無役之場ニの申請被仰付賦  
り外、尤別紙之役員ニ不加者者其儀ニ不及、此旨及御頼  
談り、

四月廿八日

出納課

一 他府縣に  
出旅之者、縣印不致所持りる者通行・同宿等  
不相成段

朝廷方被仰渡り付、以來出旅之者者貴賤ニ依印鑑  
可相渡り條、出旅之節者無間違可申受り、此旨及布告  
外也、

但印鑑雛形別紙之通外條、士族卒他行之節者是迄之  
通縣廳方可申受り、平民船路方同斷之者者船改方  
方、陸地同斷之者ハ警固與頭方、諸郷之儀者士民  
共各郡治所方可申受り、尤此節右各役所に印紙相  
渡置り間、時々名前等雛形之通相記可差出り、  
壬申四月

鹿兒嶋縣廳

印紙雛形略ス

一 來月八日、豎馬場通伊集院彌七所初こゝ、毎戸差入人員・戸數相改管り間各被得其意、屋敷内名子等居住之者、屋敷主方可被達置り、此旨及布告外事、

但標札無間違可被揚置り、

月日ナシ本マ、

一 今般從

朝廷被仰出人員・戸數就取調御用見合相成り付、諸郷并近在町等方被召置り下人・下女・乳母等一時奉公之者迄も、俗生且親兄弟等之名前・肩書相記、來月八日限戸長に可差出外事、

四月廿九日

通達留

1098の1  
他縣内居住之者從者に願出外者有之り得共、一切不取揚り、其内祖先墳墓地亦老氏神等有之、爲見締從者願出外者、可令免許り、此旨更に相達り也、

但既に免許相成りり分取返り、尤其内本文通無據事故有之分者別段可願出外、

壬申五月

鹿兒嶋縣廳

一 患者藥料之儀病院に相附願出申請り者、是迄病院より引付を以上納方申渡、不納之向に老夫々上納方催促申渡來り得共、以來藥申請度者當銀上納申付り、然共公用者勿論諸藝修行中におひて致怪我り者、又老極貧者この由及藥料上納不相調者、吟味之上別段之取譯を以施藥申付り條、此旨一同に可致布告事、

壬申五月

鹿兒嶋縣廳

一 患者藥料之儀以來當銀上納申付、譯柄に依り施藥申付り旨先般致布告置り、依之爾後公用亦老諸藝修行中致怪我り者其關係之役場方、極貧者この上納不相調者老其區内戸長に申出、戸長より時々無間違病院に引合外様申付り條、更に及布告外事、

壬申五月

鹿兒嶋縣廳

通達留

1099の1  
一 死失等之節、舊傳事方に御届申出外節、俸祿被下置り向老右通帳相添、俸祿不被下置り向老其譯御届之但書に相記り様被仰渡、右を會計局に差廻相成りハ、夫々過不足差引申渡來り得共、今般縣ノ制度に被召替り

1099の2

處、庶務課方右等之御届老被相下儀ニ付得共、以來繼  
目家督・死失等之節ハ、持高員數并勤之有無ハ養料等  
被下置付譯、出納課にも戸長前方無洩目届申出付様、  
無左りる老差引速ニ不相調混雜之基ニ付間、向々江御  
布告相成度致吟味付事、

申五月十日

出納課

右之通申付付條可致布告事、

壬申五月

鹿兒嶋縣廳

一今般中西國等江

御巡幸被 仰出、當月廿三日東京

御乘艦、當縣江

御巡幸被爲 在筈外段申來付、就る老千古稀有之御事

外條、士民一同共

御盛意を奉戴し、各不失職掌、聊緩急之儀有之間敷付、

此旨一同江可及布告付事、

壬申五月廿八日

鹿兒嶋縣廳

別紙之通及布告付條、相違付也、

五月卅日

庶務課

1100

御系図 忠義公

明治五年壬申五月十一日、先是忠義雖下退鹿兒島本城、  
而分中自居之區域、尚在城郭内、辛未十二月

朝廷置鎮臺分營於鹿兒島城内、故是日夫人寧姬去郭  
内、移居磯邸、忠義在東京、

1101

通達留

從來通稱・名乘兩様相用來付輩、自今一名タルヘキ事、

壬申五月

太政官

右之通被 仰渡付條、此旨可及布告也、

壬申六月

縣廳

1102

通達留

鹿兒嶋縣

都城縣

美々津縣

大隅始羅郡・菱刈郡・桑原郡之内、日向國諸縣郡之内申  
立之通管轄替被 仰付付條、地所受取渡可致事、

但地所受取渡相濟付上老高反別一村限至急取調、大藏

省江可差出事、

壬申五月十九日

東方村

高六千百貳拾九石六升貳合八夕七才

鹿兒嶋縣

右美々津縣方都城縣江被召付度、

高三拾貳萬石餘

差引

右之外

高三拾六萬三千七百石餘

隅州始羅郡一圓

右考今般縣治御治定ニ付、薩隅日分割各被置新縣、繪圖

高四萬貳千八百八拾九石貳斗五升九合貳夕三才

并高割被相定被 仰渡趣承知仕、篤と涉評議ハ處、舊鹿

隅州菱刈郡一圓

兒嶋藩管内之儀考數百年一國同前ニ、國郡之境古來相

高壹萬七千百貳石九斗五升七合三夕

定居ハ得共、專人民之聚合・土地之廣狹・往來之遠近ニ

隅州桑原郡之内

依リ、兩國兩郡ニ跨リ一郷一村をなし居ハ有之、且高

栗野・横川兩郷

山・大川不少ハ得考、第一地形ニ依ル人馬運送いたし、

高壹萬貳千四百二拾石四斗八升七合七夕貳才

舊來海陸之便利ニ隨ヒ年貢收納等も運輸仕來ハ付ル考、

右三行鹿兒嶋縣江

爾來も新置之縣下ハ人馬之往來・海陸之遠近旁便利を主

合高三拾九萬貳千四百石餘

とし、次ニ考高山等を以境界被定置ハ考、永年ニ到リ人

都城縣

民之苦情も有之聞敷評議仕、鹿兒嶋・都城兩縣増減之高

高四拾三萬石餘

并美々津縣所轄地相減、右之通相及境立、別紙繪圖面色

内高七萬貳千四百貳拾貳石七斗四合貳夕五才

分ケいたし差上申ハ、就ル考高割少ク不同有之平等考不

但前件始羅・菱刈兩郡并栗野・横川兩郷惣高、

仕ハ得共、何分民苦難被捨置御座ハ聞旁御憐察被下、何

右鹿兒嶋縣江被召付度、

卒右之通境被定置度奉存ハ、此旨官御執奏被下ハ様奉冀

外ニ日州諸縣郡之内須木・野尻兩郷并小林之内

外、以上、



一 此節當縣

1103の1

壬申正月

都城縣參事桂 久武

鹿兒嶋縣參事大山綱良

史官  
御中

別紙之通願立相成り處、願之通管轄替被 仰付り條布告  
に及り也、

壬申六月

縣廳

通達留

一 毎年夏時分諸人に申受被仰付來り砂糖、是迄銘々差出、  
諸嶋方に差出賦方之上家部に付四斤ツ、附土之儀者  
貳斤ツ、被成下來り處、差出賦方之儀致混雜り付、當  
年ち油免札を以申受被仰付り、左り右免札裏に其年  
之記印國産會社におりて相居り様被仰付り條、此旨及  
布告り、以上、

但拂日之儀者別紙之通にり、國産會社内ち申受拂相  
成り付、油免札に申受、代錢相付究通日限に銘々  
可差出事、

申六月四日

出納課

御巡幸、來ル廿日方

御着輦之御模様に付御手當左之通、

一分營内に

御駐輦、

一 御艦相見得次第、遠見番ち早く縣廳に可届出り、

一 御上陸之節、參事以下官員いづれも分營本門下邊に拜

趨、

一 御同斷之節諸差引之儀、庶務課・租稅課請持、

一 御足次船御手當・御供船等、租稅并船改方掛請持、

一 諸所通路普請租稅課受持、

一 石燈爐通御渡戸に御布屋取仕建、租稅課請持、

一 御列先駟壹人、

一 御通輦筋市中辻堅々取締向警固方請持、

一 御馬被爲

召咎に付御用心之爲、牛馬調掛・馬醫津畑迄伺候、

一 供奉人員宿手當之儀租稅課、賄方等之儀出納課請持、

一 御通筋、石燈爐通ち嶋津實屋敷表門、榊形本學校前通

御通輦、分營本門より

御座所に

入御、

但掃除方租稅課受持、

一御座構、御床飾等有之、

一御滯輦中

召上り物并御器物一切租稅・出納兩課受持、

一御通輦筋に罷出、諸人奉拜不苦外、

一諸民營平常之通に休業に不及、店先等分の清潔に取

捨置、決る不敬之儀有之間敷外、

一火用心別る可入念外、

右之通外條、向に不洩様早々可及布告外事、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

一來ル廿日・廿一日之間

御着艦之筈申來外付、諸手當等之儀猶又左之通、

一御艦御見得懸次第、大門口遠見番を相圖之狼煙二發可

揚事、

右相圖爲知を以支度いたし、

御通輦筋に可罷出事、

一御道案内、參事馬上、

一縣廳官員、戎服着用無刀、

但平日之儀若此例にあらす、

一士族奉拜之節戎服羽織袴之間着服之事、

一於市中婦女女子之輩若屋内外奉拜不苦外、

一御通輦奉拜人數、押卷相用外儀共不苦外、

但手傘之儀若遠慮、

右ヶ條之外過日布告之通、

右之通外條、聊心得違無之様縣内一同に早々可及布告

外事、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

戸長

一此節

御臨幸 御滯帶中、菓物・鳥獸類其外何品に限らず珍

奇之物品致獻上度者若、宮内所詰手傳役に相付可差出

外、

一前書 御同斷に付、分營下に燈爐致獻上度者若、勝手

に場所相設可相掛外事、

但廻燈籠・大鼓形其外吳形之類可爲勝手外、

右之通早々可及布告事、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

一 諸官之面々朝七字出廳、十壹字退出、

一朝四ツ鐘、是迄者三分間ニ打リ得共、明廿日方外時鐘

同様たるへき事、

右之通相定外條、致布告外事、

申六月十九日

鹿兒嶋縣廳

營本門より

御座所ニ

入御ニ付、官員之面々分營下ニ罷出、其外奉拜之向者

仙波市左衛門辻邊方練兵場迄相掛可罷出事、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

一 此節

御臨幸ニ付、御縣内諸人

天機伺之儀者、每區戸長方取束縣廳ニ可申上外、此旨

及布告外也、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

一 明廿四日朝第六字

出御、砲臺

天覽、畢る 御乘船、器械所

天覽被爲 在外條、此段相達外、就る者御船御手配可

有之、且先駈官員第五字參集可有之外也、

壬申六月廿三日

供奉

式部寮

鹿兒嶋縣廳

別紙之通被 仰渡外條、及布告外也、

六月

鹿兒嶋縣廳

一 相圖砲次第、近在ハ兩具ニ有可觸知外、

右之通外條、此旨可致布告外事、

壬申六月 鹿兒嶋縣廳

一 明廿四日第五字御供揃、六字

出御、分營下方本學校前、嶋津實屋敷前、石燈爐通

御通輦、 御渡戸より

御乘艦、舊舩形臺場より砲臺打方

一 御臨幸

御通輦筋、石燈爐通方嶋津實屋敷前通、柵形本學校分

天覽、畢る磯機械所に

御覽幸之善外條、此旨及布告外也、

壬申六月

鹿兒嶋縣廳

一明後廿五日當地 御逗留、廿六日

御發途被爲 在外旨被

仰出外條、此旨相達外也、

壬申六月廿三日

式部寮

追ふ

御發途御刻限者廻る可申入外也、

別紙之通被 仰出外條、此旨相達外也、

壬申六月廿三日

鹿兒嶋縣廳

一御駐輦中、奉祝之詩歌文章等獻シ度者者、縣廳に相付

差出外條、縣内中に早々不洩様可及布告事、

壬申六月廿五日

鹿兒嶋縣廳

一明廿六日當所

御出艦、烈風ニ付御延引、日限追る被

仰出外條、此旨相達外也、

壬申六月廿五日

供奉 式部寮

鹿兒嶋縣

別紙之通及布告外條相達外也、

壬申六月廿五日

庶務課

兵學寮之事

一縣廳支配所卜唱相替外事、

壬申六月

縣廳

一田之浦陶器會社

右之通相立外事、

壬申六月

縣廳

一士族等改稱願之節、以來其區内戸長に相付可願出旨、

可及布告事、

六月

縣廳

布達留

今日

勅使正二位醍醐侍從番長ヲ以テ、別紙

1104の1

1103の3

宣命并金幣ヲ靖獻神社ニ下賜リ條、及布告外事、

壬申六月廿三日

鹿兒嶋縣廳

御獻白之寫

一 至尊御學問之事

一 立國本張紀綱之事

一 定服製嚴容貌事

一 正學術事

一 慎擇人才事

一 護外國交際審可辨彼我之分事

一 振興兵正軍律事

一 明貴賤分事

一 遠ニ利欲ニ重ニ節義ニ退ニ詐術ニ貴ニ誠實ニ事

一 嚴ニ禁淫亂ニ明ニ男女別ニ事

一 開言路事

一 慎ニ獄獄ニ正ニ賞罰ニ事

一 輕ニ租薄ニ斂事

一 洋量出納事

別紙一通臣積年之愚慮ニ有之、去己巳之春暫時上京仕

候節、獻言仕含御座候處不得機會、爾來何等之御下問

モ拜承不仕、空沈黙仕候處、今般不計被爲在

御巡幸、奉拜

天顏獻芹之微衷默止難仕、且危急切迫之世態傍觀坐視

(本文書ハ一〇一号文書ト向文ニテ略ス)

布達留

他縣旅人入來リ節老船路老船改所、陸地老警固方、諸郷老其所之戸長より通行印鑑見届之上、旅宿且通行可差免外、萬一無印鑑之者老早速可差返リ條、聊不締之儀有之間敷外、此旨申渡外也、

但都城縣之儀老不及其儀外、左外の毎月末縣下老縣廳

に、諸郷老郡治所に可届出事、

六月

縣廳

御巡幸、奉拜

天顏獻芹之微衷默止難仕、且危急切迫之世態傍觀坐視

不忍、因循固陋之愚見不被為在

御採用御事トハ奉恐察候得共、此末好機會無之ト奉存  
突然呈上仕候、實以恐縮之至御座候得共、方今之御政  
體ニ而者御國運日ヲ追而御衰微、萬古不易之

皇統モ共和政治ノ惡弊ニ被為陷、終ニハ洋夷屬ト被為  
成形勢鏡ニ掛テ拜スルカ如ク、歎息流涕之外ハ無御座  
候、狂妄不遜犯忌諱之罰ニ於テハ、何様トモ奉待御採  
用候、臣久光、誠恐誠慎頓首敬白、

明治五年壬申六月廿八日 從三位臣久光

布達雜書中

一今般中西國等ニ

御巡幸被 仰出、當月廿三日東京御乘艦、當縣江表

御巡幸被為在筈外段申來外、就る者千古稀有之御事候

條、土民一同其御盛意を奉戴し、各不失職掌、聊緩怠  
之儀有之間敷外、此旨一同江可及布告外事、

明治五年申五月廿八日 鹿兒嶋縣廳

一明二日

御發艦ニ付る者、家毎ニ萬歲奉祝之開酒宴、管弦歌舞

等可為勝手次第事、

但明二日限外事、

明治五年壬申七月朔日

鹿兒嶋縣廳

一明二日午前第三字當所

出御被為在外條、此旨申入外也、

壬申七月一日

供奉  
式部寮

鹿兒嶋縣廳

追り御縣官員之先駈之輩、第二字參集可有之外也、

一明二日曉三字當所

御出馬、四字

御乘艦、五字

御發艦被

仰出外、就る者早鐘之相圖次第、諸人

御通輦筋江可罷出外、

一御道筋并御手當向、何篇

御着艦之節之通、

一御通輦筋燈爐可相燈事、

一火用心猶以可入念事、

右之通早々及布告外也、

壬申七月一日

鹿兒嶋縣廳

1137の2

一第一大區小三區

右之通區名相改外條、及布告外也、

明治五年壬申七月十四日

鹿兒嶋縣廳

一指宿郡治所之儀、以來山川に相立、郡長初可爲在勤事、

七月

縣廳

通達留

1108の1

明二日と五日迄之間、朝五ツ時と七ツ時迄、貴賤男女こ

不限 行在所拜見被仰付外間、舊矢來門外御庭口朱門

罷通、玉座并御座廻り拜見可致外、左外の拜見濟之上、

御庭口小門又老舊書院中門と五疋建脇道抜、北門より通

融可致外、就る老父兄頭人等心得も有之筈外得共、幼童

下賤之者老決る猥ケ間敷儀無之様堅く申聞置、手順之通

り可罷通外事、

但案内標札立置外通出入間違致間敷外、尤はき物草履

可相用、

右通可及布告外也、

申七月朔日

鹿兒嶋縣廳

1108の2

一人別方令廢止外事、

七月

縣廳

一第何區何番小區之事、

第何大區小何區

右之通區名相改外條及布告外也、

七月

縣廳

通達留

1109の1

朝廷御用船第二丁卯艦、當湊に滯碇諸所測量いたし外付、

猥に見物等こ差越、差障相成外儀共無之様可相心得外、

此旨一同に及布告外也、

壬申八月

鹿兒嶋縣廳

1109の2

一此節給地高當秋外御藏人被仰渡、御當地・諸郡士族所

務米渡方別る多端之手數こ相及事こ付、當申三月出来

總いたし以後持高致賣買外向者此涯早々取しらへ、當

月廿五日限高直し證文并名寄帳相添出納課に差出り様、  
左の當月中迄に高直免許被仰付度、其以後致賣買外  
向者來酉正月の高直願出り様、分る被仰渡置度り、

一 前件通高直願出御免相成りへ者、所務米渡方に付る者  
取扱出來り得共、於當縣根帳取仕建等別る手数に涉、  
差支外件に有之り付、別紙案文通惣高頭一紙帳面に相  
認、銘に戸長取揃之上都る當月廿五日限差出り様、更  
に被仰渡度り、

右吟味之通於被仰付者、御縣内中は早に不洩様御布告  
有之度事、

申八月

出納課

一 給地高之儀是迄銘に直收納いたし來り處、先般祿高  
之儀藏入に可相渡旨大藏省御布告に相成、其外故障  
之廉も不少り間、當秋方都る御藏入被仰付、尤損高之儀  
者差引正高を以所務米可被下儀も可有之り得共、是迄  
出米等多年致來り譯委有之り付、田畠高現損之無差別、  
高頭に應し三斗六合代を以被成下度り、

一 自作地之儀其郷内に望人無之差上置り高株者、都る本  
高主に被返下、取納振に付る者此株に不限持傳來り自

作地連委同様、高壹石に付九升貳合ツ、高頭に應し、立  
直成代銀を以其村三等里正に相圓メ上納被仰付度り、

一 諸郷士族高所務米渡方之儀ハ、是迄過來申受來り手数  
之通一郷ツ、相圓メ、出納課方現米拂出之上郡治所役  
員相請取、銘に無混雜様相渡置、於郡治所一緒に難受  
取時宜も有之りハ、形行申出、兩三度に受取り様被仰  
付度り、

一 自分持高之内に居住之面々者、其村之三等里正方に相  
圓メ相請取、代銀致上納り様被仰付度り、

右者此節給地高御藏入被仰付りる者、取納振之儀右通  
御布告相成度致吟味り也、

八月八日

租税課

一 當秋方給地高御藏入被仰付に付、當地并諸郷士族持高  
之内大浮免高之儀、高主共致自作り付、九升貳合掛出  
米<sup>⑤</sup>連上納被仰付度致吟味り也、

申八月

租税課

別紙三通吟味之通申付り條、及布告り也、

申八月

鹿兒嶋縣廳



1110の1

通達留

米貳萬七千五百九拾五石六斗

右戰功人數五千貳百貳拾六人

米四千九百五拾四石八斗

右戰死人數五百三拾人

廢人内九拾九人

右者去ル戊辰之役奥羽・北越諸所に致出軍、戦功且戰死・廢人と罷成り者共ニ有、舊藩管轄高内を以、夫々等級ニ應シ致賞與置り處、其后舊知事に爲御賞典拾萬石下賜り得共、内外御多端之折柄ニ付奉還仕度旨及再度奉願り得共御採用無之、然處去年廢藩置縣被仰出、事務改革之御沙汰ニ付取調中、嶋津久光に御賞典高之内五萬石を以分家被

仰出り付、右人數に賞典之儀者従前之通被据置り様奉願り、尤戰功之者者拾五ケ年、戰死三拾ケ年、廢人と罷成り者共は者一世限り遣置り譯ニ御座り間、舊藩中適宜之處分ニ者御座り得共、爲

王事戰死又者廢人と罷成りニ付る者、今日ニ到りりる者致廢止り場合ニ到り兼、勿論大ニ人心ニも致關係、事務施行におひても官員一同甚苦慮罷在りニ付、右等ノ事實

御洞察被下り、速ニ御許下被成下り様偏ニ奉懇願り、以上、

壬申八月十八日

鹿児島  
樞參事

椎原國幹

井上大藏大輔殿

1110の2

書面戰功有之者并廢人之内、夫卒を除賞典米ハ従前之通可据置、戰之者四百六拾八人ハ者祭資料として是迄之給米三ケ年分合算、米壹萬千九百貳拾三石貳斗一時ニ被下り間、給與米ハ壬申年限り渡方可相廢、因る右米爲替を以相渡り條、壬申第七拾四號當省布達之通切手差出請納可取計、且元兵部省ニ於る伺濟之通、夫卒之内廢人四人ハ者壹人ニ付金百圓ツ、戰死之者六拾貳人ハ者妻子に金百五拾圓ツ、下賜り間、従前給米者相廢り儀と心得、初年方渡方取計り分合算致し、壬申貢納相場を以代金ニ積り、右賜金之内ニ引去、殘金請取方更ニ可申出事、

明治六年四月五日

大藏大輔井上馨印

1110の3

去ル戊辰之役奥羽・北越出軍ニ付、軍功祿之儀藩制之適宜を以被成下、此般

朝廷に別紙之通御願立相成り處、御指令ニ基キ當西九月を一同軍功賞典祿ニ應じ被成下り、

一御指令書之内戰死之者四百人餘者、祭資料として給米

三ヶ年分被成下り旨相見得り付、此般又々三拾ヶ年被

成下度歎願相成り付、追る何分

朝廷より御沙汰可有之り間、其通銘々可相心得り事、

八月廿七日

出納課

布達留

一近在掛一等・二等・三等里止之事

一近在戸長

俸祿從前之通三級ニ分ツ、

一郡長之事

一大區戸長

副長并里止・副正之事

一大區副戸長

俸祿三級ニ分ツ、是迄副長・里正・副正祿制之通、

一戸長是迄之通、

一戸長副并助之事

一副戸長

郡長・里正之稱呼相廢止り様被仰渡り付、右之通致致稱り事、

但俸祿者從前之通可相心得り、

九月

縣廳

糧餉方廢止るゝ、更ニ諸財藏と唱替り事、

九月

縣廳

布達留

戊辰以來重創之面々、切斷等いたし又者疵口等再發之者

者、療醫診察之上廢人被仰付、一世限り別段之御取扱も

有之來り得共、今般大藏省に人員御届相成、以來於當縣

定額外之儀者取扱不相成様屹と御達相成り間、此段爲心

得及布告り事、

九月

縣廳

通達留

一諸人居屋敷・自作地町反定限も有之り處、今般

朝廷御布告付吏令廢止、居屋敷并自作地等勝手賣買申

付り候、追る地稅之儀何分可申達り、此旨及布告り也、

壬申九月

縣廳

一出水野間原其外邊路番所共此涯取除申付、番人及廢止申付外事、

九月

縣廳

御布達留

一近在五ヶ村士族屋敷、昨年檢地之節代銀上納申請ニ由拂下ケ相達置外處、段々上納之儀ニ付難澁之者及可有之外間、追々一般之屋敷稅御治定之筈ニ付、別段之吟味を以無代銀申付外條、早々可申渡事、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

1114の2

一縣下士族屋敷亦者借地屋敷等之儀、夫々地方之法則を以畦步相究有之外處、間々ハ勝手ニ四壁相替畦步取廣め外者及有之哉ニ相聞得、甚不束之取計ニ外間、以來右様之節者當課江申出、見分之上通路筋等差支於無之者自致免許、畦步重等之取扱行届外様可取計事外ニ付、爾后屹と右様之儀無之様御告相成度外也、

明治五年壬申十月

租稅課

右之通申付外條可及布告事、

壬申十月

庶務課

戸長

1114の3

一米八石

但是迄六石被下置外得共、更ニ本行之通、

右高貳拾五石以下士族一家部分、

但貳拾六石ニ不充者貳拾五石ニ見込、

一同六石

但是迄定祿四石被下置外得共、更ニ本行之通、

右高貳拾五石以下同斷、附士一家部分、

一同五石

右卒一家部ニ付是迄三石六斗被下置外得共、更ニ本行之通、

右者廢藩置縣以來百事變換、第一民生活之處屢御布告

及有之外得共、於當縣者薩摩・大隅分縣ニ相成、全米

穀不足、以來救助之道及盡果居外處、今般大藏省官員

實施取調之上、是迄取建來外出米右之通定祿ニ預置、

永々下賜外條、此旨早々可致布告事、

但渡方之儀者追可申渡外、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

別紙之通相達外事、

明治五年壬申十月十八日

庶務課

1114の4 一華族より平民ニ至ル迄、自今苗字・名并屋號共改稱不相成候事、

但同苗同名ニテ無餘儀差支有之者ハ、管轄廳へ可願

出事、

府縣へ

人民一般改稱ノ儀別紙之通御布告相成候ニ付テハ、華族及奏任官以上ハ、管轄廳ニ於テ事實取調ノ上聞届可申事、

別紙之通從

朝廷被 仰渡外ニ付、可及布告外也、

壬申十月十二日

鹿兒嶋縣廳

戸長

1114の5 一今般永く家祿治定相成外以後、貳拾五石以上持高賣拂高下り申出外者ハ老、右八石之家祿不被成下外事、

明治五年壬申十月

鹿兒嶋縣廳

1114の6

一諸人願書類、以來目打豎紙ニ同案貳通相認差出外様、可致布告外事、

但先度申渡置外通、三・八ノ日可差出外、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

1114の7

一是迄磯舊御茶屋下邊御場内と唱へ、諸人魚獵差留有之外得共、以來勝手ニ釣不苦外、其外谷山諸所下瀉邊獵場之儀其外郷内領分之様相心得、諸人獵方差留外場所差有之、以來誰人ニよらず勝手獵差免外間、何品ニよらず生業相勵、國益相成外様分可致布告外事、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

1115の1

通達留

朝廷御布令ニ付、他郷自作地賣買無差支段者申渡置通ニ外得共、自作地之内ニ老祖先之功勞其他由緒之譯差有之、數代持傳來外處、舊藩之御所置を以其郷々可賣渡被仰渡、尤期限も差掛無據讓渡置外處、此節勝手賣買被仰渡外ニ付、由緒等有之面々方請返之及内談外得共、汲受薄き向差有之哉ニ相聞得、右様格別由緒有之向ハ老、其子孫ニ成代り不被忍之情實旁親味ニ汲取、程能遂熟談外儀

一當正月中布告相成居り縣下士族より平民に至迄、銃砲

當然可有之、就中賣渡證文遺置り迄こゝ未代價不相請取  
向も有之、是又請返し方ニ付過當之直成者勿論、色々申  
張り不差返者も有之由、別ゑ不可然儀り問互ニ致熟談、  
相當治定相成り様可申諭旨大區戸長は被仰度度、致吟味  
り也、

申十月

租税課

桑苗

右者蠶絲之儀、日本製者西洋國ニ秀格別成寶品ニ由、盛  
大可被相行と之趣追々御布告も有之、當縣之儀分り手を  
被付諸郷一統開立、就中縣下士族卒其外ニ及蠶養出精之  
面々數多罷成り得共、何分桑葉無多事、充分ニ至兼り由

相聞得りニ付、望之者者無代銀申受被仰付度、左り得者  
銘々所持之自作地者勿論屋敷等ニ植立、當繁殖時機可罷  
成、尤望之者者名前・本數書付申出りハ、戸長取束ね  
當月限當課へ可差出旨、御布告相成度儀者養蠶會社にも  
致吟味、此段申出り也、

十月廿二日

租税課

貯來り分名・番號等逐一書記し、早々差出り様縣々  
相達置り間、其營管轄之分ハ直ニ其營方御示達有之、  
取纏之上御廻送可有之、此旨申達り也、

申十月五日

鎮西鎮臺

第二分營

其營管轄之縣、營下士族方平民ニ到迄、銃砲貯來り分表  
面ニ照準し、早々相認差出方之儀中進置り處、尚至急之  
儀ニ付先以員數之分取調置、本月三十日迄之内屹度當臺  
は落着り様、尤精細之取調書重り差出相成可然り間、必  
延日無之様厚御示達相成度、此旨今又申進り也、

十月

鎮西鎮臺

第二分營

別紙之通鎮西鎮臺方御達相成り様、就る者別紙ニ基キ、  
砲銃員數之分至急取調、本月三十日迄ニ本營は可差出り  
付、期限ニ不後様精々差急取調、出來次第差廻給度、左  
りる精細取調之儀者、追の雛形表之通取しらへ御差出可  
有之り、此段寫相添遞る御掛合申進り也、

申十月

二分營

鹿兒嶋縣廳  
御中

十月十八日

出納課

1115の4

一 鹿兒嶋士族世祿高當秋より所務米渡方ニ付、赤米貳拾分一之割込を以御下渡之筈外處、所務米現渡貳石以下拂分之石數ニ赤米割込ニ不及、都る眞米ニ可被相渡哉と致吟味外事、

申十月

出納課

1115の5

(本文書ハ一一四の五号文書ト同文ニ略ス)

一 縣下并諸郷士族世祿高、當秋方都る御藏入之上所務米渡之儀先般御達通ニ有、世祿高五拾石以下者當年中皆同御拂下ケ、五拾壹石ハ百石迄ハ當年中四分之三、百壹石以上者三分貳御拂下ニ有、殘四分一且三分一文者春米繰を以被相渡、尤當縣之儀者田高之内赤物地有之故、現赤米上納被仰付來外ニ付、右所務米渡方之儀、譬者拾石之前ニ有赤米五斗割込を以、貳拾部壹現赤米を以被相渡外、尤諸郷之儀者一郷一圓之手形ニ有、前文之割合を以被相渡外付、大區長方取しらへ當課江申出外様可被仰渡哉と、致吟味外事、

1115の7

- 一 貳拾六石以下持高
- 一 御救助米何石
- 一 俸祿何石
- 一 堪忍料并諸御養料何石
- 一 戰死・廢人扶持米何石
- 一 舊付士貳拾六石以下持高并卒御切米何石

但縣下并郷居住之譯

一 舊附士并卒俸祿何石

一 他家相續又者分地別立にて、父兄致同居外者老年輩迄も相記可申出外、

但右鉢之者妻子有之外ハ、同斷可申出外、

右者出納課方至急御用見合ニ付、羽書ニ有來月五日限取揃差出外様致承知外間、無間違右日限方内拙者方へ可被差出外、以上、

1115の8

- 一 舊諸局附屬長
- 一 一代卒
- 一 一代卒格

右舊藩政ニの家格定來リ得共、先般華・士族・平民と稱呼御改定相成リ間、右之舊格廢止リ條、以來平民と可稱事、

但給祿等被下來リ者老一代限從前之通被成下リ事、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

(本文書ハ一一四の六号文書ト同文ユエ略ス)

1115の10 1115の9

一兵器方廢止リ條可申渡事、

十月

縣廳

一諸郷土着卒之儀、其郷々士族と可稱事、

十月

縣廳

布達留

(本文書ハ一一二号文書ト同文ユエ略ス)

1116の1

其縣下四民之内歩兵望之者三十人、別紙召集兵概則照準致精撰、鎮西鎮臺本營ニ差出可申事、

但行程壹日六里積、旅費壹人ニ付永三百文ツ、其縣ニ

於テ取替置、追テ當省ニ可申出事、

1116の2

壬申九月廿日

山縣陸軍大輔

鹿兒嶋縣

一年齡ハ二拾歲以上三拾歲以下タルヘシ、

一身ノ丈曲尺ニテ五尺以上之者タルヘシ、

一自家之産業ニ於テ故障ナキ者、

右者鎮西鎮臺召集兵卒精撰差出リ様別紙之通被仰渡リ

ニ付、士族・卒・平民ニ至迄右ケ條ニ適當者望之者老、

當月中當縣ニ可願出リ、此旨無遺漏可致布告リ事、

壬申十月

鹿兒嶋縣廳

御布達留

一御定場外ニおひて統發不可然儀者人々心得可有之リ得

共、日比等閑之者老可有之哉ニ相聞得、右躰之者老夫

々御處置可相成リ條、見當次第名本承届、其段可申出

リ、此旨及布告外也、

壬申十一月

聽訟課

各區

戸長

1117の1

一此節附士・卒士族と稱し得共、以來手傳等之勤方從前之通相勤不苦外條、早々可申渡事、

壬申十一月

鹿兒嶋縣廳

右之通及布告外也、

壬申十一月

庶務課

聽訟課

戸長

詔書寫

朕惟フニ、我邦通行ノ曆タル、大陰朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ經度ニ合ス、故ニ二三年間必閏月ヲ置カサルヲ得ス、置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル、殊ニ中下官ニ揚ル所ノ如キハ、率ネ妄誕無稽ニ屬シ、人知ノ開連ヲ妨ルモノ少シトセス、蓋シ太陽曆ハ太陽ノ經度ニ從テ月ヲ立ツ、日子多少ノ異アリト雖共、季候早晚ノ變ナク、四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七十年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス、之大陰曆ニ比スレハ、最モ精密ニシテ、其便不使モ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ、依テ今自舊曆ヲ廢シ、太陽曆ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司、其レ斯旨ヲ體セヨ、

明治五年十一月

一今般大陰曆ヲ廢シ、太陽曆御頒行相成リニ付、來ル十二月三日を以テ明治六年一月一日ト被定外事、

但新曆鏤板出來次第頒布外事、

一十一月三日六拾五日、十二月月ニ分チ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置外事、

一時刻ノ儀、是迄晝夜長短ニ隨ヒ、十二時ニ相分外處、

今後改而時辰儀時刻、晝夜平分二十四時ニ定メ、子ノ刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ、午前幾時ト稱シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ、午後幾時ト稱外事、

一時鐘ノ儀、來一月一日ヨリ、右時刻ニ可改事、

但是迄時辰儀時々刻ヲ、何字ニ唱來外處、以後何時ト可稱事、

一諸祭典等、舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事、

太陽曆 一年三百六拾五日 閏年三百六拾六日

四ヶ年毎ニ置之、

一月 大三十日 其一日即舊曆壬申十二月三日

二月 小二十八日閏年二十九日 其一日同癸酉正月四日

三月 大三十日 其一日同二月三日



四月 小三十日 其一日同三月五日  
 五月 大三十一日 其一日同四月五日  
 六月 小三十日 其一日同五月七日  
 七月 大三十一日 其一日同六月七日  
 八月 大三十一日 其一日同閏六月九日  
 九月 小三十日 其一日同七月十日  
 十月 大三十一日 其一日同八月十日  
 十一月 小三十日 其一日同九月十二日  
 十二月 大三十一日 其一日同十月十二日

大小毎年替ル事ナシ、

時刻表

午前  
 零時即午後十二時 子刻 一時 子半刻  
 二時 丑刻 三時 丑半刻 四時 寅刻  
 五時 寅半刻 六時 卯刻 七時 卯半刻  
 八時 辰刻 九時 辰半刻 十時 巳刻  
 十一時 巳半刻 十二時 午刻  
 午後  
 一時 午半刻 二時 未刻 三時 未半刻

四時 申刻 五時 申半刻 六時 酉刻  
 七時 酉半刻 八時 戌刻 九時 戌半刻  
 十時 亥刻 十一時 亥半刻 十二時 子刻  
 右之通被定候事、

明治五年壬申十一月九日 太政官

別紙之通被仰渡外條致布告外也、

壬申十一月九日 鹿兒嶋縣廳

1117の5

一 今般太陽曆ニ御變更ニ付、來月三日、一月一日被仰渡  
 外ニ付（上カ）、同月二日廿九日之場ニ相當外得共、諸出納  
 并諸人取引等、當年迄老舊歷之日限通可相心得外、此  
 旨及布告外也、

壬申十一月十九日 鹿兒嶋縣廳

1117の6

一 此節附士・卒等士族と稱し外共、以來手傳等之勤方從  
 前之通相勤不苦外條、可申渡事、

壬申十一月 縣廳

1117の7

一 觸役所廢止申付外事、

十一月 縣廳

通達留

一銃砲并彈藥類致賣買ハ儀御規則書を以嚴重被仰渡、其段者追ハ巨細可申渡ハ得共、其内商人共他府縣者勿論諸人賣買屹と不相成ハ條、此旨早々可及布告ハ事、

十一月

縣廳

一いろ

右十一月廿日

はにほへとち

右十一月廿一日

をわか

右十一月廿二日

よたれそつね

右十一月廿三日

なむうのく

右十一月廿四日

やまけふ

右十一月廿五日

右之外略ス

右者縣下諸士舊御軍役高所務米拂、右之通いろは順日割を以拂渡方申渡置ハ付、所務手形兩日之内ハ可相渡ハ付相請取ハ上者、右日限前日ニ米藏ハ差出ハ様、左ハ拂日相過ハ手形者、いろは順拂濟之上御拂可相成ハ、尤此滙入用無之先寄申請度向ハ、手形面之期限通ニ追ハ差出可然ハ、將又右手形之内ニ壹貳之印相付置ハ付、一印之手形ハ右日限ニ拂渡、二印之手形者順

ハ拂渡之上重ハ拂日可相立ハ事、

十一月十五日

出納課

一人別壹分出銀之儀諸神社修造等ハ振向致出銀來ハ付、縣限取立被致置度、就ハ者取揃之儀者是迄通戸長方ニ取揃ハ様被仰渡ハ間、例年通戸籍人員差引、壹人ニ壹分ツ、出銀可被差出ハ、以上、

但來酉一月廿日限出銀上納被仰付ハ間、其内可差出

ハ、

十一月廿三日

戸長

一東京表舊

知事公ハ、來酉年頭御祝儀惣代菊地助右衛門・重久七太夫ハ申付ハ條、進上物・出錢昨年之通、每戸貳百文ツ、戸長ハ取揃諸財藏ハ可相納ハ、此旨及布告ハ也、

但諸嶋之儀、昨年通砂糖其他産物を以相納ハ儀出納

課取計之事、

十一月

庶務課

(本文書ハ一一七の五号文書ト同文ユエ略ス)

一所務米貳番拂當年中申請度向者、御米線を以御拂渡可相成り付、來月朔日方米藏江手形差出り様被仰渡り事、

十一月廿八日

出納課

一今般太陽曆御變更ニ相成、既ニ來月三日年首ニ相當り處、差掛御式事等混雜之譯も有之り付、當年迄ハ舊曆之通諸事取行、其外取引等之儀兼り申渡置り通ニ相心得り様、早々布告可致事、

月日ナノ本マ、

通達留

壬申十二月朔日

御布告書

今般全國募兵之儀、別紙 詔書之通被

仰出、徵兵令被相定候條、各

御趣意ヲ奉戴シ、末々ニ至ル迄不洩様布達可致、總シテ

細大ノ事件ハ、陸軍・海軍兩省へ打合可申、此旨相達候事、

但徵兵令及徵募期限ハ、追テ可相達事、

詔書寫

朕惟ルニ、古昔郡縣ノ制、全國ノ丁壯ヲ募リ軍團ヲ設ケ、以テ國家ヲ保護ス、固ヨリ兵農ノ分ナシ、中世以降兵權武門ニ歸シ、兵農始テ分レ、遂ニ封建ノ治ヲ成ス、戊辰ノ一新ハ實ニ千有餘年來ノ一大變革ナリ、此際ニ當リ海陸兵制モ亦時ニ從ヒ、宜ヲ制セサルヘカラス、今本邦古昔ノ制ニ基キ、海外各國ノ式ヲ斟酌シ、全國募兵ノ法ヲ設ケ、國家保護ノ基ヲ立ント欲ス、汝百官有司、厚ク朕カ意ヲ體シ、善ク之ヲ全國ニ告諭セヨ、

明治五年壬申十一月廿八日 太政官

徵兵告諭

我

朝上古ノ制、海内舉テ兵ナラサルハナシ、有事ノ日

天子之カ元帥トナリ、丁壯兵役ニ堪ユル者ヲ募リ、以テ不服ヲ征ス、役ヲ解キ、家ニ歸レハ、農タリ、工タリ、

又商賈タリ、固ヨリ後世ノ雙刀ヲ帶ヒ、武士ト稱シ、抗顏坐食シ、甚シキニ至テハ、人ヲ殺シ、官其罪ヲ問ハサル者ノ如キニ非ス、抑

神武天皇、珍彦ヲ以テ、葛城ノ國造トナセシヨリ、爾後

軍國ヲ設ケ、衛士・防人ノ制ヲ定メ、神龜・天平ノ際ニ至リ、六府二鎮ノ設ケ始テ備ル、保元・平治以後、朝綱頹弛、兵權終ニ武門ノ手ニ墜チ、國ハ封建ノ勢ヲ爲シ、人ハ兵農ノ別ヲ爲ス、降テ後世ニ至リ、名分全ク泯没シ、其弊勝テ言フ可カラス、然ルニ太政維新、列藩版圖ヲ奉還シ、辛未ノ歲ニ及ヒ、遠ク郡縣ノ古ニ復ス、世襲坐食ノ士ハ、其祿ヲ減シ、刀劍ヲ脱スルヲ許シ、四民漸ク自由ノ權ヲ得セシメントス、是レ上下ヲ平均シ、人權ヲ齊一ニスル道ニシテ、則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ、是ニ於テ、士ハ從前ノ士ニ非ス、民ハ從前ノ民ニアラス、均シク

皇國一般ノ民ニシテ、國ニ報スルノ道モ、固ヨリ其別ナカルヘシ、凡ソ天地ノ間、一事一物トシテ税アラサルハナシ、以テ國用ニ充ツ、然ラハ則チ人タルモノ、固ヨリ心力ヲ盡シ、國ニ報セサルヘカラス、西人之ヲ稱シテ血税ト云フ、其生血ヲ以テ、國ニ報スルノ謂ナリ、且ツ國家ニ災害アレハ、人々其災害ノ一分ヲ受サルヲ得ス、是故ニ人々心力ヲ盡シ、國家ノ災害ヲ防クハ、則チ自己ノ災害ヲ防ク基タルヲ知ルヘシ、苟モ國アレハ、則チ兵備アリ、兵備アレハ、則チ人々其役ニ就カサルヲ得ス、是

ニ由テ之ヲ觀レハ、民兵ノ法タル、固ヨリ天然ノ理ニシテ、偶然作意ノ法ニ非ス、然而シテ其制ノ如キハ、古今ヲ斟酌シ、時ト宜ヲ制セサルヘカラス、西洋諸國、數百年來研究實踐、以テ兵制ヲ定ム、故ヲ以テ其法極メテ精密ナリ、然レ共政體地理ノ異ナル、悉ク之ヲ用フ可カラス、故ニ今其長スル所ヲ取り、古昔ノ軍制ヲ補ヒ、海陸二軍ヲ備ヘ、全國四民、男兒二十歳ニ至ル者ハ、盡ク兵籍ニ編入シ、以テ緩急ノ用ニ備フヘシ、郷長・里正、厚ク此御趣意ヲ奉シ、徵兵令ニ依リ、民庶ヲ説諭シ、國家保護ノ大本ヲ知ラシムヘキモノ也、

明治五年壬申十一月廿八日

別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、

明治六年酉二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

1120  
布達留

此節朝廷ニ當縣内高御届相成儀ニ付御用相成外間、別紙案紙通、銘々持高夕才迄も無間違相認、同案貳通にして可差出外、萬一員數間違有之儀者持主迷惑相成譯ニ付、其心得可有之事、

右之通致布告、當月十二日限取束可差出事、

申十一月

租税課

縣下舊御軍役高所務米渡方ニ付ル手形及數百通、銘々當  
人ハ渡付方別ル混雜之手數ニ、下代萬一渡違等も難計ハ  
ニ付、區々戸長ハ右之手形引渡、夫々區内高持人別ハ引  
渡ハ様被仰付事、

申十一月十五日

出納課

別紙之通致承知ハ間、早々致順達ハ、無滞被次渡、留方  
御返し可給ハ也、

但手形請取ニ被參ハ人者、請取書持參可有之ハ、

申十一月十四日

高山一郎

1121

通達留

華・士族・卒在官之外、自今農・工・商之職業相替ハ儀  
被差許ハ事、

但職業相替ハ者者其業體<sup>本マ</sup>人名前等管轄府縣ニおいて取

調、大藏省へ可届出事、

申十二月

太政官

(表紙)

忠 義 公

自明治六年 正月

久 光 公

至同 九年十二月

追 舊 記 雜 錄 卷百八十一

通達留

1122の1

一杉差出錢例年之振合通、來ル廿日限上納可被成り、

一無高方九拾九石迄者三拾貳文ツ、百石より百九拾九

石迄ハ六拾四文ツ、貳百石方貳百九拾九石迄ハ百文

ツ、

右日限之内無間違可被差出り、以上、

一月九日

戸長

保護會社貸附銀之内方、所務米手形引當ニ由、壹割利付を以借渡規則左之通

1122の2

一高所務米手形ニ限り貸渡、其餘俸祿米者不相成り、

一借入度向者其區戸長方添書を以會社に申出、尤借狀請

取書等者、市中其外諸人貸借之作法通相認可差出事、

一期限之儀者手形限月迄相究り事、

一眞米手形壹石ニ付代錢百貳文ツ、貸渡相成り、

一貸渡後直段高料ニ相成り共、跡以増貸者不相成り、

一期限相建り上者、萬一期限ニ至り引結不致向者、會社

則通勝手取扱可致事、

1122の3

一磯山鹿倉之儀、從來諸人狩禁止之段者人々承知之事ニ

由、殊ニ去夏

朝廷御狩も被爲催、且舊知事公御下縣之節者御狩被爲

在場所柄之處、此比於同所犬山狩いたしり者共有之段

相聞得、既ニ發覺及取扱りも有之、畢竟等閑ニ相心得

外處より右次第無勿躰事り條、將來心得違有之間敷、

若違令之族於有之者、屹と可及沙汰旨布告有之度事、

一月

聽詔課

1123

通達留

一月一日

朝廷に拜賀

判任官以下

任職之面々

鹿兒嶋士族

右縣廳に相附申上之、

一 舊知事公に御祝儀之儀、御在京に付一統より惣代兩人

を以御祝儀申上之、

一 久光公に

鹿兒嶋士族

右家令に相附御祝儀申上之、

一 朝廷に拜賀

諸郷居住士族

右郡治所に相附申上之、

一 久光公に

諸郷居住士族

右同斷、

一 拜賀等之儀、右之通十二月三日可申上事、

但改服

以上

一月廿三日

孝明天皇

一月廿九日、舊曆來正月朔日

神武天皇

右御例祭、毎年遙拜いたし、様別紙之通被仰付、

縣廳内に遙拜所取設、舊曆正月朔日禮服着用同所

へ參集、一同遙拜可致、左の如

孝明天皇御例祭廿三日之儀、當年文、右同日相混シ可

致、此旨及布告也、

但諸郷之儀、同日其方限産土神社におひて遙拜可

致事、

明治六年一月十三日

鹿兒嶋縣廳

右に張紙之寫略

布達留

一 郡城縣被廢、大隅國之内同縣從前所轄之分其縣管轄

被仰付、條、地所・物成・郷村等可受取事、

但物成者、千申歲分ヨリ可受取事、

明治六年一月十五日

太政官

別紙之通被仰渡、及布告也、

明治六年一月三十日

鹿兒嶋縣聽  
庶務課

御布達留中

一區内諸人無稅地屋敷畦反歩并番區、毎戸地主より書出  
取揃可差出事、

一右屋敷、地所ニ依り當分致賣買外適當之實價開合、壹  
畦ニ付何程之譯・方限・等級幾ヶ條ニ及取分、一紙書  
を以可差出事、右來ル二月十二日限可差出也、

地券方

御通達留

一第貳拾七號、自今華・上族・平民互ニ養子取組不苦  
事、

但華族者管轄聽ヨリ正院ニ伺出、上族者管轄聽ニ有

聞届、平民ハ戸長ニ可届出事、

明治六年一月二十二日

太政官

第貳拾八號

一今般華族家督相續之儀ニ付、左之通被相定候條、此旨  
相達外事、

一總領之男子他ニ養子ニ遣シ、或老父之心底ニ不應緣故  
有之者ハ厄介ニ遣シ、其家ハ次・三男或ハ他人ニ有も、

當主之存寄ヲ以相續願出り節者聞届不苦事、

一幼少ニ有家督爲致ケ節者、親戚又者他人ニ有及相當之  
者相撰後見可爲致事、

一當主致隱居、實子又者養子家督相續致し外迄、其相續  
人多病或ハ不埒之儀有之歟又者病死致シ、最前之隱居  
壯健ニ有、再ヒ相續願出り節者聞届不苦事、

但再相續人ト可稱事、

一當主壯年なれとも、疾病其外無據事故有之養子致り處、  
前當主疾病平愈又者事故相解り節家督致し、右養子者  
實家ニ立戻り外歟又者當地ニ縁付り共、雙方熟談之上  
願出りハ、聞届不苦事、

一本家・分家・親戚等之内當主病死致シ、跡子弟幼年并  
婦女等之砌、死之遺言又ハ其父母并重立り親戚及ヒ遺  
妻子熟談之上、合家願出りハ、聞届不苦事、

一父兄伯叔總テ目上之者、子弟甥等之目下之家ヲ繼承す  
る時者、相續人ト稱シ養子ト稱すへからず、當主死去  
跡嗣子無之婦女之已ニ有、已ヲ得サル事情アリ、養子  
難致者者婦女子之相續差許、從前給祿可支給事、



一舊一門島津珍彦以下士族・卒軍役高、先般大藏省方御取調相成り處、此度従前之通、永世爲家祿下賜り御治定相成り段御達相成り間、一統可奉承知事、

別紙吟味之通致治定置り條、此旨及布告り也、  
明治六年二月廿八日 鹿兒嶋縣廳

右之通ニ候條、華族ハ管轄廳ヨリ正院ニ相伺、士族ハ管轄廳ニ於テ聞届可申出事、

明治六年一月二十二日 太政官

別紙貳通之通被仰渡り條、此旨及布告り也、

明治六年二月廿七日 鹿兒嶋縣廳

一舊廢官之面々、酉三月迄御養料四石宛被成下候段被仰度置り得共、來ル亥三月迄是迄之通可被下置哉、

一御一新後廢官之向者、勤役中俸祿之通被下置り得共、舊廢官被下向ニ不並付舊官ニ不係、惣ゝ四石宛亥三月迄期限を以可被下置哉、以來廢官之面々ニ、五拾石以上之者へ者御養料不被下置り旨、右御一新後之廢官人數之儀も同様不被成下筋可被仰付哉、

西二月 出納課

明治六年二月廿八日 鹿兒嶋縣廳

明治六年酉二月

鹿兒嶋縣廳

通達留

第一號

今般改曆ニ付、人日・上巳・端午・七夕・重陽之五節ヲ廢シ、神武天皇即位日・天長節之兩日ヲ以テ、自今祝日ト被定り事、

明治六年一月四日 太政官

第二號

自今休暇左之通被定り事、

一月一日ヨリ三日迄、六月二十八日前方三日迄、六月二十八日カ方三十日迄、十二月二十九日本マヨリ三十一日迄、毎月休暇是迄通、

西大ノ月三十一日者休暇非、

明治六年一月七日 太政官

別紙之通被仰渡り條、及布告り也、

西二月 鹿兒嶋縣廳

布達書

御系図 忠義公御子

- 哲丸
- 房姫
- 清姫
- 女子

充姫 松平直亮<sup>アキ</sup>室

明治六年二月七日生於東京、母同清姫<sup>実阿山 崎捨女</sup>、初嫁池田詮政生一女、後離別再嫁直亮、

1130 御布達留

一第四十一號

從前之衣冠ヲ以テ祭服ト可致旨被 仰出<sup>レ</sup>處、衣冠所持無之輩者狩衣・直垂衣等相用<sup>レ</sup>儀不苦<sup>レ</sup>事、

明治六年二月七日 太政官

一第四十二號

除服出仕

宣<sup>レ</sup>下候輩、自今御祭典之節奉仕參拜、不及憚候事、

但忌明之輩、同様不及憚<sup>レ</sup>事、

明治六年二月七日 太政官

一第二十一號

妻妾に非サル婦女にして分婉する兒子ハ、一切私生を論し其婦女の引受するへき事、

但男子ヨリ己ノ子ト見留メ<sup>レ</sup>上者、婦女住所之戸長

ニ請テ免許ヲ得<sup>レ</sup>者、其子男子ヲ父トスルヲ可得

事、

明治六年一月十八日 太政官

一第三十六號

自今年齡ヲ計算<sup>レ</sup>儀、年幾月ト可相數事、

但舊曆中之儀者一干支ヲ以テ一年トシ、其生年之月

數者本年之月數ト通算シ、十二ヶ月ヲ以テ一年ト

可致事、

明治六年二月五日 太政官

1121 布達留

人力車之儀諸人爲便宜追々相開、殊外申數相殖<sup>レ</sup>處、間

ニ者夜中無挑灯、又者不相當之賃錢貰受<sup>レ</sup>者有之由、旁

不締之廉も不少<sup>レ</sup>付、以來運送會社支配申付<sup>レ</sup>條、諸事於會社商議を盡し、聊不締之廉無之様可致<sup>レ</sup>、左<sup>レ</sup>の<sup>(重カ)</sup>東屋等設度者<sup>カ</sup>、同會社に相付可願出<sup>レ</sup>也、

二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

此節人力車之儀會社支配申付<sup>レ</sup>の<sup>月カ</sup>者、至當之稅納取建、日<sup>カ</sup>租稅課に届可申出事、

二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

別紙之通申付<sup>レ</sup>條、相達<sup>レ</sup>也、

二月廿七日

庶務課

御布達留

一舊藩札價位比較表、別紙之通被仰渡、左<sup>レ</sup>の明後九日大藏省官員差入、普<sup>ク</sup>致通融諸幣引換相成<sup>レ</sup>由、右比較表<sup>ニ</sup>基キ、當時大坂相場<sup>ニ</sup>準シ、左之通可被召替哉、

一金壹兩、代價拾貳貫五百文

一銅錢壹枚、代價拾貳文

一天保錢壹枚、代價百文

一四文錢壹枚、代價貳拾四文

一文久錢壹枚、代價拾八文

右之通<sup>ニ</sup>被相究哉、就<sup>ル</sup>者諸人貸借并諸色賣買向取扱

左之通、諸人貸借者錢壹萬貫文之所<sup>ニ</sup>金札三百兩、千貫文之前<sup>ニ</sup>金札三十兩、右割を以諸證文都<sup>ル</sup>改替且取計<sup>レ</sup>様可被仰渡哉、

一諸色賣買直段者金價引合<sup>ニ</sup>不拘、都<sup>ル</sup>當時之直段<sup>ニ</sup>三分一之割を以致賣買<sup>レ</sup>様、警<sup>テ</sup>拾貫文之品<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>者、三貫三百三拾貳文ツ、<sup>ニ</sup>割下致賣買<sup>レ</sup>様可被仰渡哉、  
一大工日用其外諸職人、又<sup>テ</sup>駄賃・船賃等前條三分一割下當然之事<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>共、專米直成<sup>ヲ</sup>以質錢等請取事故、於向<sup>ニ</sup>取<sup>ラ</sup>し<sup>ラ</sup>へ早<sup>ク</sup>申出<sup>レ</sup>様被仰渡度<sup>レ</sup>、

一米直段之儀者日<sup>々</sup>昇降之品<sup>ニ</sup>、右<sup>ヲ</sup>金價之割合を以直建致賣買<sup>レ</sup>様可被仰渡哉、

右之通今日より直成可被召替致吟味<sup>レ</sup>事、

明治六年三月七日

出納課

右之通申付<sup>レ</sup>條、及布告<sup>レ</sup>也、

明治六年三月七日

鹿兒嶋縣廳

聽詔課

租稅課

出納課

戸長

諸所

大區長

御布達留

1133の1

一種子油申請之儀、基ひ免本品之事ニ有、先年者御仕登種子大坂直成ヲ以時々被召替來り處、近年御仕登無之故、大概之並直成ヲ以壹盃ニ付三百三拾六文並之處、此節金價并天保銅錢直成被召替り得共、右通譯ヲ以矢張是迄之直成ヲ以申受被差出りニ付、致布告外也、

明治六年酉三月八日

出納課

一夫壹人

1133の2

右當縣内人馬賃錢、壹里五百拾貳文ツ、拂渡來り得共、錢相場替ニ付る者、壹里貳百五拾文ツ、拂渡り様被仰渡置度吟味外也、

三月八日

出納課

右之通申付外條、及布告外也、

明治六年

三月八日

鹿兒嶋縣廳

通達留

1134の1

勅使東久世殿近々御下向之筈外、就る老人々心入表可有

之り得共、末々之者ニ至り不敬之儀共無之様可相心得、

且又御通路筋市街掃除等いたし、聊不潔之儀有之間敷外、就中火用心分る可入念外、此旨及布告外也、

三月十八日

縣廳

1134の2

一辛未七月以來唯今ニ至迄、兵隊者勿論何勤奉職之月日、且東京其他何方ニ有も旅行出入之譯是又月日相記、委細一帳を以來ル四月十日限差出り様、無違漏及布告外也、

三月廿三日

縣廳

1135

布達留

一諸人所持之銃炮改方等之儀別紙之通被仰渡、就る者免許銃類を除く之外、御法式之通都府縣廳も改割印可渡置り條、銘々所持之人名・銃號等相記、縣下者縣廳へ、諸郷ハ郡治所に持出検査可受外、尤來月十日限取揃早々可届出外、此旨申達外事、

但諸郷改割印之儀者、第何大區何番と銘々一郷ツ、相分可渡置り條、銃炮取揃之上何分可申出外、

明治六年

1136の1

三月十九日

鹿兒嶋縣廳

法則數条略ス

別紙之通御布告相成り間、早々致順達り、左りる銃炮御所持之面々ハ、御法式之通羽書を以有無之譯、來月五日限拙者方に可被申出り、無滞被相廻、留方御返役可有之り也、

三月廿一日

高山一郎

御布達留

一 諸郷居住士族等、當縣舊城下屋敷内々買取居り者者、三ヶ年限餘人に可讓渡事、

一 右同斷士族、依願借地免許之者者、三ヶ年限可讓渡事、一 舊門前亦者諸局支配地等、此節居住之儘屋敷成免許に付る者、諸郷士族之分者三ヶ年限餘人に可讓渡事、

一 舊諸座附屋敷等致借地居り面々、昨年居住之儘屋敷成、

右之内諸郷居住士族之儀者、前件同斷三ヶ年限餘<sup>本マ、</sup>に可讓渡事、

一 平民方士族屋敷買取り儀、町續之地面限願出り節者免許可申付事、

右者諸郷士族等、舊城下屋敷買取り儀者不相成り、藩

1136の2

政中成規ニり處、近年諸郷方寄留人縣下江居住無際限所方、屋敷地別無多事、方今歸農當然之世態ニ及り間、適宜之吟味を以右之通究置り條、支許之通屹と可致取扱ひ、此旨租稅課方相達、一統に可及布告也、  
明治六年酉三月十日  
鹿兒嶋縣廳

(本文書ハ一二三四のニ号文書ト同文ユ略ス)

1137

通達留

藩内紙札貳貫文以上引換方被仰付、追々濟寄りニ付、縣下引換來ル十日限ニ一切無御取揚り間、到其期後悔致間數旨、早々御布告相成度吟味り事、  
西四月二日  
出納課

右之通申付候條、可及布告り也、

明治六年四月三日

鹿兒嶋縣廳

1138

通達留

一 四月二日巳之刻 右御首途

一 四月六日午之刻 右御發駕

右者此節 久光公就 御上京、御日取右之通ニり間、此段及布告り也、

明治六年三月廿四日

縣廳

縣下戸長

久光公御發駕、明後十七日已刻被遊 御發駕告外條、  
此旨可致布告事、

四月十五日

鹿兒嶋縣廳

布達留

1139の1

一大山參事殿、四月十九日於東京當縣榎令拜 命相成外

段申來外條、及布告外也、

明治六年酉五月三日

庶務課

戸長

1139の2

一 去月廿八日

御參内

天氣御伺、且一昨年 從二位被爲家

宣下候處、御病中ニ由拜 命御猶豫御願濟相成居外處、

右御受御禮被爲濟外、仍亦

從二位様と奉稱候様、此旨御問合申越外、以上、

御分家

明治六年酉五月九日

御家令

島津久邦殿

別紙之通相逢外條、致布告外也、

明治六年五月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1140

御系図 忠義公

明治六年五月五日

皇城炎上、越七月與ニ父久光ニ俱爲レ資ニ其新築費、併獻ニ

金壹萬兩、

○八月忠義歸レ國入ニ磯邸、

1141

通達留

五月五日午前一時宮内省より失火、

皇城一圓燒失、

聖上益御機嫌能赤坂離宮に

御立退被爲在候事、

明治六年五月五日

太政大臣三條實美

第百四拾三號

太政官廳炎焼ニ付、馬場先門ノ内元教部省を以官代被定

外條、此旨相達外事、

明治六年五月五日

太政大臣三條實美

皇城炎燒ニ付、赤坂離宮に御立退相成り條、此旨相達外事、

明治六年五月五日

太政大臣三條實美

第四百四十四號

赤坂離宮を以、假

皇居と被定候事、

明治六年五月五日

太政大臣三條實美

別紙之通驛通頭を縣令宛通知有之、

右同文略

別紙之廉者於當寮可及御達外事史官を被達外事、此段及御達外事也、

五月五日

前嶋驛通頭(密)

右者五月十七日到來ニ付、即日毎之通致布告外事、

明十八日午前八時出勤、十二時可爲退出事、

五月十九日

縣廳

1142

布達留

(本文書八一三九の二号文書ト同文ユエ略ス)

1143の1

通達留

(本文書八一三九の一号文書ト同文ユエ略ス)

1143の2

一此節大藏省官員巡回、舊藩紙札交換押印相濟り付、此已後大藏省押印無之紙札者通用令停止り條、縣内中聊心得違有之問敷り、萬一違背之輩於有之者、屹と可及沙汰り、此旨早々可致布告外事、

明治六年五月十日

鹿兒嶋縣廳  
庶務課

1143の3

一當營所火防人足看板、銃之文字印有之、然所舊軍務局夫卒看板同印ニある、右看板着用之者間々有之、非常之紛敷有之りる者不都合之次第ニ付、所持之者者印消除着り様御布告給度御座り、此段御掛合申達り也、

五月十日

營所

別紙之通掛合相成り付、所持之者者早々消除着用可致り、此旨及布告外事也、

五月十日

鹿兒嶋縣廳

1144 御系図 玉里久光公

明治六年五月十日拜三麿香間祇候及國事諮詢之

命一、

1145 御布達留

一先般神職之輩に教導職被仰付りニ付、近日中松原神社

其外所々におひて説教相開善り條、聽聞いたし度向者

可致出席り、此段及布告り也、

但日限之儀者追り可相達事、

明治六年五月廿七日

鹿兒嶋縣廳

通達留

1146の1 近來縣下失火所々差起、畢竟火用心等閑之處方到來、甚

不念之至り條、以來不用心之儀共無之様ニ、每區戸長方

嚴密可取締、勿論夜白ニ不限、家近邊亦者風立り節不勸

辨ニ塵燒等いたしり儀致禁止、若哉不心得之者有之間及

り節者、戸長方屹と可差止り、乍其上不守之もの於有之

者可及沙汰り條、此旨無遺漏可致布告事、

庶務課

1146の2

一竹木山之儀、從前方取締向分る申渡置り通る、追々

竹之子生立り時節相成り處、間ニ者御物山并諸人仕立

山等忍入、竹木并竹之子致聊爾り者有之哉ニ相聞得

り付、以來右躰不埒之儀共無之様、分る嚴敷取締可致

り、右ニ付る者別段掛申付置り付、萬一相背り者者、

誰人ニ不依無用捨名前等承届、直ニ其届可申出り、左

りハ、屹と可及沙汰り條、聊心得違無之様可申渡也、

明治六年五月廿九日

租税課

1147

布達留

庶務課

租税課

出納課

以來外國舟入港之節者、早速右之課々ハ船改掛方可届出、

若休日等ニハ、官員之宅ハ同斷問合書等を以、早々

申越り儀共可爲時宜次第事、

但課々月番又者聞前等之名前(番)・兩名・居所等委細相記、

毎月三十一日ニ船改掛方可差遣置り、尤船問屋田

代喜二郎宅出會所と相定り事、

右付、本學校管轄又者柴田圭三等如キ佛・英語學心得り



人員兼取調置、其節々早速相通、御用向相辨申度事、

明治六年六月十三日

1148 布達留

近來於諸所賭場を開張シ、鬪鷄相企、多人數屯聚シ勝負を賭、或者地料・木戸錢等を貪取り者共有之、間々者土族も相加りり哉、相聞得、卑劣之至り、賭博之儀者夫々法典も有之事り處、畢竟不心得より右次第、別る不可然、屹と令禁止り條、兼り戸長を嚴密可致取締り、違犯之族於有之者糾方之上可處罪科旨、御布達有之度り事、

六月

聽訟課

右之通申達り條、可致布告り也、

明治六年

六月十七日

縣廳

1149 御布達留

一 睦反何程

一 表口

但新地之分者東西南北之譯、

一 何大區何小區何番地、士族・平民之譯、

一 戸籍番號相洩り者者其譯、

一 地所字、何方・何馬場又者何通り之譯、

右者當春以來、居屋敷・餘地亦者割地、餘人に授請名面替願濟之者、亦者從來借地居形之儘申受、屋敷成願濟之者、其外新地屋敷成願濟者等多人數有之り付、區内不洩様取調、前件之通當人ら差出取揃、來ル十二日限可差出事、

六月七日

地券方

明細書案文

一 俸祿何石

但賞典并御養料其外定祿被下置り人者其譯、

一 當分之勤

但無役ニる者賞典祿并御切米・堪忍料・御養料被下

置り人者、舊藩之節勤方取しらへ、

一 高

一 居所

一 當分實名相名乗りる者通稱片書こいたし、

右之通御座り、以上、

第一大区小三区  
士族

何野何某

當九月方軍功賞典祿并俸祿・御養料御扶持米等ニ至迄、都の切手形相渡り様被仰渡置り付、別冊月割通出納課方米藏出張方に可差出り付、賞典祿其外定祿被下置り人者、都の別紙通明細書一帳取建、來ル十五日限戸長前に取揃、當課に可差出事、

六月廿五日

出納課

一今般地券御施行に付る者、從來之戸籍番號を地所之番

號に見据りる者致混同、地券渡方不都合に付、從來之

標札外雛形之通、別段地所番號標札相掲り様、縣下諸

郷無稅屋敷地之面々に不洩様、御布告相成度り事、

但標札番號之儀者、戸長可任差圖事、

六月廿三日

地券方

右之通申達り條、可致布告也、

明治六年六月廿四日

鹿兒嶋縣廳

1150

通達留

諸區并市中諸取引之儀者、舊十二月迄ハ舊曆を以引結取扱ひ様被仰渡置り得共、右者舊十二月迄之事なる、其後ハ新曆を以諸事取扱當然之事り處、問に者心得違之向も

有之哉に相聞得り間、已後新曆を一統引結可取計旨被仰渡り事、

當九月方軍功賞典祿并俸祿・御養料御扶持米等ニ到迄、都の切手形なる年十六度手形相渡り様被仰渡置り付、別冊割通、出納課方米藏出張方へ可差廻り付、賞典祿其外定祿被成下置り人者、都の別紙案文通明細書一帳に取仕立、戸長前に取揃當課に可差出り事、

西六月廿五日

出納課

別紙明細書一帳に取仕建、來月十日限可差出旨承知いたしり間、案文に基き拙者方に無間違、右日限に不取後り様御遣可給り、此旨致順達り間、無滞被相廻、留り御返投可有之り也、

但別冊月割之帳面ハ追り可相廻り、

六月廿五日

高山一郎

1151の1

布達留

御賞典米ヲ以學校資本ニ差出度願

戊辰ノ年兵役四出干戈騷擾ノ際ニ當ツテ、

皇家天下ノ爲、臣忠義父子聊カ盡力スルノ微功ヲ推シ玉、親政維新ノ後、御賞典高十萬石ヲ下シ賜り、待遇ノ厚キ

寵眷ノ隆キ實ニ謝スルニ言ナシ、徒タ功薄ク恩溼キニ過ルハ恐縮ニ不堪ヲ以テ、謹テ之ヲ辭スル再三ニ至ト雖、更ニ不得許可、ソノ後チ父久光ニ分家ノ祿トシ下賜リ、其祿猶五萬石アリ、然ルニ、臣忠義舊邑鹿兒嶋縣ノ地タルヤ、東京ヲ去ル數百里僻遠ノ國、ソノ貫屬士族四五萬戸、又ハ他ノ三民ニ至テ幾十萬ヲ以テ數フ、臣忠義父子舊藩政ニ從事スルノ時、四民ノ子弟教育勸道爲メ覺校ヲ設ルコト、廳下及ヒ郷邑ニ至リ凡大小數十區、以テ頑固ノ俗ヲ變シ、以テ有用ノ實才ヲ養ヒ、他日 朝廷ノ爲ニ供セント冀望シ拮据數年ナリ、今ヤ天下之學制改換、悉ク文部省ノ成規ニ從テ、生徒ノ自費ヲ以テ學ニ就キ業ヲ成サントスレハ實力不可繼ク、之ヲ中道ニ廢スレハ數十萬ノ人民蒙昧開クニ由ナシ、因テ嚮キニ下賜ル所ノ五萬石ノ賞典ヲ以テ、當癸酉年ヨリ來ル丁丑ノ年ニ至凡五ヶ年間、之ヲ鹿兒嶋縣下學校ノ資本ニ附屬致度志願ニ候、宜御執奏、速ニ御許可之儀奉願候也、

明治六年六月十四日

從三位島津忠義

東京府知事

大久保一翁殿

〔奉〕  
「願之趣御聞届相成候條、此段相達候事」

1151の2

東京府

（朱印）

鹿兒嶋縣

東京府貫屬華族從三位島津忠義ヨリ、賞典米五萬石、其縣下學校資本トシテ、五ヶ年間寄附差出度旨、伺之通り聞届候間、此段爲心得相達候事、

明治六年七月三日  
文部省三等出仕  
正五位田中不二磨

1151の3

學校資本トシテ、御賞典五萬石ノ祿米五ヶ年附屬之儀、別紙之通奉願候處御許可相成候條、從來學校建設之趣意ヲ不失、文部省學制ニ基キ、縣下士民之教導一層行届候様深致依頼候也、

癸酉六月  
從三位島津忠義

鹿兒嶋縣權令大山綱良殿

別紙三通之通り條、此旨及布告外也、

明治六年癸酉八月十二日  
大山權令

1152

在執事方帳留

獻金之願

金壹萬圓

今般

皇城炎上ノ儀、實ニ不慮ノ至變ニテ恐懼之至ニ不堪奉  
存候、方今百事維新際ニ當リ、内外多端ノ時ニ臨ミ、

新築 御經始之儀、速ニ其功被爲成候ニ付テモ亦不輕

御儀と奉恐察候、因之誠些少ノ至ナカラ、右之通獻納

仕度奉願候、何卒御造營萬分之一ニ御採用被下置候得

ハ難有次第、聊臣等涓滴之微志ヲ奉表候條、宜敷御執

奏、速ニ御允可相成候様奉願候也、

七月

從三位嶋津忠義御印

從二位嶋津久光御印

宮内省

御中

朱カキ

獻金之儀ニ付伺

從二位島津久光

從三位島津忠義

皇城炎上ニ付、別紙之獻金願出候間、則差進申候、可然  
御評議有之度、此段相伺候也、

明治六年七月八日

宮内卿徳大寺實則

太政大臣三條實美殿

別紙願之趣聞届候、此旨可相達事、

明治六年七月十日

太政大臣  
三條實美  
印

獻納書

金壹萬兩

右獻納仕候、

七月十三日

從三位島津忠義御判

從二位島津久光御判

宮内省

御中

御通達留

1153の1

一 先般藩札引替之節金錢相場之儀、夫々計算相立公平之  
融通いたし、心得違無之様申渡置り處、當分ニ至取引  
之間、段々狂々之廉有之不都合之趣相聞得り間、尚亦  
至當之見込有之者者計算を立、來ル三十日限縣下末々  
迄、無用捨算當書を以戸長に相付可申出、其上適宜之  
方法篤と取調之上、一般致施行様更ニ可申渡、此旨  
早々可致布告者也、

明治六年癸酉七月廿七日

大山權令

1153の2

一縣廳令廢止外條、官員之儀者追ふ何分可相達事、

明治六年癸酉七月廿日 大山權令

一縣廳令廢止外ニ付る者、何分申渡迄之間、難差出置願・  
伺等之事件者戸長ニ相付可差出事、

明治六年癸酉七月廿日 大山權令

一縣廳廢止之旨相達置外處、來ル廿七日夕更ニ開廳いた  
し外事、

明治六年酉七月廿四日 鹿兒島縣權令大山綱良

別紙早々可及布告候也、

癸酉七月廿四日 右松典事

1153の3

一太陽曆御頒行ノ節干支ヲ除キ候處、既往ノ年月ヲ推歩  
候ニハ干支相用候方便利ニ付、自今曆上ニ年日トモ干  
支記載可致事、

本マ、 太政官

1153の4  
一今度一大區に壹ヶ所、三町に壹ヶ所宛戸長役所取建外  
條、以來願意并諸伺書等委皆戸長相付可申出、此旨可

致布告事、

明治六年癸酉七月廿七日 鹿兒島縣權令  
大山綱良

1153の5

一縣廳に相付諸願・伺等之儀、大小共以來戸長に相付願  
書可差出、其上毎月二・五・八之日取束、第十三時限  
其課々に可差出、依事柄人召列情實可申出事、  
一平民願向等之儀、戸長役所に相付差出外儀共、前條可  
爲同斷事、

一官員私宅に直訴訟等内意申立外儀、譬へ條理明瞭成事  
件たるとも一切採用不致外、

右之通、以來相定候條、早々縣下末々可致布告事、

明治六年癸酉七月廿七日 鹿兒島縣權令  
大山綱良

1153の6

以來、布告之文書ニ者番號可相付外條、此旨相達外事、  
同七月廿九日 縣廳

1154の1

通達留  
第三號

各區郡治所廢止、更ニ支廳相立外條、官員・出役迄之間、

伺向・届等之儀者其課へ以郵便可申出事、

明治六年癸酉八月三日

鹿兒嶋縣廳

第六號

此節廢官之面々、高五拾石以下之者共ニ養祿四石ツ、先キ五ヶ年之間被下置外條、相逢外事、

明治六年癸酉八月七日

鹿兒嶋縣廳

1155

布達留

今般戸長役所之儀、縣下三大區に壹ヶ所ツ、上・下・西田町に壹ヶ所ツ、設立ニ付、取扱向之儀左之通可相心得外、

一 戸長之儀者、銘々請持區内之事件專任之事外間、萬端心を用深切ニ可致取扱事、

一 諸布達書至急之事件者、時々雇人直持を以可致順達外事、

但雇人直持之節者、時々可及沙汰外、

一 常躰之布達書者、各戸順次ニ爲繼渡、尤幾日限と相極め、其歸日通り役所に無間違爲致返納、布達皆濟之届時々縣廳に可申出事、

但布達等閑ニ心得、順達遷延ニ及外者も外ハ、(不脱カ)差

置可申出外、

一行狀衆ニ勝れ、并嫫寡孤獨之者者情實を誘明し、不差置可申出事、

一 戸籍出生死等之儀者日々帳簿ニ加除し、時々可届出外事、

一 戸長出勤時限之儀者朝八字出勤、午後退出と可心得事、一口事爭論等之儀者戸長前方可成諭解せしめ、大事ニ不及様精々可致注意外事、

一 願意訴訟等之書付類者、戸長中吟味遂、願人之區内戸長連印を以定日ニ可申出外、至急之儀者定日ニ不拘外事、

一 道路・溝川等不取荒様致注意、萬一屋敷掛之者不頓着ニ召置外向も外ハ、戸主を相諭し清潔ニ致取扱外様、尤洪水等ニ及大破外場所者速ニ可届出事、

右之通定置外條、諸事無緩急可取扱事、  
明治六年癸酉八月 鹿兒嶋縣廳

1156の1

布達留

縣廳

直管

第一支廳 吉田 櫻島 郡山 伊集院 谷山 重留  
溝邊 横川 山田 蒲生 栗野 帖佐  
吉松 國分 清水 襲山 財部 踊

屋久嶋 外十嶋  
一口之嶋 中之嶋 臥蛇嶋 惡石嶋 寶嶋  
諏訪瀬嶋 平嶋 硫黄嶋 竹嶋 黒嶋

第二支廳 大村 佐志 黒木 藺牟田 菱刈 太良  
平佐 高江 樋脇 永利 市來 申木野  
甌嶋 水引 高城 長嶋 阿久根 野田  
高尾野 出水 東郷 山崎 宮之城 鶴田

第六支廳 大嶋  
德之嶋 喜界嶋 冲永良部嶋 與論嶋  
右之通支廳相立り條、此旨相達り事、  
明治六年癸酉八月四日 鹿兒嶋縣權令大山綱良

第三支廳 入來  
新城 鹿屋 串良 牛根 花岡 大始良  
高隈 百引 市成 高山 内之浦 始良  
大根占 小根占 佐多 田代

1156の2  
支廳五ヶ所 加治木 隈之城 垂水  
知覽 種子嶋  
一ヶ所ニ判任官員一課ヨリ一人ツ、出張ノ事、  
(采)  
一張紙

第四支廳 阿多 田布施 永吉 吉利 日置 加世田  
川邊 伊作 指宿 穎娃 山川 今和泉  
南方 勝目 喜入

第五支廳 種子嶋

即今庶務課官員出張、治定ノ后三課出張ヲ定ムヘシ  
一 一ヶ月交代ノ事、種子嶋ハ三ヶ月ヲ限ル、  
一 出張ノ官員、治定シタル規則上ノ事ヲ裁決シ、其他細  
大共縣廳ニ届出ヘシ、  
一 支廳ノ公務勉強ハ勿論、第一民間ノ疾苦舊來ノ弊害ニ  
注目イタシ、改テ一新進歩ノ儀可相心得事、  
一 官員私ニ集會スルヲ禁ス、且又管下願・伺等ノ事件、  
一切庶舎ニ於テ聞届ク可ラサル事、  
一 田地山林ニ係ル願・伺等ノ事件ハ、擬議ノ上届出、尚

裁判ヲ得テ免スヘキ事、

一支廳出仕ノ時限、縣廳同様ノ事、

一郡内、就中茶・養蠶繁殖ノ事ヲ切ニ注目シ、勉勵差配スヘキ事、

癸酉八月八日

庶務課

一遊藝役者密ニ雇下リ者ハ所拂可申付事、

一右同止宿爲致リ者同斷、

一祭祀ニ付、遊藝私ニ取企リ者ハ相應之懲役可申付事、

一手妻遣ヒ并揚弓等密ニ取企リ者ハ、見付次第破却之上

前條同斷可申付事、

一官員私宅ニ密訴等いたシリ者ハ取糺之上懲役可申付事、

右之通、今般更ニ相定リ條、心得違無之様早々可致布

告事、

明治六年癸酉八月九日

鹿兒嶋縣廳

別紙之通申渡リ條、已來右等之願書萬一差出リ者有之

リハ、戸長前ニお屹と叱置、趣意致貫徹リ様分ル申

論、書面悉皆可差戻事、

八月九日

縣廳

戸長

右、各郷戸長にも達相成リ事、

通達留

一當縣区内諸神祭祀を名とし、諸遊藝之類、角力・芝居・

小踊等追々願出リ付、免許之上興行爲致リ處、段々民

間之妨害者勿論、不謂所業等爲有之哉ニ世評も有之、

看々僻遠固凝之民心を感し、全く無益之徒事ニリ條、

爾後嚴禁せしめ、屹と取締向左ニ申達リ、

一遊藝役者密ニ雇下リ者者所拂可申付事、

一右同止宿爲致リ者同斷、

一祭祀ニ付、遊藝私ニ取企リ者者相應之懲役可申付事、

一手妻遣ヒ并揚弓等密ニ取企リ者者、見付次第破却之上

前條同斷可申付事、

一官員私宅へ密訴等致リ者者取糺之上懲役可申付事、

右之通、今般更ニ相定リ條、心得違無之様早々可致布

告事、

明治六年癸酉八月九日

鹿兒嶋縣廳

布達留

大隅國贈喉郡襲山郷鎮座



布達留  
第十號

霧嶋神社

右當縣之社ニ被召建外條、此段及布告外也、

明治六年八月十四日

庶務課

三課

1159

布達留

一 今般支廳相立外付るハ、各郷戸長、出張官員之指令を奉し、人民之疾苦ハ勿論、第一勸農・養蠶・學校・風俗等、其外茶繁殖等郷内捕益之事ニ注意いたし、從今政治一層進歩之儀可相心得事、

一 郷内從來之舊弊・惡習之儀も外ハ、支廳官員ニ申出洗除可致事、

一 郷内之人民願・伺等之事件ハ戸長聞届、郵便を以可申出ハ勿論、事柄ニ依る者當人召列、支廳ハ出頭情實可申述事、

右之趣、戸長一同可致奉守也、

癸酉八月

鹿兒嶋縣廳

1150の2

第十一號

地券發行ニ付、別冊之通り條、此旨及布告候也、

同八月十八日

鹿兒嶋縣廳

右別冊略ス

1160の3

第十二號

此度支廳相立外付る者、各郷戸長并副戸長之儀從前之通り條、此旨可相心得候事、

癸酉八月十八日

鹿兒嶋縣廳

1161の1

布達留

四ヶ所支廳取立候申合

一支廳之儀、舊ノ郡治所又は假屋、便宜ニ從ヒ成丈入費無之様、易簡ニ相立可申事、

一支廳内四課之官員出仕ノ座席、并出仕戸長ノ面々座席

相設可申、左候る諸事輕便ニ致候様可相心得事、

一各郷戸長に申付貯藏ノ米金員數、計算ノ上本帳仕立可爲差出事、

但出入之儀者時々承届ヘキ事、

一支廳治定之上各郷戸長呼出、達書一通ツ、相渡、並今般改正ノ趣意丁寧相諭、能ク可爲致貫徹勵事、

一各郷戸長任免之儀、支廳ニ於テ官員裁決之上申付、本廳に可届出事、

一此涯庶務課ヨリ官員差出候付而者、屬一人・史生一人ツ、四ヶ所に分配可致也、

但三課出張之上者一人ハ歸縣可致事、  
今般支廳取立ニ付、右之通相定也、

各郷戸長に達之條々、

(本文書八一五九号文書ト同文ユエ略ス)

布達留

舊近衛兵解隊、伍長以下賞典被下り、年限未滿ニ致死没り節者、其相續人に定期之通り被下り、尤本人二・三男等ニ跡目相續人無之時者、其身寄親族之者に被下り

條、此段相達外事、

但本人致死没り節者、其相續人并親族之者名前等、其時々當省に可届出外事、

明治六年八月七日

陸軍卿山縣有朋

鹿兒嶋縣

別紙之通被仰渡り條、此旨及布告也、

西八月廿二日

縣廳

鹿兒嶋縣

1162の2

其縣貫屬佐竹義繼始千三百五拾貳人、近衛兵服役滿期ニ付、別紙之通年限を以貳人扶持ツ、賞典トシテ下賜り條、明治六年一月一日より年限中者其縣於テ渡方可取計事、

但一月ハ六月迄之分ハ七月中相渡、七月ハ十二月迄之分ハ同十二月中ニ取纏、一ヶ年兩度ニ渡方可致事、

明治六年七月廿二日

大藏省事務總裁  
參議大隈重信

右ニ付別紙略ス、

但五ヶ年ト貳ヶ年也、

別紙之通被仰達り處、未大藏に御下渡無之外間、廻米次第可拂渡り付、御布告有之度致吟味也、

西八月廿四日

出納課

別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、

八月廿四日

鹿兒嶋縣廳

別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、(ハ消点ナリ)

1163 布達留

本年一月第二十八號布告、華・士族家督相續之儀御詮議之次第有之、左之通第一章改正并一章追加相成外條、此旨華・士族へ布告スヘキ事、

明治六年七月廿二日

太政大臣三條實美

第一章改正

家督相續ハ必總領ノ男子タルベシ、若シ亡没或ハ廢・篤疾等不得止ノ事故アレハ、其事實ヲ詳ニシ、次男・三男又ハ女子ハ養子相續願出ツベシ、次男・三男・女子無之者ハ血統之者ヲ以相續願出ツベシ、若シ故ナク順席ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ咎可申付事、

一章追加

婦女子相續之後ニ於テ夫ヲ迎へ、又ハ養子致シ外ハ、直ニ其夫又ハ養子へ相續可相讓事、別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、

酉八月廿三日

縣廳

1164の1 布達留 第十四號

金貨相場立之儀者、御在達相成居外比轄表通之事ニ、更ニ相變外儀無之外得共、藩札引換ニ付貸借返辨之儀、舊錢壹員文之處ニ金三百目之割を以返辨可致旨、先般申渡置外處、取計中損益相立平等ならず、諸人苦情ニ及外段相聞得外付、舊號錢壹員員文者其三分一、新號錢三千三百三拾三貫三百三拾貳文三係之割を以取引致外様申付候事、

但先般申渡外節より取引都外本行通引直可申事、

明治六年癸酉八月廿七日

縣廳

1164の2 朝官之面々ハ、藩政中より家族養俸被下置外得共、各省其他府縣ニ夫々月給被成下、且大藏省御規則ニも致違背外付、養俸米引揚候條、此旨及布告外事、

酉八月廿八日

縣廳

1165 通達留

(本文書八一六三号文書ト同文ユエ略ス)

1166

布達留

舊知事公、今般御墓參御暇百五拾日之間御願濟相成、  
本月中旬東京御發艦ニ有、舊磯御茶屋に被爲在 御着  
外段爲御知有之外間、一統承知可有之事、

一右ニ付、縣下諸郷ニ至迄輕き獻上品等不苦外事、

但家令に相付可申出事、

癸酉八月四日

大山權令

舊知事公、近々被遊御着筈外ニ付有者久々御歸縣之御  
事故、爲御祝儀士族中より御酒肴進上仕筈外ニ付、一  
家部より舊錢百文宛取揃外様被仰付外間、銘々來ル廿  
日限無間違拙者方には、名前書相添可被差出外、以上、

第三大區小四區

八月十三日

戸長

舊知事公御着之節者、磯御客屋下渡戸方御上陸之段爲  
御知有之外條、諸人御祝儀申上外儀者戸長方取束、家

令に相付可申上外、此旨相達外事、

癸酉八月十五日

鹿兒嶋縣廳

1167

御布達留

第二百六十三號

(本文書八一六三・一一六九号文書ト同文ユエ略ス)

通達留

(本文書八一六四の二号文書ト同文ユエ略ス)

1168の1

1168の2

一去ル戊辰之役奥羽・北越出軍ニ付軍功祿之儀、藩政之  
適宜を以被成下置、此般

朝廷に別册之通御願立相成外處、御指令ニ基キ當酉九  
月方一同軍功賞典祿ニ應し被成下外、

一御指令書之内戰死之者四百人餘者、祭資料として給米  
三ヶ年分被成下外旨相見得外付、此般亦々三拾ヶ年被  
成下度歎願相成外付、追々何分

一朝廷方御沙汰可有之外間、其通銘々可相心得外、

一堪忍料被下置外而々、此節惣々被廢外事、

右之通大藏より被仰達外付、此節俸祿手形渡方之手

續左之通、

一い 九月五日 はに 九月七日

布達留  
第十六號

ほへと 同八日 以下ナシ

布達留

熊本鎮臺

東京鎮臺を除之外、各鎮臺兵隊除隊願出外者、三ヶ條之規則ニ照準シ取扱可申旨、去ル壬申十月七日相達置外處、其後右願出外者夥多有之、徒ニ兵員ヲ減少シ其際限も無之付、自今右願出外者、其府縣廳方合格之者相撰爲代人爲差出、其臺ニ於テ検査補闕可致、此旨更ニ相達外事、  
伊其他之義凡テ最初相達外通、尤徴兵令ニ依リ召募致外者ハ此限ニアラス、

明治六年七月廿七日

陸軍卿山縣有朋

前書之通外條、此旨相達外也、

同八月廿六日

熊本鎮臺

鹿兒嶋營所

別紙之通被仰渡外條、此旨及布告外也、

同九月十二日

縣廳

布達留

癸酉九月

鹿兒嶋縣廳

一今般東京驛途察役員當地に出張相成、郵便方法尚又盛大被相行外様取扱相成積ニ由、基郵便之儀者人民便宜之爲ニ政府莫大之御失費を不被爲厭、低價之税金を以全國一般不通之儀無之様、厚ク御世話爲在り儀ニ付る者、規則を守り無税之信書等取遣不致儀ハ勿論ニ付得共、未タ不辨躰之者有之、萬規即限外之幸便に相託シ、無税之信書往復爲致儀有之り者、郵便罪罰則ニ照シ過分之罰金差出外様立到り、遂外身上ヲ苦め外様之儀於有之者實ニ愍然之至外條、區内無遺漏懇切ニ説諭いたし、無税之信書取遣外儀無之様取締可有之外也、

舊知事公、明廿日四ツ時御供揃ニ由

御出、磯新道筋・永安橋・春日神社前・舊大龍寺馬場御通行、龍尾神社・上之原御墓に 御參詣、夫より藤井助八郎前通、内之丸筋御通行、常安峯御墓に 御參詣、夫より家嶋馬場舊堂之前御通行、長谷場御墓に 御參詣、夫より一ツ橋・清水馬場野村勘十郎屋敷掛川筋新道筋御歸館、

別紙之通爲御知有之付、盛砂等ニ者不及、御道筋不潔無之様可致指揮外、此旨申越外也、

明治六年癸酉九月十九日 庶務課

1172 通達留

第十七號

今般廳下取締組を設、一大區毎ニ屯所一ヶ所を置き晝夜相詰、時々爲致巡邏外條、此旨致布告外事、

明治六年癸酉九月廿九日 鹿兒嶋縣廳

通達留

1173の1

去夏戸籍帳差出外以來、去壬申十一月限生死出入之儀、每月生子何人・死去之數、一ヶ月分ツ、取分男女を記、別紙一帳を以届出外様相達置外處、右者原戸籍に死生出入等仕付直シ之見合外間、士族・平民・姓名・屋敷番號・何某何男・幾女等之譯迄も明細ニ記シ可差出外、尤養子縁與等ニ付、他家往來之者も、何小區何番屋敷士族・平民何野何某次・三男ニ、何小區何番屋敷士族・平民何野何某養子ニ參り、又何小區何番屋敷士族・平民何野何某幾女ニ、何小區何番屋敷士族・平民何野何某何男

野何某に致縁與外譯相記、月々之出入無遺漏様可取調外、左り右一帳之末ニ、壬申十一月限り生死出入之數、男女之別摺計いたし可差出事、

俱寄留人月々出入之増減、月分ケいたし差出外儀者最初中渡置外通ニ、別段姓名等書記ニ不及外、

酉九月廿三日

鹿兒嶋縣廳  
庶務課

1173の2

第三百貳拾壹號

十八日午後三時三十分權典侍葉室光子分娩、皇子御降誕之處、即刻 御逝去被遊外付、三日之間歌舞音曲等令停止外、此旨布告候事、

但日數之儀者右布告到達之日より算シ外事、

明治六年九月十九日 太政大臣三條實美

別紙之通被仰渡外條、此旨致布告外事、

明治六年癸酉十月七日 縣廳

1174

布達留

今二日大風雨ニ付、各課御用濟次第勝手退出不苦外事、

但火用心可入念外、

癸酉十月二日

縣廳

1175の1

布達留

磯山并惣陣鹿倉之儀老吟味之譯有之、取縮向等申達置ハ  
趣モハ處、近來狩犬等曳入又老薪取を名として、猥ニ踏  
入ハ族も有之哉ニ相聞得甚不可然事ハ條、兼ハ見縮人も  
掛置ハ付聊心得違之儀共無之様、末ニ到ル迄分ル可申  
渡ハ也、

癸酉十月八日

縣廳

前條之通、重留・吉田戸長ハ相達ハ事、

1175の2

教導職之面々、所在人民説教之爲各郷ニ致巡回ハ付、諸  
事打合不都合之義無之様可取計旨先般相達置ハ處、其後  
郡治所廢止ニハ不連續之義々難計ハ間、何篇其節布達通  
可相心得旨、管下ハ更ニ可及布告ハ也、

癸酉十月九日

縣廳

各支廳

1176

布達留

先般道路・溝川等清潔ニ有之ハ様申渡置ハ處、此比ニ到  
リ、間ニ老心得違之もの有之、他ヨリ塵芥等打捨、溝川  
筋屋敷掛之もの別ル迷惑ニ及ヒハ哉ニ相聞得、如何之至

ハ條、乍此上右躰之者於有之老見届次第不差置、名前承

届早々戸長ハ申出、其もの取糺、無相違ものハ其區内戸  
長前ニハ懲役十日申付、其届可申出ハ、此旨及布告ハ事、

癸酉十月十二日

縣廳

1177

布達留

大嶋外四嶋之儀、今日之賣買、米・茶其他之品物を以致  
交換日用相辨ハ得共、方今之時勢ニ立到甚無便利成立、  
鳴民共追々難澁之段相聞得ハ付、此節縣下同様金錢致  
融通ハ様申渡置ハ條、諸人爲心得相達ハ也、

癸酉十月廿二日

鹿兒嶋縣廳

1178の1

通達留

(本文書ハ一二七の五・一二一八の五号文書ト同又ユエ略ス)

1178の2

第三百七拾五號

内務省被置ハ條、此旨布告ハ事、

但掌管之事務老追ル可布告事、

明治六年癸酉十一月十日

右大臣岩倉

## 通達留

舊知事公に來戊新年頭御祝儀として進上物、出錢毎戸天保錢貳枚ツ、戸長より取揃可相納り、此旨及布告り事、

癸酉十二月四日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

右之通被仰渡り付、來ル廿日限拙者方へ可被差出り、以上、

十二月五日

戸長

右五張紙

郷士族・平民迄も家部ニ付天保錢貳枚ツ、可相納、郷士族・平民方差出り錢者副戸長取揃りニ付、屋敷内居住之人々江老、此旨通し可被給り、

十二月五日

戸長

## 御布達留

## 第三十二號

諸物價之儀者、年之豊凶・物之多寡又者精粗・善惡ニ依り致低昂外儀者自然之道理ニ有、一定之價相立外者却る物貨之流通を妨、諸人之不自由ヲ生外ニ付、今般米・酒其外諸賣立直之儀者相廢、以來適當之賣買申付候、乍然

分外高直ニ商賣いたし外者者兼る嚴密ニ見分掛置り付、相順次第相當之料罰可申付り條、右之趣意篤と相心得可申事、

明治六年癸酉十二月十二日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

## 御布達留

林大藏大丞・工部省六等出仕石田英吉以下六名當縣

江御差出相成、直達之大意

右今般派出之大意者、

朝廷より特別之御詮議ヲ以御遣相成、專撫民之御趣意ニ付るハ新ニ内務省ヲ被置り儀ニ付、地方之官員一層誠實致勉勵、萬民御趣意致貫徹り様注意可有之、尤御新政之時ニ當、毎ニ變更モ少カラス、隨る人民疑惑ヲ生シ外哉も難計ニ付、右等之夫々見込有之ハ、可申立、尚官員并戸長撫民之御趣意厚ク心得可致勉務旨、反覆直達相成り條、此旨相達り事、

癸酉十二月廿日

大山權令

縣下

戸長



第三百七十五號

(本文書八一七七八の二号文書ト同文ユエ略ス)

一太政官公布之趣及有之、此節縣内ニ遙拜所相設ケ付、此節及布告ノ事、

癸酉十二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

元始祭

一月三日

新年宴會

一月五日

孝明天皇祭

一月三十日

紀元節

二月十一日

神武天皇祭

九月十七日

天長節

十一月三日

新嘗祭

十一月廿三日

右年中祭日・祝日被相定ノ事、

但休日

一月三日、土民一同遙拜可有之ノ事、

但當朝午前九時後可爲勝手、

右之通、以來相定ノ事、

癸酉十二月廿七日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

諸御書附留

歸京御猶豫願

1182

先般鹿兒島縣ニ墓參之上、家事取片付且持病之足痛爲療養湯治、御暇依願日數百五十日被下置難有滯縣罷在候處、于今全快不仕候付、猶又往來ヲ除ノ外百五拾日重テ御暇被成下候様仕度、此段宜御執奏奉希候、以上、

明治六年十二月廿日

從三位島津忠義

東京府知事大久保一翁殿

<sup>朱力キ</sup>願之趣御聞届相成候條、此旨相達候事、

明治六年十二月二十八日

東京府

御系函 久光公

明治六年十二月二十五日任内閣顧問、

通達留

1184

1183

第三十六號

成一月八日

本年二月中、三井組爲替札引換之儀大藏省より御達有之、先達る及布告置り處、當分之右札持合之者若銀行方には差出引換可願出り、左りの現金引換度者若、銀行方規則に基き、二ヶ月利足百圓に付金貳圓宛引落し相渡、差當現金入用無之者若願書差出置、引換濟之上可相渡り條、右様希望之者若本月廿五日限り銀行方には可差出り、此旨及布告り事、

明治七年成一月八日

鹿兒嶋縣廳

1185

通達留

御目錄之寫

献上

御肴料五百七拾圓

縣下中

右若舊

知事公に當戊年頭爲御祝儀、士族・平民迄之惣代三大區戸長壹人ツ、去ル五日磯御屋敷に罷出家令に相付、右之通進上相成り處、別る御懇篤之御挨拶有之り間、此旨爲心得致布告り事、

1186の1

通達留

第二號

此節建設相成り陸運會社之儀、民間之疾苦不一方趣相聞得りに付、至急廢止申付り事、

但即今取建相成り税銀者、主に差返首尾可申出事、

成一月十二日

鹿兒嶋縣廳

戸長

1186の2

第三號

陸運會社廢止に付、更に會社建設迄之間縣人馬繼立之儀、舊驛通所に於て相對賃錢を以繼立可申、此旨布告り事、

甲成一月十三日

鹿兒嶋縣廳

戸長

1186の3

第四號

銃發取締之儀若夫々申達置り趣有之り處、近來諸所において猥に發射いたし人民之障碍相成、萬一怪我いたしり儀共有之り者實に不可然事に付、屹と令嚴禁り條、

各區戸長氣を付取縮可致り、此旨及布告り事、  
戊一月十三日  
戸長  
鹿兒嶋縣廳

1187  
御系図 忠義公御子

- 一 哲丸
- 一 房姫
- 一 清姫
- 一 充姫
- 一 女子

ソネ  
常姫  
ヒサ  
常姫

明治七年二月七日生於鹿兒島、母齊彬女寧姫実母山崎拾女

通達留

第十二號

一 小銅錢壹枚ニ付 代百拾貳文

一 文久錢同 代百六拾六文

一 青銅錢同 代貳百貳拾四文

一 鍋錢 同 代四文

大嶋・沖永良部外三嶋之儀、往古より金錢融通を塞キ、

専ら米・品を以賣買を定めり、嶋民共上縣、醫道又ハ學問執行等専ら天賦之物と固凝しり者、早寛教へさるより致す處也、今哉御維新之際遭逢し、普く撫民之御趣意親敷御説諭も有之、殊ニ全國一般融通せし金錢を商法之爲ニ束縛せし、實ニ不公平之處分ニ有之、無

申譯次第ニ付、即今第一日用之便を開り儀急務ニ付、諸嶋融通之爲別價位を以、銅貨今日も通用相定り條無

疑念可致取遣り、尤於當地者都府と反對し、銅貨相少

く曰く舊藩札も消却いたしり得共、不日にして四民便宜を失ふハ必然り間、當分錢貨充實せざる賦ニ付、商人共坂地等を買下り儀ハ日數五拾日限可爲勝手、素

貨幣之製數種にして、各地其價一定ならざるハ尤天賦

なり、依る者官庫入拂且上納錢等者、從前之通金貨ニ比較し可致取扱り、

右之通縣内中、至急可致布告事、

二月十六日  
鹿兒嶋縣廳

1188の2

一 當今佐賀縣下紛擾ニ付る者、内務卿大久保利通を始各官員出張被 仰付、陸軍兵をも被差向、速ニ鎮靜人民安堵り様、既ニ夫々御手配り相成り付、不日鎮定可致り

條、於各管内浮説・流言波行々とも、聊擬惑を不抱、

人民安業々様精々注意、管内取締向嚴重整備可致事、

明治七年二月十五日

内務卿木戸孝允印

鹿兒嶋縣權令

大山綱良殿

1188の3

鹿兒嶋縣

一 佐賀縣下賊徒征討被

仰出々條、此旨相達々事、

甲戌二月十九日

内務卿大久保利通

1188の4

一 佐賀縣貫屬之輩、徒黨を結び官兵ニ抗敵々始末、不憚

朝憲、其舉動反罪明白不可容々付、既時征討トシテ官

軍被差向々、就る者右黨與之者共、自然諸縣下ニ徘徊

潜伏致々哉も難計々條、不審之者共隠置後日露顯致ス

ニ於る者嚴重處置可及、此段相達々事、

但不審之者捕縛之際手向等致々ハ、臨機之處置不

苦々事、

明治七年二月十九日

大久保内務卿

鹿兒嶋縣權令

大山綱良殿

1188の5

今般出發之二大隊・砲兵共、去ル廿日午後八時進軍、昨

廿一日田代驛着、同所ニ賊之番兵四拾人計出張致居々處、

官軍進入ニ付番兵糧食其他諸品等打捨逃去、轟村之内朝

日山に凡一大隊計屯集々付、今朝午之前六時進撃キ官軍

大勝利、賊徒民家に放火退去々付猶亦一層進軍、追々切

迫々付、賊徒遁逃潜伏之程難計々付、管内取締向精々

注意可致、此段申入々也、

二月廿二日

内務卿大久保利通

鹿兒嶋縣權令

大山綱良殿

1189

通達留

佐賀縣賊徒征討、蓮池迄進入々處、昨廿八日降伏之狀申

出々、然ルニ賊魁江藤新平脱走致々趣々付、兼而相達置

々通手配相付々事ニ可有之と存々、聊無漏嚴密遂探索、

至急召捕可差出々、此旨相達々事、

明治七年

三月一日

内務卿大久保利通

別紙相達々條、早々着手盡力可有之、此旨相達々也、

明治七年

三月一日

内務卿大久保利通

1190の1

通達留

生産會社に所務米手形を以諸人拜借之面、先般御布告相成り銅錢直成を以納致り義、一同可爲勝手旨被仰渡り、此段可及布告外事、

三月二日

出納課

1190の2

先般銅錢價位一條に付、官庫者從前之通入拂可致取扱旨趣致布告り處、下々之者共心得違り哉に相聞得、諸會社貸付金等金貨上納無之り者不相濟杯と流言いたし、別り通用之妨相成り儀も有之、第一撫民之御趣意に不相叶り條、以來生産會社者勿論支社一同借金等有之面、都る銀に不拘、今日之便宜を以金貨・銅錢等返納いたし度者者可爲勝手旨、更に申達外事、

明治七年甲戌三月九日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

1190の3

此般家祿・賞典米壹石に付六圓平均を以大藏省より御下金相成り、因る者五月より七月迄三ヶ月分、右直成を以一諸に相渡り條、希望之者者勝手願出、出納課より手形可申請り、此旨及布告外事、

1190の4

一今般地券發行に付他之管内に所有之地所者、其所轄廳に相付券狀下渡可願出り成規に付、宮崎縣管内に高所持之者者、別紙案文に基キ銘々高員數等無間違様一帳取仕立、來ル廿七日限可差出、高馬所又者石數等及間違りる者持主迷惑可相成り條、聊調落シ無之様人急可申出、此旨布達外事、

但戸長取揃、地券方に可差出事、

明治七年甲戌三月九日

縣廳

外案文略ス

1190の5

一新築地野上橋筋、右易居町通と名稱相定外事、右通より東ハ生産町、西ハ易居町と名稱相定外事、

第一大區小十五區

舊營繕方下新築地拂下相濟、右之通町名并區畫相定外事、

此旨布告外事、

甲戌三月廿日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

甲戌三月十八日

鹿兒嶋縣廳

1191 御系函 久光公

明治七年四月二十七日任「五大臣」、

縣下 戸長 三町 區長

1192の1 布達留

第三百九拾六號

地券渡方規則中證印稅之儀、代替授與并水火盜難より書替り分ハ、今後券面書載之代價ニ不拘、券狀壹枚ニ付五錢ツ、收納可致り、此旨布告り事、

明治六年十二月二日 右大臣岩倉具視

1193の1 布達留 第三十壹號

1192の2 第二十九號

癸酉十一號を以相達置り處、管下市街沽券稅施行二十二條之内第三條地券ハ、新規并書替共十圓ニ付五錢ツ、十圓以上ハ右之割ニる印稅可調掲載り處、別紙第三百九拾六號之通、今般更ニ御布達相成りニ付、爾後右通書替之分ハ、券面書載之代價ニ不拘、券狀壹枚ニ付五錢ツ、收入可致、且又沽券稅地券所持之面々、賣買勿論相續等之節書替、名面替規則之通心得違無之様、時々戸長連印を以地券掛に差出、不都合無之様無脫漏區内には可申渡事、

成五月十九日 鹿兒嶋縣廳

先般銅錢之儀、七拾貳文を以便宜之取替致度、三町戸長共ハ願出趣有之、其通聞届り旨相達置り處、商人共何様心得違り哉、諸色益沸騰、殆ト倍增ニ押移り哉ニ相聞得、窮民之者其苦情相成別る不都合之事り條、尚又公旨行届り様嚴密取締可致、乍此上不聞之者其見聞をも掛置り付、屹と可及沙汰り事、

明治七年戊五月廿五日 鹿兒嶋縣廳

縣下 戸長

1193の2

昨年三月舊藩札曳換之節、差向キ小仕錢不都合之譯を以壹買文札以下押印ニる被殘置通用致來り處、以來追々手摺相成文字不分明ニ付、今般手摺之正札を以不日曳換之儀被仰達り、就る者天保錢并銅貨等同様相心得、萬一互ニ便宜ニ任セ割増等ニる取遣り者者、引換之節屹と迷惑

ニ可及ハ條、聊心得違有之間敷ハ得共、定價之通可致取

遣ハ、尤其節ニ臨ミ不都合不相成様分ル告諭可致、此旨

管下ニ無遺漏及布告ハ事、

甲戌五月廿七日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

1194 布達留

今般海軍省ニ海兵徵募相成筈ハ付、右志願之者者各區

戸長ニ相付、年輩并居所等記載之明細相添、本月限願書

可差出、勿論召集之上者兼ハ被仰被置ル規則ニ照準シ檢

査可相成ハ條、此段管内一般無遺漏及布告ハ事、

戊五月

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

1195 通達留

鹿兒嶋縣

外拾九縣

今般海岸測量之爲、陸軍省官員御雇外國人同道巡廻可致

ハ條、諸事差支無之様可取計、此旨相達ハ事、

戊七月三日

太政大臣三條實美

1196 布達留

救旨院

地所上築地八町岸岐

病者入院定數七人宛

右者縣下士族關山壯太郎外兩名、縣内病者救旨之爲、今

般願ニ依リ設立リ、左ハ極困窮之病者ハ藥并飯米代等、

都ル當院方引受療養可致仕法ニハ條、縣内病者入院願望

之者ハ其區之戸長ニ相付當院ニ可申出、此旨布告ハ事、

明治七年

甲戌七月廿五日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

1197 通達留

此度從三位殿深勘考之譯有之、嶋津家初代以來慶應三年

戊辰以前迄、御家臣戰爭之砌於諸所戰死之人員名前取調

ハハ條、其者之俗稱・實名且於何方何之年月

日遂戰死ハ譯相知ハ丈委細相記、當年十月限其子孫共

リ可申出旨、縣下一同ハ被及布告、右届書取揃御差廻給

外様致度御座外也、

但日州諸縣郡各郷に老、宮崎縣廳方前文同様彼爲沙汰、  
届書被差廻外筋之儀共、右同斷取計御座外様御掛合  
給度御願申進外、

戊八月

磯  
家令

縣廳

御中

別紙之通依頼相成外ニ付、無遺漏戸長方可相達外事、

戊八月

鹿兒嶋縣廳

1198

布達留

一市街中諸人門明直并小門明願之儀、時々願出許可相成  
來外得共、以來老假令老束口を西口ニ明直外節ニ限り  
是迄之通願出、其地表口不相替分又老小門直之儀老戸  
長に時々届書差出、戸長方右届書地券方に差出外様可  
致外事、

一諸人居屋敷四壁垣通曲折有之、並合外様垣相直外儀自  
儘ニ相直外も間々有之、右老第一畦步増減老勿論、通  
路之障礙も相係不可然儀ニ付、以來繪圖面相添時々  
願出外様可致事、

一地所諸願書差出外節、地所番號不相記混雜之譯も有之

外ニ付、片書大小區何番地又老何番地借地之譯記載、  
差出外様可致事、  
右之趣無遺漏可及布告外事、

七年八月七日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

通達留

1199の1

十一月一日 旧曆九月廿三日ニ相当

靖獻靈社大祭ニ付、戰死家族之面々ニ膳<sup>シモロキ</sup>被下、角力并  
競馬申付外條、見物ニ罷出可申、此旨相達外事、

戊十月十三日

1199の2

一今度廳下三町に火防手兼の召集相成居、區長役所前  
火見臺建設ニ付、以來出火之節相圖之半鐘打方申付外、  
自然縣廳近火之節老續打、近在諸所遠方老間を置一ツ  
ツ、打方爲致外條、此旨管下に可致布達外事、

七年十月

縣廳

1200

通達留



惟新公御肖像、明廿三日旧曆九月十日午前六時龍尾神社御發  
 輿、伊集院德重神社に御遷座之筈外處、當日御日柄ゆへ  
 參詣も多人數可有之、於御道筋混雜之儀共無之様依頼  
 付、一統相心得、聊不敬之儀共有之間敷外、此旨及布告  
 外事、

戊十月廿二日

鹿兒嶋縣廳

布達留

(竜馳)

一當艦も戊八月十六日長崎出艦、尤大久保辨理大臣乗組

二、同九日支那清國上海に碇泊、其折孟春艦上海川

口に碇泊に付、右孟春艦より上海城下迄大久保大臣に

老被差越、同廿三日同所出帆、同廿七日支那烟臺港に

碇泊、同廿九日天津に向出艦ス、同三十日天津沖に碇

泊、尤孟春艦も類艦外處、大久保大臣に老孟春艦より

本々、天津迄被差越、當艦儀も同三十一日同所出艦、又々烟

臺に向ケテ出艦ス、九月二日烟臺港に碇泊、大久保大

臣儀老臺灣一條付北京に應接に付被參、當艦同所に相

待居、度々應辭に相成り得共、中々聞入無之に付、

左外得老臺灣兵隊迄も不引揚との、大久保方返答に

天津迄引取相成り處、又々北京之様呼返シ、英米兩國

公使中入に漸々罰金ヲ出ス賦に相成、員數左に記ス、  
銀四拾萬テール

壹テール我壹圓五拾六錢

我六拾萬貳千四百圓

右罰金軍費

拾萬テール

我拾萬五千六百圓

右戰死扶助金

合五拾萬テール

我七拾八萬圓

一右大久保臺灣に差越、兵隊引揚之上相請取賦に相決シ、

當月五日大久保は英國渡海船ヨリ烟臺に被參、同日同

船に乗組臺灣之様被差越り、同六日烟臺出艦、今日九

時無恙當港に碇泊、

一十月十八日神奈川丸ト申船烟臺諸品積込參り處、右出

船使方委細相記書面差出置り事、

一支那出來白マト貳段備上海に碇泊候處、當艦差越り處、

右支那乗組之水夫等數多脱走いたしり由、

一魯船三隻

一英ゴホー一隻

一佛一隻

一皇國船筑波艦 當艦 春日艦 東艦 雲揚艦 第二丁

卯艦 孟春艦

但今日入港

高尾艦其他商船多數碇泊、當艦出艦も未相分り不申

事、

明治七年甲戌十一月十日 長崎ヨリ

1202

通達留

嶋津家初代方戊辰之役迄、嶋津家ニ付致戦死人之姓名、於何方戦死之譯年月日等、可被書出旨致通達外通、來ル廿五日限り取揃可差出外間、日限方内取調可書出外、以上、

但戦死之人無之家柄者、名之下へ有無之譯相記可被成外、

戊十一月十八日

布達留

1203の1

當戌年中生死出入、一月方十二月迄月々取分ケ出入之譯、且養子遺又縁與等之出入者、何大區何小區何番屋敷に取

遣外譯巨細相記可被申出外、右者當年中戸籍取調惣計い

たし差出外様庶務課方被相達外間、無遺漏來ル廿日限可被申出外、依る致順達外ニ付無滞被相廻、留方御返し可有之也、

但出入無之方者本文ニ張紙を以其譯可被申出外、

月日ナン本ノマ、

1203の2

第四十五號

發炮取締之儀兼る申渡置趣も有之外處、此比於諸所小鳥騷いたし外者有之哉ニ相聞得、別る如何之到ニ外、右所諸所徘徊猥ニ致發砲外る者人民之障碍相成、萬一も致輕我外儀共有之外る者實以不可然事外條、各區戸長注意稠敷取締可致外、此旨及布告外事、

戊十二月九日

鹿兒嶋縣廳

縣下

戸長

1204

通達留

天保錢貳枚ツ、

但新錢ニして貳百文

右者舊知事公に、來亥年頭進上物料として、有志之面

來ル十五日限、拙宅に銘々名前被相記、本行之通差出被成度、此段及布告外、以上、

但名順被相廻、留より返納可被給外、

戊十二月

戸長

1205

布達留

送第四百三拾貳號

其縣貫屬之内、御親兵として去ル明治四年被召出外諸兵隊之内、同年二月七日、同四月十日迄之内、舊近衛兵解隊之節歸縣致外伍長・兵卒、猶二ケ年間之兵役ヲ帶外様相達置外處、本年二月八日ヲ期シ兵役差免外、此段相達外事、

明治八年一月二十五日

陸軍卿山縣有朋

1206

通達留

第七號

今廿一日午前第五時四十五分、權典侍柳原愛子分媿、皇女御降誕被遊外條、此旨布告候事、

明治八年一月二十一日

1207の1

通達留

一皇女御名、薰子ト被命、梅之御殿ニ御住居被爲在、梅之宮ト可奉稱外、此旨布告外事、

明治八年一月廿九日

太政大臣三條實美

諸願・伺・届等、自今本紙・扣トモ界紙認、其事件之大趣意を摘ミ、本文之前行ニ二・三字引下ケ、某儀ニ付願、或伺、或ハ届ト相認メ可差出、尤自今一身ニ拘り外儀者美濃紙ニ相認可差出、且前日差出外願・伺等之儀ニ付、後日再書面差出外節者、某云々ト認メ可差出事、

但是迄其事件之大趣意を上包に張紙して差出來外處、以來ハ直ニ書載可申事、

是迄諸願・伺書、附紙ニテ御沙汰相成來外處、自今本紙ニ朱書捺印之上相達外條、紙尾に餘白を致し相認め可差出事、

辛未八月十八日

太政官

各府縣管内に布達之文書并其府縣官員及管下人民、廳に差出書面之儀、從前何廳と相認メ來外處、以後其管轄長官之名前を以布達可致、又人民も廳に差出文書及同斷長

官之名前を宛テ可相認事、

壬申九月廿四日

太政官

管内に布達并人民願・伺等書面之儀ニ付、別紙之通書式公布相成居り條、自今従前之書面相改、別紙書式ニ照準シ相認可差出、左の界紙持合無之者者、半紙又者百田紙ニ相認差出り共不苦り、此旨布達り事、

亥二月七日

鹿兒嶋縣令大山綱良

1207の2

一何方何村之内荒蕪地拂下之願意、

一第何區何小區土族又者平民何男養子貰請又者養子違變

之願意、

一何方大風雨又者旱魃ニ付災殃之御届、

一何方第何區何番地土族又者平民嫡子・嫡女又者次男・

次女孝養之儀ニ付具狀之御届、

一賊難ニ付即時之景況及盜取外品物之御届、

一私事云々、一乍恐奉願り云々、

此段御届申上り也、此段奉願り也、

此段奉伺り也、

第何大区何小区

明治八年乙亥何月日

士族又者平民

何野何某

大山鹿兒嶋縣令殿

令上京之節ハ次官

諸願・伺・届書等之法式、右に照準シ相認可申出、此旨相達り事、

亥二月十日

縣廳

1207の3

一管下所々漁獵場之儀、壬申十月第四十四號を以布達之通り條、各所々おひて漁獵場を私有物と看做シ、他人之漁船を相拒り者有之りハ、違令之條ニ依り相當之處分可申付り條、名前を可申出り、此旨相達り事、

二月十七日

縣令

縣下

戸長

三町

區長

1207の4

一第十三號

従前入來り越中富山賣藥之儀者藥法も正敷、殊ニ往古より賣弘り處、比日諸縣下より賣藥之者、廳下并各郷に差入賣弘、却る人命を妨害致シり儀不少、賣藥之儀

者兼の文部省御規則も有之、藥法試験之上正敷者、夫々許可之上鑑札所持致ス譯この差留り筋無之の得共、偽藥を賣買いたし、就中眼病等この害を受け者數多有之哉この相聞得り間、兼る正副戸長致注意、不正之賣藥相用りる者却る障毒を受け趣、縣民に屹と可致説諭り、尤此般限之城・垂水・知覽・栗野に病院建設も有之り條、希望之者者患者診察を可受り、此旨及布告也、

亥二月

縣令

一養蠶之儀者、後年盛大致蕃殖國益相増り様追々御布告も有之、殊に今般勸業寮も猶又布達も有之り、然處此節勸業方建設、産業着手可致り條、猶一層盛舉に到りり様人々注意勉強可有之り、右に付る者農家等には踏入、植付置り桑葉猥りに摘取、剩へ作地等踏荒しり向も有之段相聞得り付、爾後決る不法之儀屹と無之様可相心得り、此旨及布告也、

二月廿五日

縣令

布達留

第二大區小一區士族鮫島幽洞ヨリ、馬脾風并驚風之藥家

傳このり處、此節爲試三千貼文戸長役所に差出置り二付、右病患之者ハ無代銀この渡付相成度、左りの弥藥効相重、往々望之者者同人家に調合致置り二付、一貼二付一錢ツ、賣出方之願も申出、令免許り條、望之向者戸長役所に申出、無遅滞様可相度、此段及布告也、

明治八年二月

鹿兒嶋縣令

大山綱良

布達留

第貳拾貳號

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候處、自今必苗字相唱可申、尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ、新ニ苗字ヲ設候様可致、此旨布告り事、

明治八年

二月十三日

太政大臣三條實美

廳下戸長

町區長

別紙太政官第貳拾貳號之通御達相成り條、此旨及布告り也、

明治八年

三月九日

鹿兒嶋縣令大山綱良

布達留

廳下戸長

新舊公債證書賣買等ニ付、名面替之儀者規則も有之事ハ  
處、當縣之儀ハ東京隣縣ニ難準、往復旁日込相成リ儀ニ  
外條、規則通名面替差許相成リル者、右利拂勘定表面者  
勿論、諸帳簿取仕<sup>立カ</sup>方并御下渡之利足金員取調方等大ニ  
混雜ニ及、右之手續期限通難相運<sup>レ</sup>付、毎年六月・十  
二月渡分之利賦金拂濟之上者、四月十日并十月十日限り  
ニ右名面替之願書差出<sup>レ</sup>様、適宜を以相究置<sup>レ</sup>條、此旨  
布告ニ及<sup>レ</sup>事、

明治八年三月十八日

鹿兒嶋縣令大山綱良

通達留

第二十一號

町 區長

廳下戸長

管下市街沽券稅地地券書替之分、券面代價ニ不拘券狀壹  
枚ニ付五錢ツ、收入可致旨、甲戌五月第二十九號を以相  
達置<sup>レ</sup>得共、右者繼日家督并水火盜難より書替之分ニ相  
限儀ニ付、右布告者取消<sup>レ</sup>條、諸人賣買券狀書替之節者、

券面代價ニ應シ別紙定額之通上納可致<sup>レ</sup>、此旨更ニ布告  
外事、

但是迄地價十圓以上ニ付印稅五錢ツ、收入之分者、地  
價ニ應シ相當之印稅進納可有<sup>レ</sup>之、

明治八年四月十日

鹿兒嶋縣令大山綱良

規則略ス

通達留

第拾五號

戸長へ

今般醫院ニおいて、更ニ種痘課を建設ニ付、從來之種痘  
會社令廢止<sup>レ</sup>、就<sup>ル</sup>者昨年十月文部省より布達之旨ニ照  
準シ、種痘掛之醫員に免許狀相渡シ、自今一層精意を加  
へ種痘爲致、流行之惡痘豫防之趣意外條、各區正副戸長  
篤<sup>ク</sup>此旨を體シ、區内出生後七十日以上之者者無遺漏取  
調、種痘課に可差出、此旨相達<sup>レ</sup>外事、

極貧者へハ無謝料ニ有種痘爲致<sup>レ</sup>條、右躰之者者戸長よ  
り添翰を以て可差出<sup>レ</sup>事、廳下并各郷、以來免許狀所持  
無<sup>レ</sup>之者ハ施術令禁止<sup>レ</sup>外事、

八年四月四日

縣令

121202

第貳拾四號

三町區長

廳下戸長

舊藩札製造紙幣之内價位確定押印之分、此般銅貨并新紙幣を以校換之儀、先般已ニ詳細及布告外通ニハ處、來ル廿五日ハ第五國立銀行方ニおひて校換之筈外條、三町之儀者戸長引受、悉皆取纏メ致封印、明細證書相副、同所ハ朝四ツ時より七ツ時迄之間可差出外、此旨無遺漏可致布告外事、

明治八年四月十二日

鹿兒島縣令大山綱良

三町區長

廳下戸長

太政官・民部省・三井爲換券證札

右三種之官省札之儀、當五月三十一日限り通用令停止、校換之手續大藏省より布達之旨趣有之、因テ今般第五國立銀行方ニハ、來ル廿日より五月十五日限り新貨幣を以引換相成筈外條、右三種之札持合之面々、朝四ツ時ハ七ツ時迄之間、金額ニ明細書相添銀行方へ可差出外、此旨無遺漏可及布告事、

121203

亥四月十二日

第貳拾四號

明治四年九月布告絞油稅則之儀、明治七年十二月三十一日限り廢止外、此旨布告外事、

明治八年亥二月廿日

太政大臣三條實美

第一大區・第二大區・第三大區

戸長へ

別紙之通絞油稅則廢止之儀公布相成外ニ付、自今絞油稅望之者別段不及出願勝手營業可致、此旨布達外事、

明治八年亥四月十二日

鹿兒島縣令大山綱良

121204

廳下戸長

三町區長

東京其外他府縣ニ遊學并對談暇等ニハ致他出外者者、夫々順序を經許可之上、他行之儀者兼テ承知之通ニハ處、比日無許可上京等之向來有之哉ニ相聞得、殊ニ出京之者者時々東京府ニ届申出外規則も有之、旁不都合之至外條、屹と右躰之儀無之様可相心得外、尤區戸長注意いたし、

決る不束之儀有之間敷り、此旨布告外事、

明治八年四月七日

鹿兒嶋縣令大山綱良

テ本文通可相心得事、

明治八年三月廿五日

太政大臣三條實美

1213

通達留

三町  
區長

縣下  
戸長

中嶋健彦 山口孝右衛門

讚良清藏 重久雄七

右者、戊辰之役伏見・鳥羽・北越諸所戰死人數墓參、縣  
下中總代として諸所に出張、祭典執行いたし旨兼而及  
布達置り處、今般右人數に出張申付り條、戰死家族之者  
に可申渡事、

八年 四月六日

鹿兒嶋縣令大山綱良

1214の1  
通達留

第四拾四號

人民署名肩書之儀、自今貫屬或ハ管下之文字を除キ、何  
府<sup>上カ</sup>華<sup>カ</sup>族・卒・平民ト記載可致、此旨布告外事、

但從來之諸規則及び雛形中ニ掲載せる肩書之儀も、總

1214の2

第貳拾九號

府縣<sup>東京府</sup>  
を除く

行政警察規則別冊之通相定り條、本年四月一日より施行  
可致、就るハ従前捕亡吏・取締組番人等之名稱を廢シ、  
邏卒ト改稱可致、此旨相達り事、

但捕亡費ヲ改テ警察費ト稱シ、定張所并吏員配置之儀  
ハ適宜タルヘク、尤差向規則之通施行難致事情有之  
向ハ、内務省に可申出事、

三月七日

太政大臣三條實美

別紙御布達ニ基キ、取締捕亡之名稱を廢し、更ニ邏卒  
ト可改稱事、

一 警察局ヲ舊客屋ニ設立り條、以來警察局ト可稱事、

一 三町取締所令廢止、改テ警察出張所左之通設立り事、

一 下町第一警察出張所、

一 上町第二警察出張所、

一 西出町第三同出張所ト番號を以相定り事、



通達留

諸人願意等之事件ニ付、官員ハ賄賂又ハ禮物等進送ハ條、兼テ嚴命を下シ令禁止候處、既ニ先度官員之内心得違犯罪之輩有之、夫々輕重ニ應シ罰則申付ハ儀者孰レモ承知之通ニハ、然處于今舊弊相流れ、任職又ハ願濟等之節、禮物等致進送ハ者有之哉ニ相聞得、官員ニおいてハ相受ハ者勿論無之筈ハ得共、此涯進送致ハ者有之ハ、不聞、其名前相顯ハニ於テハ本人同様罰則可申付ハ條、此旨篤ク可致貫徹ハ事、

四月十四日

通達留

一人命・賊盜・鬪毆・失火其他一切不時之急事ハ、警察局又ハ老最寄之出張所ハ無遲滞可届出事、

明治八年四月九日

鹿兒嶋縣令大山綱良

第貳拾六號

三町

區長

縣下

戸長

八年六月十二日

令代理鹿兒嶋縣權參事  
田畑常秋

町區長

戸長

布達留

舊御親兵ニ出京、解隊前後、親并自身病氣等ニ歸省致ハ人員之内、貳人口御賞典不致拜戴相洩居ハ向モ有之哉ニハ間、右人員取調之上、外々同様御賞典御宛行相成ハ様上申可相成ハ間、相洩ハ向者至急別紙案文之向を以、本人より明細書同案貳通ツ、差出ハ様被相達、來ル十五日限取揃、當課へ可被差出ハ事、

八年亥六月七日

庶務課

明細書略

案文略

町區長

廳下戸長

今般醫院内ニ假救療所建設イタシ、極貧ニシテ難病ニ罹レル者拾名ヲ限リ入室差許ハ條、救療相受度者者別紙難形ニ基キ入院可致ハ、此旨及布告ハ也、

舊藩札、第五國立銀行におひて交換施行之儀先般相達  
置通外處、追々卒業之場ニ立至り外ニ付、舊藩札持合之  
者ハ、來ル七月廿日限交換可致外、此旨及布達外事、

明治八年六月十五日  
令代理  
鹿兒嶋縣權參事  
田畑常秋

1218 御系圖 忠義公

一哲丸  
一房姫 清姫 充姫 常姫四人  
一女子  
知姫

明治八年八月十五日生於鹿兒嶋、母齊彬女寧姫女(符丸)  
実母山崎拾女

1219 通達留

第四拾三號

三町區長  
廳下戸長

從來管下人民犯罪之輕重、又孝父兄親類之願ニ依り、大  
嶋其外各嶋に居住申付來り得共、右者舊藩製(制カ)より流來り  
嶋民之患害ニ相成儀不少、尤當今ニ到り撫民之御趣意ニ

基キ、各嶋之制度も都る變換シ、

朝廷に御届相成、其上嶋居住之儀、法律ニ於ても不相當  
外ニ付、以來居住者相廢シ、犯罪ハ各々其輕重ニ從て本  
刑ニ處シ、子弟之教蕩ニして父兄之命ニ背キ、其儘難捨  
置者等者、其情實を訴出處分を可受、此旨布告外事、

八年十月三日

鹿兒嶋縣令大山綱良

1220の1

御布達留

一家祿・軍功祿貳拾七萬石

内貳拾萬五千石

但現米拂之分

六萬五千石

但舊知事公御家祿并御賞典

久光公同斷 西郷吉之助外八名同斷 代金渡

一米拾七萬石

但租稅米凡積

差引三萬五千石 現米不足

右五部五厘通 現米不足

一草高千五百石

三斗六合代

所務米四百五拾九石

先ニシテ四百八拾壹石九斗五升

五部五厘通

八拾七石六斗貳升七合

右代金渡

但先石ニ付五圓九拾貳錢貳毛貳糸

三百九拾四石三斗貳升三合 現米渡

一同三百石

所務米九拾壹石八斗

先ニシテ九拾六石三斗九升

片書同斷

拾七石五斗貳升五合

代金渡り直成同斷

七拾八石八斗六升五合 現米渡り

一貳百石

所務米六拾壹石貳斗

先ニシテ六拾四石貳斗六升

片書同斷

拾壹石六斗八升三合 代金渡直成同斷

五拾貳石五斗七升七合 現米渡り

一同百石

所務米三拾石六斗

先ニシテ三拾貳石壹斗三升

片書同斷

五石八斗四升貳合 代金渡り

貳拾六石貳斗八升八合 現米渡り

一同五拾石

所務米拾五石三斗

先ニシテ拾六石六升五合

片書同斷

貳石九斗貳升 代金渡り同斷

拾三石壹斗四升五合 現米渡り

一同貳拾五石

所務米七石六斗五升

先ニシテ八石三升貳合

片書同斷

壹石四斗六升 代金渡り同斷

六石五斗七升貳合 現米渡り

右代金渡之儀者大小右ニ準ス、

一家祿六石先

内壹石九升 代金渡り同斷

四石九斗壹升 現米渡り

一同四石先

内七斗貳升七合 代金渡り同斷

三石貳斗七升三合 現米渡り

但石高ニ應シ、右之割を以拂渡之賦ニ付、

當亥秋收入方不足米之儀、去ル申年方成年迄三ヶ年平均

五圓九拾貳錢貳毛貳糸相場を以、大藏省方御下渡相成筈

御布達ニ付條、就ル者石代直成格別之低價ニ付、従前之

通現米御買入之上拂渡り儀不相整ニ付、爾后左之通取

扱可然哉、家祿高之儀者祖先方從來私宅取納之處、御一

新後御藏入ニ由是迄所務米相渡り付、右株惣現米相渡、

軍功并六石以下家祿之儀者殘米割付、不足丈代金ニ由可

相渡哉、又者家祿高澤由現米相渡可申儀至當り得共、纒六

石給與之者に代銀而已相渡り者甚難澁顯然之事付間、

別紙之割を以拂渡相當可致哉、右兩條之間可然方ニ相決、

尚又上局に上申、御布告相成度付間、御吟味給度付也、

亥十月

出納課屬

庶務課屬 後條之取扱可然也、

學務課屬 張紙 後條取扱可然、

租稅課屬 張紙 左之割合通可然致吟味付也、

聽訟課屬 張紙 左之割合通ニ由違論無之、

(本文書ハ一二二号文書ノ後半ト同文ユエ略ス)

1220の2

1221

通達留

縣下

戸長

三町

區長

先般諸郷并近在に開拓地之願申出外者有之、検査之上於

無故障者可致許可旨相達置外處、此節官員派出實地見分

之筈付條、免許ヲ受居外者者、右指令書を以更ニ租稅課

へ可申出、此旨布告外事、

八年亥十月廿日

令

1222

通達留

乙第百三拾二號

各管内ニ設置之招魂社之儀、従前其所在之地名等、種々

之社號を附シ來外向も有之付處、自今種々之社號都る相

廢シ、一般招魂社と相唱ハ様可致、此旨相達ハ事、

明治八年十月十三日 内務卿大久保利通

右之通達相成、然ルニ當縣靖獻神社名號之儀亦同様、已來招魂社と社號改名可致ハ條、此段一般ハ及布告ハ事、

八年亥十月廿四日 鹿兒嶋縣令大山綱良

廳下三大區

戸長中

御系函 久光公

明治八年十一月二日拜二麿香間祇候、

1224

御布達留

一當亥秋地租米ヲ以諸拂不足之儀、去ル申年ハ戌年迄三ヶ年平均石代金五圓九拾貳錢貳毛貳糸之相場ヲ以、大藏省ハ御下渡相成筈ハ處、石代格別低價ニ付、從前之通士族家祿・賞等一同現米買入之上拂渡ハ儀不相整、因ハ者第一家祿高所務米之儀者惣ハ現米を以拂渡儀至當ニハ得共、少祿之面々困苦ニ及可及ハ付、別紙之割を以一般ニ致平均、米金取交セ可拂渡ハ條、此旨管下ハ無遺漏布告可致事、

八年十一月二日

鹿兒嶋縣令大山綱良

1225の1

御布達留

舊鹿兒嶋藩士族家祿舊慣之通券書ヲ以賣買之伺

鹿兒嶋縣並宮崎縣管轄諸郡内ニ有之候士族、舊持高ト稱スル家祿米之儀ハ、從來官ヨリ粟米ヲ以テ給與致候他縣一般之家祿ト大ニ異リ候、元來鹿兒嶋藩ノ田制ヲ定ムルヤ、公田アリ、士族高地アリ、所謂高地トハ、舊城下ヨリ各郡郷ニ至ルマテ、其土着ノ士族八百年前、祖宗以來荒蕪又ハ不毛ノ棄地ヲ開墾耕種シタル土田ニシテ、士族互ニ賣買ヲ許シ、官ヨリ知行高名寄帳ト號スル券書ヲ交付シ、賣買スル時ハ官ニ請テ券書ノ署名ヲ改テ受授セシム、然レトモ地ニ遠近アリ、遠キハ其土民ニ佃作セシメ、近キハ躬耕スルアリ、此乃チ士族私有ノ家産ニシテ、方今ノ所謂不動産是ナリ、舊來都テ持高ト稱シ、近年ニ至リ或ハ家祿トモ云フ、然ルニ藩政中粟米渡シト相成候得共、昔時他藩其君主ヨリ支給ノ家祿トハ其實大ニ差異アリ、相比シテ論スヘカラス、所謂粟米トナル所以ノ者ハ、官ヨリ士族勢力ノ及ハサル所ニ保護ヲ加ヘ、耕種ノ時節及ヒ收穫ノ季限等ヲ公田ト齊ク督促シ、其納米ヲ暫ク官倉ニ入レ、隨テ即チ士族ニ分賦ス、只士族ト土民トノ間ニ任セ置候テハ、耕種時ヲ失ヒ收納淹滞ノ患アリ、

第一萬千五百九十二號

加之、愚民動モスレハ目前ノ作得ヲ不覺私物ト看做シ、肆マ、ニ放食暖衣シテ納米ヲ費耗シ罪戾ニ陷、故ニ官倉ニ入ル、者ハ此患ヲ防ク者ナリ、故ニ名ハ廩米ト云モ是又尋常ノ廩米ニ非ス、然ルニ元來ノ種類右通異ナル故、是ヲ他縣官給ノ家祿ト同一禁止スル時ハ、士族中忽活計ノ途ヲ失ヒ困却ニ及候ニ付、即今ニ至迄、舊來ノ名寄帳ヲ以テ賣買致シ來候間、將來賣買舊慣ノ通御聞届相成、更ニ別紙通之券書ヲ以各自所有ノ名寄帳ト交換致シ候得ハ、士族中安堵可致候ニ付御許相成度、然レハ兼テ及御届候祿高帳ト相違候ニ付、壹ケ年間賣買轉換ノ差異、年々十二月限取調、翌年二月中致進達候、就テハ地券御規則ニ做ヒ、券書壹枚ニ付印税金五錢ツ、取立、仕拂書ヲ以可及御届候條、是又御聞届相成度、此段上申候也、

但本文ニ相伺、從前持高ト稱スル種類ノ外、元來家ニ付廩米渡ノ祿モ有之、右ハ他縣一般之家ト同種ニ付、賣買ハ素ヨリ禁止ニ候、

明治八年

六月廿九日

宮崎縣參事福山健偉

鹿兒島縣令大山綱良

大藏卿大隈重信殿

伺之趣不得止事態ニ付、祿券賣買差許候條、其方法ハ當分舊慣ニ據リ處分可致、尤給與之儀ハ外縣々同様相心得、向後賣買致シ候者有之節者、雙方人名・祿高詳細記載、一ケ月宛取纏メ、其翌月限り可届出事、

但本年當省乙第百三十號ヲ以金祿調帳雛形達候通取調差出候上、祿券へ直ニ金額ヲ以記載可致、且祿税之儀モ右雛形之通課出高相定收納可致、並別紙祿券雛形之内七ヶ所貼紙之通記載發行可致事、

明治八年十一月十五日

大藏卿大隈重信印

記

〔<sup>本</sup>貼紙〕 家祿金何圓何錢何厘

同 金何圓何錢何厘

米何百何拾何石何斗何升何合

鹿兒島縣

宮崎縣第何大區小區

士族

持主何野何某

永代家産米ノ證トシ、更ニ券書ヲ與フルノ條目左之通ニ候、

〔貼紙〕 此祿券

第一 此家産米券書ハ何郷何村何門高・浮免高之譯、高何拾何石何斗何升何合名寄帳爲引替相渡、本行〔朱〕本ノマ、金祿可相渡〔貼紙〕

石數廩米ヲ以テ可相渡候、尤從前通士族中互ノ賣買差許シ候條、買受・讓渡之趣此裏ニ相認、雙方並戸長連印ヲ以テ書替可願出、割高ヲ以テ賣買致シ候儀不苦候、

〔朱〕  
〔貼紙〕 此祿券舊鹿兒島藩士族

第二 此券書當縣士族 外へ賣買・賃入令禁候、

〔朱〕  
〔貼紙〕 第三 此祿券ハ特例ヲ以賣買差許スト雖、給與ノ方法等

ハ外縣之貫屬家祿同様之儀ト可相〔朱〕得事〔心カ本ノマ、

〔朱〕  
〔貼紙〕 第四 此券書ヲ其相續人又ハ他人へ讓ル時ハ、其趣此裏

ニ記載シ願出ツベシ、

〔朱〕  
〔貼紙〕 第五 火災・盜難其外事アリテ此券書ヲ紛失セハ、受人

兩人以上ノ證印ヲ以テ縣廳ニ申立、新ニ券書ヲ願出ツベシ、

右之通候條、此旨可相心得候也、

第五十號

廳下戸長

當縣士族家祿、舊慣之通賣買之儀、別紙之通カ本マ、上申外處、今般朱書之通指令相成外條、祿券引換之儀者追可相違外、此旨布告外事、

但元來家部付六石又者四石及ヒ舊來切米ト唱へ、廩米渡ハ他縣一般ノ家祿ト同種ニ付、賣買ハ素より禁止外事、

明治八年十二月八日 鹿兒嶋縣令大山綱良

四十九號

1225の3

家祿米引當ニ、金穀買借主訴訟受理不致法則ニ、私用物同様買借不相成儀ニ付得共、内情融通之爲債主・負債主懇談之上、苦情無之様引結可致之處、即今家祿米ヲ以二重・三重借財之引當ニ致シ、終ニ聽訟課ニ訴出罪ニ陷者不少外ニ付、以來者家祿主借金利子之方ニ渡米を以可入付約定致外節者、米請取方之儀貸借人方雙方戸長連印を以出納課へ届申出外上、同引結ニ付借替等之節、前顯同様届可申出、此段無遺漏及布告外事、

明治八年乙亥十二月十二日 鹿兒嶋縣令大山綱良

廳下

第二百七號

一 本年十二月第百九拾六號布告訴訟用罫紙規則中掲載有之候訴訟用及裁許狀、左ノ見本ノ通候條、此旨布告候事、

明治八年十二月廿八日

太政大臣三條實美

罫紙見本左之通

訴訟用

訴訟文通

裁許用

右色々有之、

御布達留

第四號

三町區長

廳下戸長

時鐘之儀、別紙之通御布告相成居外處、管下人民時辰儀慣習不致儀、相改候る者却る時鐘ヲ誤之患可有之外ニ付、猶預致外得共、當今ニ到り、人民時辰儀時刻熟知ノ域到

外ニ付、御布告之通時鐘相改外處、此旨布告外事、

但本月廿日方相改外事、

明治九年子二月九日

鹿兒嶋縣令大山綱良

第三百三拾七號

一時鐘之儀、是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處、今後改る時辰儀時刻晝夜半分二十四時ニ定メ、子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ、午前幾時ト稱シ候事、

但是迄時辰儀刻割ヲ何字ト唱來外處、以後何時ト可

稱事、

明治五年壬申十一月九日

第三拾八號

自今大禮服用并軍人及ヒ警察官吏等、製規ある服着用之節を除ノ外帶刀被禁外處、此旨布告外事、

但違犯之者者其刀可取上事、

明治九年子三月廿八日

太政大臣三條實美

御布達留

一

廳下三町戸長



1229

通達留  
第廿五號

當縣に裁判所被置け段先般及布達置け處、官員到着相成、明十七日方開廳事務取扱之筈外條、出訴致外輩

廳下戸長

1228

通達留  
第二十四號

管内諸所人民開拓出願に付る者、官員實地検査之上、於無障碍者令許可來り得共、地租改正に付詮議之次第有之、本月廿五日可致採用に付、改正法整頓迄之間出願不致採用外條、此旨布告外事、

廳下戸長

明治九年四月十五日  
鹿兒嶋縣令大山綱良

1230

通達留  
第三十九號

今般地租改正に付る者、郡村耕地・宅地丈量、引續沽券稅地・土族屋敷・町屋敷共更に丈量之筈外條、此旨相達候事、

廳下并三町  
戸長

但丈量方法并日限之儀者追可相達外事、  
明治九年五月十三日  
鹿兒嶋縣令大山綱良

第一課庶務 第二課勸業 第三課租稅 第四課警保  
第五課學務 第六課出納  
客年十月三十日御達に依り、居吏生職務右之通改定候條、此旨布告外也、

明治九年子四月  
鹿兒嶋縣令大山綱良

去午前第九時より午前第十一時迄可訴出事、

但裁判所者舊聽訟課諸出入門舊臺所門前、

一裁判所に差出訴狀其他名宛之儀、自今總る左之通可相認事、

鹿兒嶋裁判所長  
大塚五等判事殿

一今般裁判所出張に付、自今刑事に關スル儀者出張檢事及び警察係に可訴出事、

右布告外事、

明治九年四月十六日  
鹿兒嶋縣令大山綱良

布達留

第四拾一號

廳下戸長

三町戸長

學齡男女不就學之者有之付る者不都合り條、滿六年方十四年之者者務テ學ニ就カシメテ様注意イタシ、追々一般之教則ヲ以教導イタシ様可取計、尤學齡外之者ニ正則懇望之者者入學不苦テ、此旨相達テ事、

但僻遠村落校之儀者此限ニアラス、

明治九年五月十五日

鹿兒嶋縣令大山綱良

第七十九號

華頂三品宮、廿四日午後第五時四十分薨去ニ付、三日ノ

問歌舞音曲等令停止、此旨布告テ事、

但日數之儀者布告到達之日ヨリ算シテ事、

明治九年五月廿五日

太政大臣三條實美

通達留

第八十五號

三品董子親王昨八日薨去被遊り條、此旨布告テ事、

但三日之間歌舞音曲令停止、東京府下八本日を、其

他之地方ハ到着之日より可算事、

明治九年六月九日

太政大臣三條實美

右御布告、六月十九日付ニ而県令ヲ布告有之

御布達留

第何大區小何區

朱書ニテ

第何大區何小區

右墨書之通是迄相認來り得共、以來朱書之通相認り様縣廳方致承知り間、可被得其意外也、

明治九年子七月廿七日

永山直次郎

一此節地租改正ニ付、銘々所持之自作地・開拓地等、名前等雛形之通木竹札相立り様、地租改正方ヲ致承知り間、此旨早々致布告外也、

明治九年子七月廿七日

戸長

雛形

凡長三・四尺、竹木適宜タルヘシ、

何番

通達留

九年子八月  
鹿兒嶋縣令大山綱良

長役所前へ新ニ掲示場建設、諸布告類三十日間致揭示外  
條、無洩可相達事、

通達留

第七十號

廳下戸長

表面  
一 田敷宅地 字何、  
何 何反何畝何拾步持上何ノ某

諸事告達類、戸長より管下江通達スル事外得共、廳下手  
廣之毎小區一通之回達ニある時日ヲ遷延シ、又問ニ者不  
通達之儀共有之哉ニ相聞得、禁令規則等三十日間ニ者必  
人民無遺漏熟知致様無之ハある者、第一民刑裁判上ニ關涉  
する事件ニ付不都合を生ずる譯ニ付、依ル今般活字版機  
械購求、即今取立方申故、落成次第諸布告類摺出し、毎  
小區一・二通ツ、可下渡外ニ付、區内へ致廻達外儀者是  
迄通ニある、尚人民通觀之ため、縣廳門前并廳下各大區戸  
長役所前へ新ニ掲示場建設、諸布告類三十日間致揭示外

1237の1

御布達留  
第四十三號

1236の2

乙第百三十二號  
(本文書ハ一二三ニ号文書ノ前半ト同文ユエ略ス)

1236の1

御布達留  
一 今般霧島神宮大少宮司外、同宮教會講社教部省江上申、  
許可ヲ得外ニ付ある者、追々各區戸長江及打合セ結社致  
度、其節不都合無之様管内一般江布達願出聞届外條、  
此旨及布告外事、  
明治九年十月廿八日  
鹿兒嶋縣令大山綱良

當縣士族始、年賀爲祝詞預仕向、早竟舊ヲ不忘ノ厚ニ出  
外情義深令喜悅外、然レトモ方今上下疲弊ノ砌、各戸出  
銀相及外儀遠慮致度外ニ付、來丑年以來無餘義相斷度外、  
依テ如此候也、  
明治九年子九月  
鳴津忠義

三大區戸長  
各郷戸長  
御中

廳下戸長

管下近來一種巫覡ノ輩有之、其名ヲ神ニ設托シ、妖妄ノ説ヲ以テ人民誑誘シ、疾病災難ヲ禳候ト唱、醫藥ヲ禁セシムル等ノ惡事有之、以ノ外之事ニ付、今後右躰所業之者令嚴禁外、左外兼有警保官吏ヨリ令查察外條、違犯之者ハ相當之處分ニ可及、此旨布告外事、

但區戸長ヨリ、區内人民吏ニ無遺漏論達可致事、

明治九年五月十七日

鹿兒嶋縣令大山綱良

一七月手形渡

從前士族

一八月渡

舊附士以下

右家祿・軍功祿五部五厘通代金拂相成、尤米之儀若右月者不相渡外間、此段布告外也、

子五月

出納課

1237の3

一此節松原神社新御造立ニ付、獻金被致度向者員數并名前相記、來月五日限拙者宅へ御遣シ可被成外、左外取揃之上、銘々名前相立一紙書相添、第一課ニ可差出外、此旨致通達外也、

子五月廿三日

戸長

1237の4

第六十三號

廳下并三町戸長

一 新器水量壹升

(研脫カ)

一同五合研

舊研ニ比較貳盃七合

同斷壹盃三合五勺

一 貳合五勺研

一 壹合研

同斷六合七勺五才

同斷貳合七勺

一 五勺研

同斷壹合三勺五才

右者今般度量衡改正ニ付、當縣内へ用來外舊研ハ、新器發賣之日より斷然廢物タルヘキ段者、客月廿九日第六拾號ヲ以相達置外通可相心得外、新器照準前件之通外條、賣買ニ於テ聊誤量無之様厚可致注意、此旨布告外事、

明治九年子七月

鹿兒嶋縣令大山綱良

1237の5

第百拾貳號

筑摩縣初左之通廢合并管轄替被仰付外條、此旨布告外事、

明治九年八月廿一日

右大臣岩倉具視

一 筑摩縣ヲ廢シ、飛騨國ヲ岐阜縣ニ合シ、信濃國ノ内ヲ

長野縣に合併、

一熊谷縣管轄武藏國ノ内ヲ埼玉縣に合、栃木縣管轄上野國山田・新出・邑樂ノ三郡ヲ熊谷縣に合、熊谷縣ヲ上野國高崎ニ移シ群馬縣ト改稱、

一濱松縣ヲ廢シ靜岡へ合併、

一若松・磐前兩縣ヲ廢シ福嶋縣へ合併、磐城國亘理・伊具・菟田ノ三郡ヲ宮城縣へ合併、

一鶴ヶ岡・置賜兩縣ヲ廢シ山形縣へ合併、

一敦賀縣ヲ廢シ越前國ノ内七郡ヲ石川縣へ合シ、同國敦賀郡并若狹國ヲ滋賀へ合併、

一鳥取縣ヲ廢シ島根縣へ合併、

一飾摩縣及豐岡縣ヲ廢シ、播磨國・但馬國兩國并丹波國多起郡・氷上郡ヲ兵庫縣へ合シ、丹後國并丹波國天田郡ヲ京都府へ併、

一三瀨縣ヲ廢シ、肥前國ノ内ヲ長崎縣へ合シ、筑後國ヲ福岡縣へ合併、

一福岡縣管轄肥前國宇佐・下毛兩郡ヲ大分縣へ合併、

一宮崎縣ヲ廢シ鹿兒嶋縣へ合併、

一香川縣ヲ廢シ愛媛縣へ合併、

一名東縣ヲ廢シ、淡路國ヲ兵庫縣へ、阿波國ヲ高知縣へ

合併、

(本文書ハ二三百ヶ文書ト同クナエ略ス)

1237の6

御布達留

第百三十三號

1238の1

府縣市街地等は迄地價百分一收稅致來り處、明治六年第  
二百七十三號布告之通地租改正致、各管内一般施行り節  
ハ、右改正ニ法準據、地價百分三ノ稅ニ改正り條、此旨  
布告り事、

甲第二號

1238の2

嗣子無之、弟ヲ養子ニ致度願出候者ハ從來聞届り處、倫理  
上不都合ノ廉有之、是迄依願聞届り分ハ其通ニテ、將來  
弟ヲ養子ニ致り儀不相成り、然共嗣子無之、弟へ家督相  
續セシムル時ハ相續人ト稱シ、養子ト稱スヘカラス、稱  
呼ハ本屬ノ通タルヘク外、此旨布達候事、

明治九年十二月二日 鹿兒嶋縣令大山綱良代理  
參事田畑常秋

甲第三號

1238の3

日向國

第十一大區 志布志 大崎 松山

第十二大區 都之城 三俣 莊内

第十三大區 高城 山之口

第十四區 高原 小林 野尻 須木 高崎

第十六區 飯野 加久藤 吉田 馬關田

右者宮崎支廳管轄ニ候處、土地ノ便宜ニ隨ヒ、區名ハ先ツ是迄通ニテ本廳直管申付ケ條、自今區戸長等伺届ハ勿論、人民願伺等從來ノ手續ヲ以テ廳ヘ可差出リ、此旨布達外事、

明治九年十二月四日 鹿兒嶋縣令大山綱良代理 參事田畑常秋

番外

廳下戸長 三町戸長

今般鹿兒嶋神道事務局ニ、

伊勢皇大神宮御分靈御鎮祭并開講式、來ル十七日ヨリ十九日迄施行候旨神宮ヨリ届出候條、此段布達外事、

明治九年十二月六日 鹿兒嶋縣參事 田畑常秋

御系圖 忠義公御子

一 哲丸

一 房姫 清姫 充姫 常姫 知姫五人

一 女子

カネ 普姫

明治九年十二月十三日生於鹿兒嶋、母山崎拾女、十一年九月五日夭亡、神號花勝見普稚姫命、

御布達留

一家祿・賞典祿改正之儀、本年八月第百八號ヲ以テ布告候處、右之内舊藩廳ニ於テ祿券賣買差許有之、從來現場賣買致タル家祿之向ニ限り、其高ノ多寡ニ不拘、總テ拾ケ年分之金高公債證書ヲ以テ一時ニ下賜、來ル明治十年ヨリ年一割之利息下渡候條、右元金消却利金下渡方等之儀者、金祿公債證書發行條例之通可相心得、此旨布告事、

家祿改正之儀、今般第百五拾二號公布之通、公債證書ヲ以被相渡筈外條、利子ハ明治十年分ハ十一月・翌年五月ニ被相渡、以後之レニ準シ年々兩度ニ下渡賦ニ付、別紙計算書之通可相心得候、此旨布達外事、

俱 舊都城縣・舊宮崎縣分製郷計算八追テ可相達外、  
九年十二月二十九日 鹿兒嶋縣令大山綱良

ケ年目ヨリ大藏省之都合ニヨリ、毎年抽籤之方法ヲ以  
テ之ヲ消却シ、都合三拾年間ニ悉皆之ヲ消却スヘシ、

一 高二百石、現米七拾七石四斗、先石ニシテ八拾壹石貳  
斗七升

一 拾年右高之公債證書、金四千八百九拾七圓八拾四錢、

一 ケ年請取分利子金四百八拾九圓七拾八錢

一 高百石、現米三拾八石七斗、先石ニシテ四拾石六斗三  
升五合

一 十ケ年右高ノ公債證書、金貳千四百八拾八圓九拾貳錢、

一 ケ年請取分利子金貳百四拾四圓八拾九錢

一 高五拾石、現米拾九石三斗五升、先石ニシテ貳拾石三  
斗壹升七合

一 十ケ年右高之公債、金千貳百貳拾四圓四拾三錢、一ケ  
年請取分利子金百貳拾貳圓四拾四錢

一 高壹石、現米三斗八升七合、先石ニシテ四斗六合三夕  
五才

一 十ケ年右高公債證書、金貳拾四圓拾九錢、一ケ年請取  
分利子金貳圓四拾四錢九厘

右之通ニ、公債證書之元金ハ五ケ年間之ヲ据置、六